

タイトル	田村正「征露日記」の世界
著者	大濱，徹也；郡司，淳
引用	北海学園大学人文論集，33：A1-A123
発行日	2006-03-20

田村正「征露日記」の世界

大濱 徹也
郡司 淳

- 一 戦場で生きた証——「征露日記」を遺す営み——
- 二 騎兵田村正の戦場
- 三 翻刻「征露日記 全」

一 戦場で生きた証——「征露日記」を遺す営み——

出征軍人の手になる日露戦争時の記録は、日清戦争時のものとくらべ、多く遺されています。その背景には、「読み書き」する義務教育の普及による識字能力の向上に加え、軍隊の内務班生活をとおし、「日誌」をつける訓練を受け、「従軍手帖」等に己が営みを記録する作法を身につけた兵隊の存在があります。軍隊生活、なかならず戦場体験は、生まれ育ってきた世間との関係を断ちきり、異質な場所で暮らす異文化体験に加え、「征

途」につくことで見聞する異国体験だけに、私的好奇心にうながされるままに、己が生存の証を認めさせたのです。日露戦争をめぐる「征露日記」「軍隊日記」等と称する記録は、戦場での日誌をもとに、「凱旋」軍人としての昂揚した思いで、私の「日露戦争史」として編集されたものといえます。本「征露日記」の作者田村正もその一人です。

田村正は、その蔵書をみるに、『明治新鐫 正文章軌範評林』『続正文章軌範評林』をはじめ、『和漢年契』『続十八史略読本』『十八史略字類大全』『十八史略沿革概図』『校訂 史記評林』『資治通鑑』の和本、『啓蒙 日本外史』等々の史書があり、大正期に刊行された村川堅固・藤本慶祐著『西洋歴史講話』、酒井勝軍著『猶太人の世界征略運動』等々を見い出すように、若き日より史書になじみ、経世歴史への関心を失わなかった百姓の一人

でした。この私的嗜みは、幼き日に受けた漢籍の素読に加え、義務教育によって身につけた文明への好奇心からくる進取の気性にささえられています。「征露日記」は、かかる田村の嗜好にうながされ、「従軍日誌」をもとに、宣戦詔勅をはじめとする関係資料を収めることで、日露戦争を生きた己が歴史を描くべく、戦後に編集されたものです。かかる作品は、一九七八年に刊行した大濱編『近代民衆の記録 8 兵士』（新人物往来社）で紹介した熊沢宗一「軍隊日誌」にみられますように、日露戦争における戦場体験を歴史として語り遺さんとする営みにほかなりません。

戦場体験の記録には、こうした田村正や熊沢宗一のように戦後に従軍日誌等をもとに整理されたものと、さきの『兵士』にとりあげた稲垣光太郎「特務曹長日誌」のように近衛野戦兵器廠に応召、戦地での兵器管理に従事した職務の証を的確に遺そうとした記録もあります。

日露戦争の記録は、田村正のように、戦勝の余映に浸り、己が戦場体験を帝国の栄光と重ねることで、従軍日誌を「日記」として浄書し、遺したものが多数を占めています。稲垣のような業務記録的性格のものは現在まであまり目にしておりません。ここには、輜重兵として戦場での兵器管理に日々従事する

ものと、戦場で戦闘に直接参加したものがもつ戦争体験の位相が読みとれます。いわば兵科からくる戦争体験の位相は戦争の記録を読む上で心すべきことです。

田村は、「従軍日誌」を「征露日記」とするにあたり、関係資料を蒐集して補強し、可能なかぎり戦場の地図を用意し、日記の記述を正確にしております。「征露日記」は、かかる準備をもとに、「日露戦役概略日記」冒頭に認めた思いでまとめられたものです。

此役ヤ、明治二十八年遼東還附ノ干渉以来、嘗胆臥薪暗寐モ尚ホ忘ル可カラザル終天ノ屈辱ニ酬へ、連戦連勝奮ニ敵手ヲシテ恐惶措ク能ハサラシメタル而已ナラズ、世界列強ヲシテ吾ガ帝国ノ実力強健ナルニ驚愕瞠若タラシメタル愉快扶絶ノ戦役ニシテ、実ニ古今未曾有ナル歴史上ノ華也、而シテ余モ亦タ幸ニ此ノ名譽ノ戦役ニ加ワルヲ得、陣中ノ寸暇ニ己ガ参与跋涉セル跡ヲ略記センヲ茲ニ摘記セル者也

田村が「日誌」を「征露日記」とする作業は、一九〇五年（明治三八）年五月一九日「夜来ヨリ熱発風邪ノ気味ナリ、益々胸部ノ牽引痛アリ、歩行困難ニ至リ受診」し、二一日に「大房身兵站病院」に入院、「重症患者」として転送、七月六日広島病院に収容されるまでの日々、後送される悔悟の思いをもって「日

誌」を整理することからはじまったと思われます。この営みは、奉天本院で療養中、本派本願寺従軍僧に心なぐさめながらも「風土病ニシテ到底急治シ難キモノト断定セラレ」「中途還送セラレ」悲運に泣く己が心情を訴えるべく、広島病院で「日誌帳ヨリ日々出来事ヲ書ヒテ院長ノ閲覽ニ供ス」との記述に読みとれます。

この「日誌」を「征露日記」とする営みは、八月一日より九月三〇日までの六〇日間帰郷療養を許され、八月四日小幡村に帰郷、「炎暑」を逃れ、八日より九月九日までの一カ月を草津温泉、沢渡温泉での湯治中に手がけたのが基本となったと思われます。「日記」を編集する作業は、帰隊後、一〇月二二日に凱旋するまでの記録として記事を整えるのみならず、後日に己が戦場で生きた証を史書にとどむべく、新聞報道に目をくばり、「日露講話談判始末」、清国在陣中に目にした見聞記と戦争の規模を整理した「日露戦役雑記」を追記することで、「征露日記」を完結します。「征露日記」は、田村家の奥座敷の袋戸棚に半ば秘匿された状態で、現在に遺し伝えられたのです。

「征露日記」に読みとれる田村正の目は、騎兵として斥候にあたる者として、ロシア兵のみならず現地「シナ人」の姿を冷静にとらえています。この間のことは、「日記」に散見する記事を

ふまえ、「清国所見」としてまとめられた世界にうかがうことができます。「清国所見」は、戦地見聞をもとに、凱旋後に学んだ知識をふまえてまとめられたものと思われます。「地勢」「気候」「植物」「動物」「土人」「性質」「風俗」「生活」「家屋」「生業」「典儀」「学童」「魚類」「官憲」「卑見」からなる記述を貫くのは、戦後に架上された知識で整理されながらも、田村正が現地で見聞した世界にほかなりません。とくに「卑見」は、日清・日露戦争下に形成されてきた日本民衆の清国「シナ」像に通徹する世界ですが、多くの兵隊の見聞記にみる感情論に無縁な理性的記述がまさっています。とくに「過去十数年此地ノ歴史経過ヲ考察スレバ、彼ノ遊女ガ晨ニ呉客ヲ送り夕ニ越客ヲ迎フルニ異ナラズ、客夫ノ者ニ真情ナクシテ奈ゾ彼等ノ真情ヲ発揮セシムヲ得ンヤ」の結句は、日本の対中、対アジア政策を想起する時、日本「臣民」と称する日本人にどれほどに「真情」をもって隣邦に交わったかを問いかけんとの思いが秘められているのではないでしようか。

田村正の日記には、大連のロシア植民都市に象徴されるヨーロッパ文明への憧憬を問い語る軍医土肥原三千代や、兵器管理者としてロシア軍の物量と質に驚愕する稻垣光太郎の目と異なり、大地を生きる百姓の目があります。この目こそは、田村が

折々に記しているように、相互の暮らしの差異を理解することで、「真情」をもって交わる方途を見出さしめるのではないでしようか。「征露日記」は、大國ロシアに勝利した余映に浸りながらも、夜郎自大ともいふべき覇者意識にとらわれていません。郷里小幡村によせる郷土愛こそは、共に大地で生きるシナ民衆の暮らしに思いをよせるとともに、「客夫ノ者ニ真情ナクシテ」と満州の植民経営に手を出さんとする國家に釘をささせもします。ここには、日露戦争下にみられたパトリオティズム(愛郷土心)とナショナリズム(愛國家心)の一体化にひそむ亀裂が読みとれるのではないでしようか。

田村正の「征露日記」は、大地に生きる知を身につけた百姓が描いた作品として読むとき、伊藤整が父の日記をもとに『年々の花』を書き、宇野千代が獣医として従軍した義父の日記をもとに『日露の戦聞書』にまとめるなど、己が文学として結晶せしめんとした世界とどのように戦争と人間をとらえているかを考える素材ともなります。ここには、日本が文明の道をひた奔るべく、一〇年ごとに営んだ戦争が日本人にとり何であったか、その戦争体験が維新復古革命によつて造形された「日本国民」にいかなる傷痕を刻印したかを問い質す場が大地を生きる声として綴られています。まさに日記にこめられた声、戦場に封じ

込められた闇を凝視することは、現在の日本を撃ち、明日を拓く方途を手にしうるのではないでしようか。いわば戦争が国民精神にいかなる棘をのこしたかは、かかる大地に生きた民の記録を己のものとして読み、歴史を追体験し、歴史を問い質すことで可能となります。ここに「征露日記」にこめられた思いの一端にふれ、解題にかえる次第です。

なお「征露日記」紹介の労は合田寅彦氏の厚情によります。合田寅彦氏は、経済学者E・F・シュマツハーが説く「スモール・イズ・ビューティフル」との思いを実践するかのごとく、茨城県八郷村に入り、現在スワラジ学園を営み、村と農業のありかたをみつめて生きる人です。氏をささえる一人が田村正の孫田村和夫氏で、その縁で日記の存在を知り、ここに紹介することが可能となりました。すべての発表を許して下さった田村和夫氏、合田寅彦氏に感謝します。

(大濱 徹也)

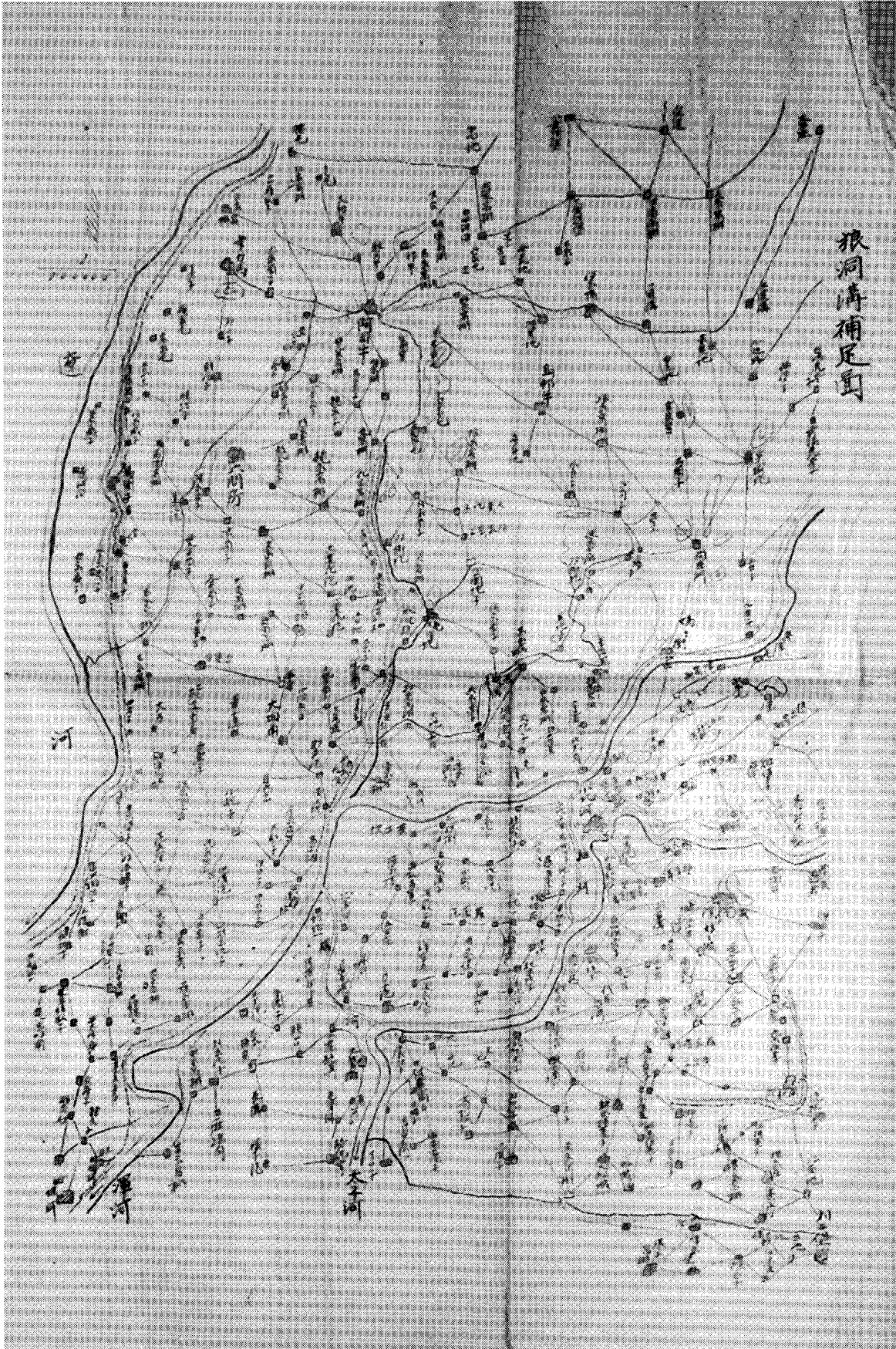
二 騎兵田村正の戦場

田村正「征露日記」は、現在の茨城県石岡市より日露戦争に出征し、金州城攻撃・南山の戦い、旅順要塞戦、奉天会戦を転戦した後、病を得て帰郷した一騎兵の記録である。

原本は、「征露日記 全」と題簽に墨書された縦二七・九センチ×横一九・五センチ、墨付き一〇二丁の和綴本で、「宣戦詔勅」「露国宣戦詔勅」「明治三十八年十月十六日発表セラレタル平和



克復ノ詔勅」「同時ニ陸海軍人ニ賜ハリタル勅語」「凱旋帰郷ノ際寺内陸軍大臣ノ頒タレタル訓示」「露帝講和詔勅」「日露戦役概略日記」「日露講話談判始末」「日露協約文」「日清条約全文」「附属条約」「日韓協約」「清国所見」「日露戦役雑記」「戦時ノ小幡村」「日露戦争記念トシテ保管スベキモノ」「凱旋后ノ景況」により構成されている。また今回は割愛せざるをえなかったが、「露帝講和詔勅」と「日露戦役概略日記」の間には、田村正本人によつて作成された「狼洞溝 十万分ノ一補足図ノ老背河・富家窩棚南方、太子河渾河子 十万分ノ一目算即図」（次頁写真参照）「狼洞溝補足図」「遼河右岸目算測図」「鉄嶺附近」「昌図近傍」「金家屯附近 十万分ノ一」「関家屯 五万分ノ一」「三家子 (1/50,000)」の表題をもつ七枚の詳細な関係地図が綴じ込まれているほか、糊がはがれたことによつて日記本体から分離した「康平県 (1/50,000)」「法庫門付近 (1/50,000)」「牛莊附近 (1/30,000)」と題する地図三枚と狼洞溝周辺を筆写した無題の地図合計四枚が挿入されている。さらに、現在田村家には、右に掲げた地図とは別に、「旅順口要塞地附近略図(1/6,000)」「中央砲台側面視図」「露軍用略図」「開原附近図」「遼河右岸目算側図」「北部」「遼河右岸目算側図」「南部」「牛莊附近 三十万分之一略図」「昌図 百万分ノ一」「大民屯周辺地図」「狼洞溝周辺



図「三家子より沙嶺堡周辺図」「太子河渾河周辺図（1/100,000）」が遺されている（「」を付した題名は筆者が便宜上つけたもの）。

本「征露日記」の作者田村正は、一八八〇年（明治一三）一月、茨城県新治郡加生野村の父駒太郎、母やすとの間に農家の二男として生まれた。同村は一八八九年の町村合併によって小幡村となり、第二次大戦後には一九五五年（昭和三〇年）の町村合併によって八郷町となるが、昨二〇〇五年（平成一七）一〇月一日をもって石岡市に合併された。小幡村は明治から昭和を通じ、全体の八五パーセントが農業に従事する純農村で、明治三八年においてみれば、戸数五六八戸、人口三三一人を数えていた（『小幡村誌』）。ちなみに田村が「日露戦役概略日記」のなかで「用ヒシ」の「ヒ」を「エ」と表記しているのは、茨城・栃木県のほぼ全域と千葉県の一部にみられる話し言葉（東関東方言）を表音化したもので、いみじくも彼の出身を物語っている。その生涯は、現在田村家に遺された相続関係書類や田村正本人に対する委任状等をもとにたどれば、次のようなものであった。

一八八〇年	一月	四日	父駒太郎、母やすの二男として茨城県新治郡加生野村に生まれる
一九〇四年	三月	七日	騎兵第一聯隊へ充員召集。同月一四日第二中隊第三小隊に編入
一九〇五年	五月	二三日	通江口兵站病院に入院
	七月	六日	帰国。六〇日間の帰郷治療を許され、八月四日帰郷。九月三〇日騎兵第一聯隊補充隊に復隊
	一〇月	二三日	帰郷
一九〇七年	九月	一八日	再婚
一九一二年	四月	一日	帝国在郷軍人会小幡村分会の評議員を委嘱される
一九一七年	八月	七日	父駒太郎隠居、家督を相続
一九一九年	五月	七日	帝国在郷軍人会小幡村分会より功勞につき感謝状と盃を贈られる
一九二一年	六月	五日	水戸専売支局煙草耕作指導を委嘱される
	一〇月	二日	小幡村第八区長に当選
	一月	一日	小幡村煙草耕作組合第一四区耕作総代を委嘱される
一九二三年	四月	八日	小幡村農会評議員に当選

- 六月一五日 生活改善実行委員に委嘱される
- 一九二四年 九月一日 下青柳尋常小学校校友会賛助会員に推薦される
- 一九二五年 一月一三日 小幡村「加生野」区内野獣駆除委員に委嘱される
- 一月 小幡村勤儉奨励委員に委嘱される
- 一月二四日 大正一五年度小作調停委員に選任される(一九三八年度まで)
- 月日不詳 小幡村村会議員に当選
- 一九二六年 四月一日 小幡村煙草耕作組合第一四区耕作総代を委嘱される
- 六月一日 小幡村穀物共同受検組合加生野組理事を委嘱される
- 一九二七年 四月一九日 小幡村農会評議員に当選
- 一月一七日 筑東立憲青年会相談役に推薦される
- 一九二八年一月三日 産業組合中央会茨城支会より、有限責任柿岡町外ヶ村販売利用組合農業倉庫設立委員に委嘱される
- 一九二九年一月二〇日 帝国在郷軍人会小幡村分会名誉会
- 四月二八日 小幡村村会議員に当選
- 一〇月一五日 小幡村公私経済緊縮委員を委嘱される
- 一九三一年 四月三〇日 小幡村農会評議員に当選
- 一九三二年 四月一日 小幡村出征応召軍人後援会評議員に委嘱される
- 一月一〇日 小幡村匡救土木事業道路委員に委嘱される
- 一九四七年 一月一七日 隠居、二男に家督相続
- 一九六六年 三月二四日 死去、享年八七歳。戒名「嶺運院 寛誉正道清居士」
- 家庭生活では一七歳の時に結婚、一男一女をもうけるが、まもなく妻と長男と死別。戦争後に再婚した妻との間に三男三女をもうけている。二つの婚姻は、長男が早世したため、家督を継ぐべき農家の総領息子としていずれも他村から嫁取りをした「村外婚」で、田村家が小幡村において高い家格をもっていたことをしめす。このことと、「征露日記」からもうかがえるような強い責任感、冷静な観察力・判断力は、日露戦争において九死に一生を得た田村をして、二期にわたる村会議員をはじめ、村

の重職を歴任させることとなったのである。

田村正の日露戦争は、一九〇四年三月六日の第二軍編成にと
もなう第一師団の動員下令に始まる。翌七日、騎兵第一聯隊へ
の充員召集令状を受け、九日に小幡村有志者の「盛ナル送別ヲ
受ケ」郷里を出立、一〇日日黒の兵營に入った。当初、「不幸受
領官ノ不注意ニテ補充隊ニ編入セラレ」たが、聯隊長名和長憲
（男爵、後に少将・貴族院議員）邸に招かれたさい、野戦軍に加
わることを直訴、聯隊長より「共ニ征途ニ上ルコトヲ許サレ」
る。かくて第二中隊第三小隊に編入された田村は、三月二三日
兵營を出立。四月二五日には宇品港を出港して故国をあとにし、
二九日朝鮮大同江岸の鎮南浦に着。五月八日同地を出港し、遼
東半島大弧山西方塩大嶺着、一二日より上陸を開始した。以後
遼東半島を南下、金州城攻撃・南山の戦いを経て六月三〇日新
たに編成された第三軍隷下に編成替えとなり、旅順攻囲戦に参
加。七月二一日には第三小隊第二分隊長に任じられる。

騎兵第一聯隊は、一八七二年に近衛騎兵隊に続き東京鎮台騎
兵隊として設置された最古の騎兵隊で、一八九一年に当初駐屯
していた丸の内外堀の一橋邸跡から目黒の近衛騎兵隊の隣に新
築された兵營に移った。一八九六年一月には、日清戦争復員
にあたり、補充隊を合して二中隊編制の大隊から三中隊編制の

聯隊となる。日露戦争動員時の編制は、中佐一（聯隊長名和長
憲）、大尉三（中隊長）、中少尉一四、特務曹長三、下士三九、
兵卒三五七、輜重輪卒九五、計五一二名に、經理部、衛生部、
獣医部、諸工長、従卒、馬卒を加えた合計五六九名であった（『日
露戦争統計集』1）。

田村正の軍歴については、軍隊手牒が失われているため、前
述のように分隊長に任じられたことが「概略日記」に記載され
ている以外、階級や服役区分等をはじめとして明らかにしえな
い。ただし一九〇〇年に満二〇歳の徴兵適齢に達していること
に加え、現在田村家に「明治三五年「一九〇二」十一月参日」
と裏書きされた第一騎兵聯隊長名和長憲の肖像写真と「明治三
五年十一月尽日」の日付をもち、「為田村正氏」と宛名書きされ
た同人の書が掛け軸として遺されていることから、この時期の
徴兵令にしたがって一九〇〇年一月一日に騎兵第一聯隊に入
營、一九〇二年一月三〇日に「現役中殊ニ勤務ニ熟シ品行方
正ナル者ニハ帰休ヲ命スルコトアル可シ」との同令第一三条に
もとづき、一年帰休兵として現役のまま退營したものと推測さ
れる。兵士の直属の部隊長である中隊長が、退營時に兵士の求
めに応じて揮毫することは少なからずあったようであるが、田
村のように聯隊長がこれを行う例は稀ではなかったか。おそら

く、歩兵大隊（四中隊編制・定員約八〇〇）よりもさらに規模が小さい騎兵聯隊では、兵士が中隊長のみならず、聯隊長とも直接親密な関係を築くことがありえたのであろう。田村が野戦行きを名和に直訴し、容れられていることをはじめ、戦地で度々行動を共にしていることや、東京帰還にさいし名和の留守宅より書生の見舞いの受けていることは、両者のこうした関係を物語っている。とくに田村の名和に対する情誼の一体感は、中表紙に一九三九年七月に没した名和の法要にちなむと思しき「壽月院満忌記念」の印が捺され、「名和男爵恵存 著者」との署名がある渡辺求『乃木大将と農事日記』（一九四二年刊）が現在田村家に遺されていることからもうかがえるように、後年まで保たれたのであった。また一方で、これらの諸事実は、田村が聯隊長の目にとまる優秀な兵士であったことをも明らかにしている。分隊長への任命は、田村が在営時に上等兵まで昇進、下士適任証書を授与されて帰休除隊し、一年間の帰休期間を経た予備役編入直後に召集されたのち、伍長に昇進したことをしめす。

田村が現役徴集された時期の徴兵事務条例施行細則（一八九七年四月改正）には、その第一条に「陸軍兵ニ編入スヘキ者ハ左ノ項目ニ依リ之ヲ選フヘシ」とし、「騎兵ハ成ルヘク馬匹ノ使用ニ慣レ体格ハ輕捷ニシテ筋肉肥滿ニ過キササル者」との規定

がみえる。この規定は、さらに日露戦を間近にした一九〇二年の改正で、「馬匹ノ使用ニ慣レ視力聴力完全身体輕捷言語明晰且他兵ニ比シ普通ノ文字ヲ解シ得ル者」と一層嚴格かつ具体的なものとなる。こうした騎兵としての要件は、「脚力強健ニシテ勞力ニ堪ヘ且成ルヘク視力聴力完全ナル者」との歩兵のそれと比較するとき、「斥候」に象徴されるこの兵科に求められたのが馬の扱いに慣れていることは当然のこととして、何よりも行動の機敏性や情報処理能力にあることが理解できる。田村自身は、身長五尺六寸余（約一七〇センチメートル）、体重一七貫（約六四キログラム）であったというから、当時としては偉丈夫ともいふべき堂々たる体格の持ち主であった。騎兵の身長制限は、一八九六年四月改正の陸海軍徴兵身長制限によれば、砲兵・工兵が五尺四寸以上であるのに比し、歩兵等と同じく五尺二寸以上にすぎない。したがって田村は、体格的には日本の軍馬のありようからみても、必ずしも騎兵向きでなかった。しかし彼には、一八九〇年前後の農村にあつては高学歴といふべき高等小学校を卒業、さらに石岡町にあつた篤信舎の松崎遠の下で漢学を学んだという素地があつた（合田寅彦「田村正『征露日記』を読む」へ八郷村文化誌『ゆう』No.12）。この素地こそが「概略日記」を貫く客観的な状況把握能力や、冷靜かつ果敢な判断力

と行動力を養うことで、田村を優秀な騎兵下士たらしめることとなったのである。

騎兵は、中世には「軍の主兵、戦場の王者」と称されたが、近代以降小銃・火炮など火力兵器の発達によって小銃を扱う歩兵と火炮によって直接これに協力する砲兵にその地位を譲り、両者を補助・支援する兵種となった。その任務は、専任とされた「搜索」をはじめ、主力軍の所在行動を隠蔽しその企図を秘匿するとともに軍の行動を安全かつ自由にする「警戒」や、軍の連絡のための「通信・連絡」を主とし、さらに機動力を利用して敵後方深く進入、交通・通信施設その他を破壊するなど主力部隊より遠く離れて独立急進する「挺進行動」、乗馬戦・徒歩戦による「戦闘」があった（『日本騎兵史』上）。とくに田村が召集された騎兵第一聯隊は、旅順攻囲戦において第三軍の最右翼、奉天戦において満州軍の最左翼に各々配された第一師団に所属しただけに、他の師団騎兵隊とは異なり、「騎兵の父」といわれる少将秋山好古等が率いた騎兵旅団や騎兵集団にほとんど属することなく、師団とともに行動、「搜索」「警戒」を任務とすることが多かった。したがってその活動は、騎兵の運用にかかわる語句の使用頻度を「概略日記」にみるに、「斥候」が六七と最も多く、「搜索」が五六でこれにつき、以下「警戒」四八、「伝

騎」二八、「連絡」一六、「徒歩戦」八と続くように、「戦史」に華々しく語られる「挺進行動」「戦闘」とは無縁の、しかしながら時に戦争の勝敗を決定づける「情報戦」に多くがさかれていたのである。その一端は、旅順攻囲戦において、「攻囲軍の右側鳩湾方面にあつて右側背の警戒中海上よりの敵側謀者の潜入、謀略活動の詮策撲滅、密輸による敵物資の警戒逮捕に任じ、これに側方よりするわが攻城砲の射弾の観測、目標の選定に努め」（『日本騎兵史』下）たことにかがえる。とくに一時、聯隊長代理となつた中隊長南次郎（大尉、後に大将、陸軍大臣・朝鮮総督）が行つた重砲の射弾の観測修正は、二〇三高地攻略に利すること大であつたという（『日本騎兵史』上、「南次郎」）。火炮の発達によって「視線の優位」の獲得が戦場の帰趨を分かつのは、後の欧州大戦において決定的となるが、いわば騎兵第一聯隊は第一師団のみならず、第三軍全体の目として働いたのであつた。

しかし田村の属する第二中隊ならびに第三中隊は、旅順攻略を待たず、第三回総攻撃開始の直前にあたる一月一七日、「野戦軍ニ参与スベシト」の命令により、遼東半島を北上。一二月九日には遼陽南方の黄泥窪に達し、これ以後主に満州軍の左翼後方にあつて警戒・搜索にあたることとなる。奉天会戦では、

二月二四日にいったん騎兵第二旅団長(旅団長・少将田村久井)の指揮下に入り、田村支隊として軍の最左翼に位置し、奉天方面に向け北上するが、三月二日には第二旅団の指揮下をはなれ、独立騎兵として黒溝台会戦後新たに満州軍総司令部の隷下に編入された第三軍の左翼縦隊となった第一師団の左側面警戒、側背掩護の任につく。

第三軍は、二月二六日より、ロシア軍の退路を遮断し、これを包囲・殲滅する企図の下に奉天西方において繞回運動を開始、北上する。日本軍は三月一日を期して総攻撃を開始、第三軍も包囲攻撃に移るが、ロシア満州軍総司令官クロパトキンが日本軍の企図に気づき、ロシア軍正面を第三軍に向けたため、連日その猛攻にさらされた。そのため田村の独立騎兵も、主に奉天北方のロシア軍後方にあつて搜索・警戒に従事、時に「筆談」を用いて情報の収集にあたるなか、連日優勢なロシア軍部隊と遭遇、「徒歩戦」による戦闘を繰り返している。かつロシア軍の退路を遮断すべく、鉄道破壊を目的とした決死隊を三度組織、七日ようやくこれに成功している。九日には、ロシア軍の反攻によつて七日以来壊滅的な損害を蒙った中央縦隊の第九師団が第一線を離脱、奉天北方に去り、第三軍最左翼に位置することとなつたためその指揮下に入り、「土塵」(黄塵)が吹きす

さび、「砲丸又四辺」するなか、日本軍の包囲を逃れようとするロシア軍との間で激しい銃撃戦を演じた。この日第三軍は、「概略日記」の記事からもうかがえるように、第九師団の第一線離脱によつて新たに左翼延伸のため投入された予備隊の後備歩兵第一旅団、ついで第一師団までもが潰乱敗走するという危機的状況に陥つたのであつた(大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』)。日本軍は、翌一〇日ロシア軍が日本軍の包囲を回避して鉄嶺——哈爾濱方面への退却したため、七万もの死傷者を出しながら奉天を制圧するも、ロシア野戦軍主力の撃破という戦略目標を達成することはできなかった。

奉天会戦後の五月一日、「夜来ヨリ熱発風邪ノ気味ナリ、益々脚部ノ牽引痛アリ、歩行困難ニ至」ると「概略日記」に認められているごとく、脚氣が田村を襲う。二一日、大房身兵站病院に入院。翌日以後、後方へと病院を転々としていく。そしてついに六月三日、大連兵站病院にて内地還送を命じられ、ここに田村正にとつての日露戦争は実質的に終わりを告げたのであつた。

田村正は、軍隊の後方や側面において、あるいはその「尖兵」として日露戦争の「情報戦」にたずさわつた。「征露日記」は、確かに騎兵という特殊な兵種に属した兵士の記録として稀少で

あるのみならず、その伶俐な観察と的確な文章表現において、これまでに刊行された多くの従軍記録のなかでも傑出した作品であるように思う。なるほど田村正という人は、戒嚴令下の帝都東京に「検問所アリ、歩兵十余名宛天幕ヲ張りテ警戒スレトモ皆閑ニシテ何トナク間ガ抜ケテ見ユ」と、すでに戦争の狂騒が過ぎた後の国家国民の弛緩と時代の閉塞状況を読みとるほどに、鋭敏な感覚の持ち合わせていた。しかし、作者が表紙はおろか本文にすら名前を残すことを拒否したこの日記からは、それゆえにあくまで己一個の心のうちに、戦場の日々を確かめようとした一人の人間の思索の跡をこそ、まず読みとるべきであろう。「征露日記」を編む作業とは、田村にとり、小隊長川邊中尉（七郎、茨城県出身、一九〇五年八月二四日戦死）をはじめかつて戦場で行動を共にした戦友の多くを失ったがために、「中途還送」が負い目として意識されているように、ある苦渋をもともなうものであったからである。私はそのことに心うたれる。

（郡司 淳）

三 翻刻「征露日記」全

凡 例

- 一、翻刻にあたっては、おおむね原本の体裁に従ったが、闕字は一字あけとし、平出は改行した。また、読点・並列点を適宜施し、月日・天気・事項の間はそれぞれ一字あけに統一した。
- 一、漢字は人名以外、原則として常用漢字体のあるものはこれを用いた。変体仮名は現行の平仮名に改め、𠂔・𠂕などの合わせ字は、トキ・トモなどにひらいて記した。
- 一、文字の異同や脱字の指摘など編者が施した傍注は「」に入れた。なお誤字については正字を傍注で示すか、「ママ」と注記したが、明らかな誤字で頻出するものは、初出以外全て訂正している(例 兵砦↓兵站、高梁↓高粱、叟↓艘、侍ツ↓待ツ)。
- 一、「へ」「エ」と発音されるもの) および「ヒ」「イ」と発音されるもの)と「エ」の混用はそのままとし、とくに注記を施さなかった。

〔表紙〕
征露日記 全

宣戰詔勅

天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本国皇帝ハ忠実勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ露国ニ対シテ戰ヲ宣ス朕ガ陸海軍ハ宜シク全力ヲ極メテ露国ト交戦ノ事ニ從フヘク朕ガ百億有司ハ宜シク各其職務ニ卒ヒ其
権能ニ応シテ国家ノ目的ヲ達スルニ努力スベシ凡ソ国際条規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ尽シ遺算ナカランコトヲ期セヨ

惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列国ト友誼ヲ篤クシ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各国ノ權利利益ヲ損傷セズシテ永ク帝国ノ安全ヲ将来
ニ保障スベキ事態ヲ確立スルハ朕ノ夙ニ以テ国交ノ要義トナシ且暮敢テ違ハサランコトヲ期ス朕ガ有司モ亦タ能ク朕カ意ヲ体シテ
事ニ從ヘ列国トノ關係年ヲ逐テ益々親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露国ト釁端ヲ開クニ至ル豈ニ朕カ志ナラムヤ

帝国ノ重キヲ韓国ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ル而已ナラズ韓国ノ存亡ハ実ニ帝国ノ安危ノ繫ル所タレ
バナリ然ルニ露国ハ其ノ清国トノ明約及ヒ列国ニ累次ノ宣言ニ拘ラズ依然滿州ニ占拠シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之レヲ併吞
セントス若シ滿洲ニシテ露国ノ領有ニ帰センカ韓国ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦タ素ヨリ望ム可カラズ故ニ朕ハ此ノ機

ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持センムコトヲ期シ有司ヲシテ露国ニ提議シ半歲ノ久シキニ互リ屢次折衝
ヲ重ネシメタルモ露国ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ迎ヘズ曠日弥久徒ラニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱導シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ

増大シ以テ我ヲ屈從セシメムントス凡ソ露国ガ始メヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露国ハ已ニ帝国ノ提議
ヲ容レズ韓国ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝国ノ国利ハ將ニ侵迫セラレントス事茲ニ至ル帝国カ平和ノ交渉ニヨリ求メントシタル将来
ノ保障ハ今日之レヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠実勇武ナルニ倚頼シ速カニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝国ノ光榮ヲ保
全センコトヲ期ス

御名 御璽

明治三十七年二月十日

露国宣戦詔勅

朕ガ忠実ナル臣民ニ左ノ事項ヲ宣ス

朕カ旨トスル平和ヲ維持スル目的ヲ以テ朕ハ東洋ニ於ケル静謐ヲ鞏固ナラシムルニ全力ヲ尽シタリ此ノ平和ノ目的ヲ以テ朕ハ韓国ノ事態ニ関シ両帝国ノ間ニ現存セル協約ヲ改定セントノ日本政府ノ提議ニ対シ同意ヲ与ヘタリ然ルニ該問題ニ付キ開カレタル商議ハ未タ終了セサルニ日本ハ朕カ政府ノ最近ノ^回解答ニ於テ為シタル提議ニ接スルヲ^待侍タズシテ露国トノ商議及ヒ外交ノ断絶ヲ知照シ来レリ

此ノ外交断絶ハ即チ軍事的行動ノ開始ヲ意味ストノ予告ヲ与ヘズシテ日本政府ハ其水雷艇ヲシテ旅順口砲壘ノ外側ニアリタル朕ノ

内閣総理大臣	伯爵	桂	太郎
兼内務大臣			
海軍大臣	男爵	山本権兵衛	
農商務大臣	男爵	清浦	圭吾
大蔵大臣	男爵	曾根	荒助
外務大臣	男爵	小村寿太郎	
陸軍大臣		寺内	正毅
司法大臣		波多野敬直	
通信大臣		大浦	兼武
文部大臣		久保田	讓

艦隊ヲ突然襲撃セシメタリ

朕カ太守ヨリ此ノ報告ニ接スルヤ直ニ日本ノ挑戦ニ応ズヘキコトヲ命シタリ

朕ハ此ノ決意ヲナスニ当リ深ク上帝ノ救護ヲ祈リ朕カ臣民カ其祖国ヲ防守スルカ為メ皆等シク趨リテ朕ノ命ニ赴クヲ疑ハズ朕ハ偏ニ朕ノ名誉アル陸海軍ニ上帝ノ加護ヲ祈ル

西曆一千九百〇四年二月十日

聖彼得堡ニ於テ ニコラス二世

明治三十八年十月十六日発表セラレタル平和克復ノ

詔 勅

朕東洋ノ治平ヲ維持シ帝國ノ安全ヲ保障スルヲ以テ国交ノ要義トナシ夙夜懈ラス以テ皇猷ヲ光顯スル所以ヲ念フ不幸客歲露國ト鬪端ヲ開^啓キシニ至ル亦夕寔ニ国家自衛ノ必要上已ムヲ得サルニ出タリ開戦以來朕カ陸海ノ將士ハ内籌画防衛^備ニ勤メ外進攻出戦ニ勞シ万艱ヲ冒シ殊功ヲ奏ス在廷ノ有志帝國議會ト亦タ善ク其ノ職ヲ尽シテ以テ朕カ事ヲ獎メ軍國ノ經營内外ノ施政^設其ノ緩急ヲ愆マラズ億兆能ク儉ニ克ク勤メ以テ国費ノ負荷ニ任シ以テ費用ノ供給ヲ豊ニシ挙國一致大業ヲ贊襄シテ帝國ノ威武ト光荣トヲ四表ニ発揚シタリ是レ固ヨリ我カ皇祖皇宗ノ威靈ニ頼ルト雖モ抑モ亦タ文武臣僚ノ職務ニ忠ニ億兆民庶ノ奉公ニ勇ナルノ致ス所ナラスムハアラズ交戦二十閱月帝國ノ地歩已ニ固ク帝國ノ国利已ニ伸^伸ヒ朕ノ恒ニ平和ノ治ニ汲々タル豈徒ニ武ヲ窮メ生民ヲシテ永ク鋒鏑ニ困マシムルヲ欲センヤ

嚮ニ亞米利加合衆國大統領ノ人道ヲ尊ヒ平和ヲ重スルニ出テ、日露兩國政府ニ勸告スルニ講和ノ事ヲ以スルヤ朕ハ深ク其好意ヲ諒トシ大統領ノ忠言ヲ容レ乃チ全權委員ヲ命シテ其ノ事ニ当ラシム爾來彼我全權ノ間数次會商ヲ重^重ネ我ノ提議スル所ニシテ交戦^{始ヨリ戦}ノ目的タルモノト東洋ノ治平ニ必要ナルモノトハ露國其ノ要求ニ応シテ以テ和好ヲ欲スルノ誠ヲ明ニシタリ朕全權委員ノ協定スル所ノ

条件ヲ覽ルニ皆善ク朕カ旨ニ副フ乃チ之レヲ嘉納批准セリ朕ハ茲ニ平和ト光榮トヲ併セ獲テ上ハ以テ祖宗ノ靈鑑ニ対ヘ下ハ以テ不
 續ヲ後昆ニ貽スヲ得ルヲ喜ヒ汝有衆ト其譽ヲ偕ニシ永ク列國ト治平ノ慶ニ頼ランコトヲ思フ今ヤ露國モ亦夕已旧盟ヲ尋テ帝國ノ友
 邦タリ則チ善隣ノ誼ヲ以テ更ニ益々敦厚ヲ加フルコトヲ期セサル可ラズ

惟フニ世運ノ進歩ハ頃刻息マズ國家内外ノ施政ハ一日ノ懈ナカラムコトヲ要ス偃武ノ下益々兵備ヲ修メ戰勝ノ余愈々治教ヲ張り然
 シテ后始メテ能ク國家ノ光榮ヲ無疆ニ保チ國家ノ進運ヲ永遠ニ扶持スベシ勝ニ狃レテ自ラ裁抑スルヲ知ラズ驕慢ノ念從テ生スルカ
 若キハ深ク之レヲ戒メサル可カラズ汝有衆夫レ善ク朕カ意ヲ体シ益々其事ヲ勤メ益々其ノ業ヲ励ミ以テ國家富強ノ基ヲ固クセムコ
 トヲ期セヨ

同時ニ陸海軍人ニ賜ハリタル

勅語

朕カ親愛スル帝國陸海軍人ニ告ク

朕嚮ニ汝等ニ示スニ軍人ノ精神タル訓規五ヶ条ヲ以テシ明治廿七八年戰役終ルヤ深ク邦家ノ前途ヲ念ヘ更ニ汝等ニ訓示スル所アリ
 爾來十閱年朕カ陸海軍ハ世界ノ進運ニ伴ヒ經校大ニ其歩ヲ進メタリ不幸ニシテ客歲露國ト釁ヲ啓キシヨリ汝等協力奮勵各其務任ニ
 從ヒ籌画宜シキヲ得攻戰機ヲ制シ陸ニ海ニ曠古ノ大捷ヲ奏シ帝國ノ威武ヲ宇内ニ宣揚シ以テ朕カ望ニ副ヘリ

朕ハ汝等忠誠勇武ニヨリ出師ノ目的ヲ達シ上ハ祖宗ニ対シ下ハ億兆ニ臨ミ天職ヲ尽スコトヲ得タルヲ懌ヒ深ク其戰ニ死シ病ニ斃
 レ又ハ癡癩トナリタル者ヲ悼ム

朕今露國ト和ヲ講ス惟フニ吾カ軍ノ名譽ハ帝國ノ光榮ト共ニ更ニ汝等ノ責任ヲ重カラシム國運ノ隆盛亦タ汝等ノ努力ニ待ツコト大
 ナリ汝等其レ能ク朕カ意ヲ体シ留マリテ軍隊ニ在ル在ルモノト散シテ郷閭ニ歸ル者トヲ問ハズ常ニ朕ガ訓意ヲ服膺シテ朕カ股肱タ
 ルノ本分ヲ守リ益奮勵以テ報効ヲ期セヨ

凱旋帰郷ノ際寺内陸軍大臣ノ頒タレタル訓示

今回ノ戦争ハ吾ガ国開闢以来未曾有ノ大戦争ニシテ敵ノ兵力優勢ナリシコト多キモ拘ラズ戦フ毎ニ勝タサルナク偉大ナル功績ヲ挙ケタルハ 大元帥陛下ノ御稜威ニ由レルコト勿論ナルモ亦我將校下士卒ノ忠勇義烈ノ結果ニ外ナラズ今ヤ 陛下ハ長ク戦争ヲ継続スルコトノ国家ノ利益ニ非ルコトヲ思シ召サレ人道ト文明トノ為メニ速カニ干戈ヲ戢メ給ヒ久シク戦場ニ勤勞セシ我カ軍隊ハ茲ニ凱歌ヲ奏シテ帰ルニ至レリ

陛下ノ仁徳ノ至大ナルヤ將卒ノ之ノ戦死傷セシ者ヲ憐ミ給ヘ法令ニ照ラシテ遺族ヲ救恤セシメラレ勲功ヲ建テシ生存者ニ對シテハ已ニ夫々賞詞ノ詮義ヲ命セラレタリ

抑モ講和ノ事タルヤ

陛下ノ大権ニ属スルモノナレバ軍人タルモノハ唯 陛下ノ命ノ儘ニ進退スベシ仮初ニモ和戦ノ可否ヲ口ニスルガ如キハ本来ノ分限ヲ弁ヘサル僻事ニテ固ヨリ規律ノ許サミル所ト知ル可シ世間或ハ今回ノ講和ニ不満ヲ抱クモノナキヲ保セズト雖モ苟モ 陛下ノ股肱タル軍人ハ儼然トシテ本分ヲ守リ決シテ其レ等ノ議論ニ耳ヲ傾クルコト有ヘカラズ今ヤ戦争ハ已ニ畢リ我カ軍人ノ名誉ハ世界ニ発揚セリ今后將卒ノ引続キ隊伍ニ留マル者ハ益々職務ニ精勤シ解カレテ郷里ニ還ルモノハ恭謙ニシテ即得ノ名誉ヲ失ハズ各自ノ本業ニ勉励シ出テ、ハ忠勇ノ軍人タリ入テハ誠実ノ良民タルコトヲ期スベシ加之国運ノ伸張ニ伴ヒテハ将来国際ノ形勢何時変態ヲ生シ再ヒ兵馬ヲ動カス必要有ルヤモ測リ難キカ故ニ常ニ能ク軍人ノ品性ヲ保持シ一旦緩急アルトキハ一令ノ下ニ直ニ起テ国家ヲ救護スルノ覚悟ヲ忘ル可カラズ

明治三十八年十月十七日

陸軍大臣 寺内正毅

露帝ノ講和詔勅

上帝ハ我カ国ノ盛名アル軍隊ガ壯烈雄大ナル敵軍ト頑強ニ対陣シ壯勇ノ典型ヲ示セル事一再ナラズル今回ノ慘戦ニ於テ我カ祖国ニ激甚ナル艱苦及ヒ否運ノ打撃ヲ降シ給ヘシカ此ノ痛マシキ戦役今ヤ終了ヲ告ゲ我ガ帝国ノ東部ハ爾今我國ノ友邦タル日本帝国ト平和善隣ノ道ヲ保チ以テ益々發達ヲ致サントス今茲ニ平和克復ヲ宣示スルニ臨ミ朕ハ国民ノ選良ト共ニ国家隆昌ノ為メニ成就ヲ期スル所ノ鴻業ニ対シテ上帝ノ宣ハ護ヲ与ヘ給ハンコトヲ祈願シ朕ガ臣民モ亦タ朕ト与ニ俱ニ之レヲ祈願スベキヲ疑サルモノナリ

聖彼得堡 ニコラス二世親書

「地図の綴込・挿入あり」

日露戦役概略日記

此役ヤ、明治二十八年遼東還附ノ干涉以来、嘗胆臥薪嘗胆モ尚ホ忘ル可カラザル終天ノ屈辱ニ酬ヘ、連戦連勝菅ニ敵手ヲシテ恐惶措ク能ハサラシメタル而已ナラズ、世界列強ヲシテ吾ガ帝国ノ実力強健ナルニ驚愕瞠若タラシメタル愉絶扶絶ノ戦役ニシテ、実ニ古今未曾有ナル歴史上ノ華也、而シテ余モ亦タ幸ニ此ノ名誉ノ戦役ニ加ワ、ルヲ得、陣中ノ寸暇ニ己ガ参与跋涉セル趾ヲ略記セシヲ茲ニ摘記セル者也

明治三十七年三月六日午前十時出征、第二軍ヲ編成セラレ、第一・第三・第四師団ニ動員令ヲ發セラル

三月七日 午前二時騎兵第一聯隊ニ充員召集ノ令状ニ接シテヨリ、生還ヲ期セヌ身ノ万事ヲ所理シ、心ニ掛ル浮雲モナク出発ノ日ヲ待チヌ

同八日 雨 此日小幡村有志者ノ送別会ニ招カレ会スル者、砲鬼沢・歩宮部ト余ト三名

同九日 全村有志者ノ盛ナル送別ヲ受ケ目出度出発、付添大塚・宇田外兄ト共ニ石岡停車場ヨリ乗車、上野ニ着シ、心床シク帝都ノ地ヲ踏ミ、金龍山下ノ一旅店ニ投ス

同十日 午前十時目黒村騎兵第一聯隊ニ着、坐ロニ旧時ノ感ニ打タル、相集マル者皆旧友ナラザルナク互ニ決死ヲ語ルモ頼母モシ、然ルニ不幸受領官ノ不注意ニヨリ補充隊ニ編入セラレ道玄坂附近ノ民舎ニ宿營スルコト、ナリヌ

同十一、二日 空シク戦友ト宿舎楼上ニアリテ壮語ヲ飛ハス

同十三日 此日聯隊長名和少佐殿中佐ニ任セラル、夜ニ入りテ同邸ニ至リ旧時ノ恩ヲ謝シ旁々野戦隊ニ加ワラン事ヲ願フ、隊長殿モ非常ニ喜ハレ共ニ征途ニ上ルコトヲ許サレ、饗応ヲ受ケ歛ヲ尽シテ宿舎ニ還ル

同十四日 動員完結第二中隊第三小隊ニ編入、小隊長坂本少尉殿

同十五日 出発ノ準備、中隊長・聯隊長・師団長ノ武装検査等アリ、野外演習・射撃演習ヲナシ廿一日ニ至ル

同廿二日 早起、兵舎前庭ニテ乗馬ニテ聯隊全部ノ写真ヲ取り了リテ、各中隊兵舎前ニテ記念写真ヲ徒歩ニテ取り、再ヒ武装整列ヲナシ中隊長指揮ノ下ニ多年住ミ慣レシ兵舎ニ向テ捧銃ノ敬礼ヲナス、号令悲絶壯絶、了リテ大宴会ニ移リ、午后二時屯営出発、蓋シ聯隊ハ同日午后五時ヨリ翌午前八時ニ至ル五列車ヲ以テ輸送セラル

途上市民ノ万歳ニ送ラレ新橋着五時三十分、同八時発ノ列車ニ塔塔乗品川・川崎少休止、平沼停車場ハ徐行ス、蓋シ横浜市民ガ非常ナル送別ノ為メニシテ其ノ盛大ナル言辞ニ尽シ難シ、夫レヨリ半睡半醒ノ間ニ沼津ニ着、人馬ノ大休止一時間、水飼ヲナシ朝食ヲ喫ス

同廿三日 午前五時沼津発、藤沢・鎌倉尚ホ夢ノ間ニ過キ、鈴川駅ニ就ク頃ハ旭日ハ伊豆半嶋ノ上ニ輝キ富士ノ高根ハ全ク白雪ニ包マレテ皎々トシテ車窓ニ入りテ来リ睡眠ノ覺ムルヲ感ズ、夫レヨリ名ニ負フ東海道ノ名勝地タル遠州灘ノ諸港、海中ニハ三保ノ松原ヲ遙カニ望ミ清見寺カ聖賢寺下ヲ過キ天龍・大井ノ諸大橋ヲ渡リ静岡少休止、浜松ニテ大休止、昼飯ヲナシ食堂ニテ同地篤志婦人ノ征露軍歌奏樂アリ、唱声樂声恰モ人間界ヲ脱スルノ感アリ、午后五時名古屋ニテ大休止、遙カニ旧城趾天主閣ノ金ノ「サチホコ」ヲ望ミ、大垣附近ハ夜ニ入りテ、名ニ負フ近江ノ八景ハ夢路ニ辿リヌ

同廿四日 京都有着、午前三時大坂駅ニテ人馬ノ大休止、神戸・兵庫ノ諸港ヲ望ミ湊川神社ヲ遥拝シ、播磨・明石ノ勝景ヲ見ツ、姫路ニテ午食、岡山着夕食

同廿五日 午前三時安芸国広島市ニ着、下車セリ

途上経来ル所各停車場ニテ赤十字社員・篤志看護婦・僧侶・有志者・楽隊等ノ設ケナキハナク、国民ノ熱誠ノ厚キニ対シテハ眼中又何等ノ羈心ナシ、宿舍ハ天満町捧鼻三九六高橋元吉、厩舎ハ川添川原ニ急造セシ者ナリ、余ハ聯隊本部松谷常造方ニ隊長殿ト舎営ス

同廿六日ヨリ 広島市附近ニテ野外演習、東西錬兵場ニテ小・中・聯隊教練等ヲナス

同三十一日 厳嶋参詣ノ目的ヲ以テ午前八時三十分已斐駅ヨリ汽車ニテ宮嶋駅ニ至リ、夫レヨリ汽船ニテ宮嶋ニ至ル、広島湾水平カニ青々タル蒼波ヲ破リテ渡ル、乗客皆甲板上ニ出テ船室ニ在ルモノナシ、着スルトキ午前九時、海潮正ニ満チ遙カニ大鳥居ヲ海中ニ望ミ宮殿浮宮ノ如シ、此日第二中隊ハ草津村ヨリ漁船ヲ浮ヘテ渡ル、各兵士皆上衣ヲ脱シ競漕ヲナシ中々愉快、案内者ニヨリテ宝物ヲ拝看シ終リテ楓谷大元公園ニ至ル、書遂閑雅所々鹿群ノ戯ル、ヲ見ル、白雲洞ニテ小宴ヲ開キ午食后市街ヲ見ル、名所ニハ千疊敷名物ニハ松ノ木細工アリ、中々繁盛、帰路又帆船ヲ雇テ還ル

四月一日ヨリ 日々規定ノ演習ヲナシ滞在

同三日 東錬兵場附近ニテ聯隊教練中、第三中隊ノ兵負傷入院ヲナス

同十日 舎主高橋元吉病氣ニヨリ同町九九寺元定之進方ニ移レリ

滞在中石岡町出身佐谷斗戸一郎氏ト語ル、同氏ハ日清役ニモ出征セラレタル人ナリ、和歌ヲ能クセラル、贈答二三首アリ

三歳の童子を始め七十の翁めでたき万歳の声

まげかちの柱ともなるものみ兵辛苦の程ぞ思へ遣られる

逢へ見ざる昔ぞ今は忍はるゝ八重の汐路にぬらす旅衣

今迄は短かき夢を見にけりと思にたてよ赤繩の糸

天さがる磯辺の賤の乙女子に似なくもやらぬふこの雲の井

同廿日 聯隊長殿隨行、江波ノ山文樓ニ遊フ、江波ハ宇品港ノ西方ニ在リ天満川口ナリ、同樓ニハ頼山陽ノ白魚ありの字ヲ書セル柱
隠アリ、白魚の名物海ニ監^臨ミ川ニ沿タル風光絶佳の旗亭タリ

江波がたや覆の中の貝拾へ

同廿一日 此日ヨリ第二軍輸送ヲ始ム、寺元家ニ残ス

御家の庭に生へ立つ松か枝は年ふる毎に緑ますらん

令嬢浅子女史麝香入腕環ヲ送ラル、厚意ヲ謝シ

誠心をこめてぞぬへしうでわこそ吾れを励ます種子とこそすれ

なさけある君が賜へしうでわには一針毎にまことこもれる

同廿四日 出発命令アリ、諸般ノ準備ヲナシ別宴ヲ開ク

同廿五日 夜来ヨリ雨一層ノ烈シサヲ増シ、午前四時三十分広嶋出發、宇品港ニテ同七時ヨリ搭載ヲ初メ午后四時ニ結了ス、聯隊本部、第一・第二中隊ハ安芸丸、第三中隊ハ万国丸、五時三十分出帆宮嶋沖ニ淀泊ス

同廿六日 雨未タ休マズ、午前五時出帆、周防灘ヲ過クル頃風浪中々高く、夫レヨリ馬関海峡ハ平穩ナレトモ日已ニ暮レントシ小運送船ハ皆海狭内^峽ニ淀泊ス、吾ガ安芸丸ハ運送船中ニテモ良好ナル船ナレバ少シモ速力ヲ減セズ行進ヲ続ケタリ、名ニ負フ玄海灘雨サへ降り頻リ舷首ニ当リテ碎クル大浪飛沫ハ飛テ甲板ヲ洗へ壯絶蒼然タル暮色ト共ニ間モナク本土ノ黑影ヲ見スナリヌ、対州沖ヲ通過スル頃ハ全ク夜ニ入りテ遙カニ灯台ノ光ヲ見ル而已

同廿七日 晴レ 午前六時起床スル頃ハ已ニ朝鮮巨文嶋ノ附近ニ在リ、午后湿雲又来リ、四時頃豊嶋沖ニ差カ、リ転夕日清役ノ当時ヲ近想セラル、此夜月明カニ風静カニシテ船中ノ鬱ヲ散セン為メ各兵種ノ隠芸アリ、嘶家・薩摩琵琶・月琴・尺八・浄瑠璃等アリ、余興央ニシテ一鷹アリ来リテ檣頭ニ止マル捕へ得タリ、皆吉兆トナス、万歳ヲ唱へ歡ヲ尽シテ休ム

同廿九日^{（イ）} 午前七時朝鮮国大同江口ニ着シ、流レニ遡ル里余ニシテ先発ノ諸船間ヲ縫テ鎮南浦前面ニ淀泊ス、鎮南浦ハ第一軍ノ上陸

地ニシテ兵砦〔砦〕司令部アリ、護衛艦トシテハ扶桑、仮装巡洋日本・桑港丸、水雷艇若干、同江幅里余ニシテ水常ニ濁ル

大同の水の流れは濁るとも清きほまれを残せ丈夫

同廿八日〔ママ〕 晴レ 同地滞在、此日午后八時ニ至ル第三中隊ヲ乗セタル万国丸至ル、途中々困難セル由

同卅日 陰晴定マラズ 第一軍ハ本日ヨリ鴨緑江ヲ攻撃セル由

五月一日 陰晴不定 午后一時ニ至リ情報アリ

第一軍ハ今一日午前七時半ヨリ砲撃ヲ開始シ、同八時前進ニ移リ、同九半〔時脱カ〕九連城ヨリ梧頭林子ニ至ル線ヲ占領セリ

一同舷首ニ集マリ聯隊長ノ音頭ニテ万歳ヲ三唱シ意気大ニ振フ

同二日 朝来雨后チ晴レ 左岸々上白衣ノ人黒牛ヲ逐フヲ見ル、望遠鏡ニヨリテ子細ニ見ルニ朝鮮人ノ牛ヲ以テ耕シ蒔物ヲナスナリ

同三日 此日ヨリ漸次大同江ヲ出発シ某地点ニ向カフ、師団司令部ヲ乗セタル八幡丸モ亦夕晩来出發セリ

同四日 晴レ 前日ノ通り徐々トシテ出帆旗ノ挙ルヲ見ル

同五日 晴レ 此日第二軍司令部ヲ乗セタル常陸丸モ亦夕出帆セリ、清国金州附近ノ人ニテ目下ハ帰化シテ吾ガ軍政署ノ通訳トナレ

ル劉雨田氏ト語ル、劉氏詩アリ

東海男兒愛遠征 九重恩重一身輕 千里鉄甲吞南浦 要逐西夷出盛京

男子豈唯愛遠征 常思正義一身輕 皇軍所向從風偃 將逐西夷救盛京

后詩余ノ和スル所、氏ハ尚ホ故国ヲ思フノ余リ救フノ字ヲ批セリ

同六日 晴レ 上陸準備ノ為メ遼東ノ地図ヲ整理ス

同七日 晴レ 午後一時ヨリ端舟ニ乗シ聯隊長殿ト共ニ鎮南浦ニ上陸初メテ異域ノ地ヲ踏ム、鎮南浦ハ日本街・支那街ニ別カレ、日

本街ハ内地ノ町ト異ナルコトナク、土人町ハ不潔ナルニ一驚ヲ喫セリ、土人ハ皆白衣ヲ着、上流人ハ鍔ノ広キ帽子ヲ頂キ長キ烟管

ヲ持チ、下等ノ土人ハ皆吾兵站部ノ使丁トナリ、麦米ノ「カマス」・罐詰類ノ箱等渾テ背負ヘテ運搬セリ、鎮南浦北端突出セル所

珍ラシク松柏繁茂シ公園アリ

同八日 晴レ 午前十一時鎮南浦出帆、土佐丸先頭、安芸丸之レ二次キ、順次煤烟ヲ吐テ単縦陣トナリテ黄海ニ入ル、南東ノ風海上波平所々鯨ノ潮ヲ吹クヲ見ル、夜ニ入りテハ各窓ニ被ヲナシ火光ノ漏レルヲ妨ク、此夜乗船以來ノ海水温浴ヲナス

同九日 大孤山西方ナル塩大澳附近ノ上陸地点ニ達ス、先着ノ運送船数十艘未ダ上陸ヲ了セズシテ在リ、遙カニ遼東ノ野ヲ望ミ得ベシ、海上ニハ塩大澳ヨリ陸地ニ対シテ一列ニ軍艦ヲ並列シ、其間ニ水雷艇ヲ浮ヘテ警戒ス

同十日 朝来大霧咫尺ヲ弁セズ、未夕上陸ノ命ニ接セズ、劉氏ノ意ヲ斟ミテ詩アリ

飄然去国十迎春 偶作從軍解語人 一夜船中半床夢 忽望門柳又更新

嘗慕徐公東海浜 十年偶值故国春 兒孫不識新來客 袖語母親何処人

同十一日 雨微カニ降レトモ波平カニシテ上陸ニ便ナリ、上陸ヲ了セン船ハ出帆旗ヲ挙ケテ去ル、劉氏詩アリ、清国土民小舟ニ乘リ来リテ残飯ヲ乞フアリ、其不潔ナル驚ク程ナリ

既望大和又小和 心神曠怡發高歌 暮雲橫鎖猴兒港 朝務遙連獅子窩

短艇漁翁歡語共 輕騎武士深愛情 多家出色何曾老 鑑甲灰紅映碧波

同十二日 晴 此夜午前五時ヨリ上陸ヲ始ム、其困難ナル言語ニ絶セリ、此地非常ニ遠浅ナルヲ以テ小舟ニテ一里余ヲ渡ラサル可カラズ、況シテ其上陸地点ヤ満潮ノ時ハ急造セラレタル棧橋ニ依ルヲ得レ共、大凡袴ヲ脱シテ海中ニ入り、馬モ亦夕海中ニ引キ入レテ上陸セリ、此ノ附近吾ガ駆逐艦ノ木材ヲ満載セル支那船ヲ牽キ去ルヲ見ル、龍岩浦附近ヨリセルナラン

同十三日 晴レ 午后四時全ク上陸ヲ了セリ、上陸地ニ於テ露兵一名捕虜トナリテ来リシヲ見ル、特更ニ吾レ等ノ搭乘シ来リシ上等船安芸丸ニ乗セテ内地ニ送ル由

乗船以來殆ト廿日ニ及ブヲ以テ馬匹ノ疲労甚ダシク中ニハ全ク歩行ノ困難ナルモアリ、之レハ重ニ微発馬ナリ、乍然斃馬ヲ出サ、リシハ好成積積ノ由、第一中隊ハ黒家屯、第二中隊ハ馬家屯、第三及ヒ本部ハ石家屯ニ村落露營ヲナス、上陸以來一驚ヲ喫セシハ上陸地附近ニ吾兵站部ニ使用セラル、支那馬車ノ雲霞ノ如キト、其家屋ノ低クシテ不潔悪臭ヲ放ツト、土人ノ服装ノ粗末ニシテ破綻セルトニシテ、困難セルハ言語ノ通セサルニテ、心地能ク感セラル、ハ一望赤裸ナル地ニ村落附近而已ハ楊柳青々トシテ繁レル所、

委ク吾カ軍馬ノ嘶キヲ聞キ其間ヲ点綴シテ真白ナル天幕ノ所々ニ建テラレタルニテ、何トナク新占領地ノ珍ラシク見受ケラレタ、吾カ聯隊モ家屋ノ不潔ニ堪ヘスシテ天幕ヲ造リテ露營シタ

同十四日 晴レ東南風 同地ニ在リ人馬ノ休養ヲナス、第三聯隊ハ普蘭店ヲ占領セル由

同十五日 晴レ 午前四時半出發、聯隊長ノ訓示アリ、師団集合地ニ至リ命令ヲ受ケ半拉井ニ向テ前進、吾カ前衛第一中隊ハ蘇家屯附近ノ停車場ニ於テ敵ノ旅順方面ヨリ来リシ軍用列車ヲ要撃交戦、約一時間遂ニ敵ヲシテ再ヒ南走セシメ鉄道電信ノ破壊ヲナセリ、龍口附近ニ出サレタル三富將校斥候ハ鉄道線路附近ニ於テ敵ト衝突シ数名ヲ殪シ一等大尉一名ヲ殺シ七名ヲ生擒セリ、此夜大嶺家屯ノ河原ニ露營ス、夜半ヨリ雨

同十六日 午前五時出發、雨未タ休マズ、山ヲ越ヘ谷ヲ渡リ正午頃十三里台北方高地ノ蔭ニ達ス、雨モ亦タ休ム、前面ニハ已ニ砲声ヲ聞ク、吾ガ騎兵聯隊ハ期ノ熟スルヲ待ツ、午后三時頃ニ至リ砲兵沈黙シ敵兵退却ヲ始ムト、聯隊長ハ突撃命令ヲ下ダシ、第二中隊前衛トナリ疾風ノ如ク一里余ノ道程ヲ襲歩ニテ突貫シ敵兵ヲ驅逐シ十三里台ノ高地ヲ占領シ、第二中隊ハ徒歩戦ヲナシ高地線ニ依リテ敵ニ追撃射撃ヲ浴ヒセカケ敵モ前面村落ニヨリテ応戦シ、肖金山附近ノ敵砲兵モ亦タ砲彈ヲ送レリ、間モナク歩兵来リテ戦線ヲ護リテ山ヲ下タリテ韓家屯ニ村落露營ヲナス、此ノ日ノ戦鬪ハ重ニ砲戦ニテ敵砲モ亦タ中々頑強、彈丸常ニ師団長殿下ノ附近ニ落下シ、御附武官共ヲシテ胆ヲ冷サシメタリト、吾聯隊ノ損害ハ負傷兵一、斃馬三、全軍ノ死傷將校以下百五十余名、此地ハ水ニ乏シク飲用水ノ如キハ馬車ニテ半里ノ遠キヨリ釣^{〔種〕}ミ来レリ

同十七日 晴レ 午前六時出發陣家屯附近ニテ滞陣、此ノ日ハ遙カニ海軍ノ砲声ヲ聞ク而已、第一中隊ハ第一師団、第二中隊ハ第四師団ニ配属セラル、前半拉山屯ニ村落露營

同十八日 晴レ 陣家屯附近師団集合地ニ在リテ敵情ヲ偵察ス、十六日ノ戦鬪以来九里庄北方高地ヨリ陣家屯前面ニ至ルノ線ヲ占領シ、完全ニ金州半嶋ヲ封鎖セリ

同十九日 晴レ 前日ノ通り

同廿日ヨリ前日ノ通りニテ滞陣、毎日西南風烈シク土砂飛揚シ幕舎内ニ入り非常ニ困難、殊ニ乗船以来已ニ一月、各兵士携フル所烟

草欠乏シ中ニハ休ムヲ得ス唐黍ノ毛ヲ焼テ烟ヲ味ヘシト、又上陸以來連続戦鬪行動ヲナシ風勢烈シキ為メ皆眼病ヲ患ヘタレ共業ヲ
 廃スル程ニハ至ラズ、前姿勢ニテ廿三日ニ至ル

同廿四日 晴レ 午后三時ヨリ伝騎トシテ金家屯第二軍司令部ニ至リ、同日帰着ス

同廿五日 午前一時三十分露营地出發、金家屯ヲ經テ鐘家屯附近ニ陣シ予備隊トナル、此ノ日敵ハ輕氣球ヲ飛揚シテ吾カ主力ヲ偵察
 セリ、吾レハ各部署ヲ定テ前進ノ命ヲ待ツ、西風吹キ荒レ聯隊ハ河原ニ陣セシヲ以テ土砂眼口ニ入り困難言フ可カラズ、同地ニ在
 リ露營ス

同廿六日 午前一時ヨリ第四師団ニ金州城夜襲ノ命アリ、吾カ第一聯隊之レガ援助タリ、第四師団ハ即時行動ヲ起セシニ、雷鳴電光
 轟々閃々猛雨沛然トシテ至ル、非常ノ困難ヲナス、東西確實ニ呼応スル能ハズ、天明ケントスル頃吾ガ歩兵聯隊ハ金州城已ニ吾ガ
 有ニ歸セシモノト思ヘ東門外ニ南山ニ向カツテ陣セシ所、突然城壁ヨリ射撃ヲ受ケ初メテ未タ落ちサルヲ知り、早速東門ニ向テ突
 撃ヲ命シ、工兵ノ城門破壊ヲ待チテ先頭ニ東門ニ旭旗ヲ翻シヌ、吾ガ騎兵聯隊ハ同一時出發、石門子ヲ經テ金州ニ前進セントス、
 夜正ニ暗黒路又險惡非常ノ困苦ヲ嘗テ天明頃鉄道線路附近ニ達シ、八里庄東方鉄橋附近ニ在リテ予備隊トナル、時已ニ砲戦正ニ酣
 ニシテ吾カ陣地附近ニ落下スル砲彈頻々トシテ幸ニ人馬ニ損傷ナキモ、或ル兵卒ガ大胆ニモ大便ヲナシ居ル附近ニ巨彈落チ土砂ヲ
 冠リシモ平然トシテ用ヲ足シタリトテ當時ノ美談トセリ、此ノ日吾カ海軍鳥海・赤城・平遠・筑紫来リテ金州港ヨリ砲撃ヲ加ワヘ
 歩兵ノ前進ヲ援助ス、吾ガ聯隊モ金州城北方高地蔭迄前進シテ戦期ヲ待ツ、抑モ南山ノ防禦工事ハ半永久的ニシテ備砲ノ如キモ大
 小約五十門ノ速射砲若干アリ、二段三段ニ掩蓋ヲ有スル有眼散兵濠ヲ造リ、地雷ヲ敷設シ鉄条網ヲ張り機関砲ヲ備ナヘ頑強ナル
 抵抗ヲナシ、敵艦一叟大連灣ニ来リテ吾ガ左翼第三師団ヲ砲撃セリ、我砲兵全力ヲ尽シテ砲火ヲ集中シ正午頃敵砲全ク沈黙ニ歸セ
 リ、依テ聯隊ハ金州城東門外ニ前進シ金州城ノ守備ナシ尚ホ時期ノ到ルヲ待ツ、我歩兵ハ屢々決死隊ヲ募リテ防禦物ノ破壊ニ勤メ
 突撃隊ヲ編成シテハ突貫セシモ、機関砲ノ威少シモ衰ヘズ皆敵前二三十米突ニテ仆レタリ、砲兵ハ末明ヨリ連続砲撃ニ已ニ予備彈
 藥ヲ尽サントス、茲ニ於テ全線ヲ挙ケテ激烈ナル砲火ヲ集中シ、艦隊亦タ協力シ歩兵ハ一齊ニ猛烈ナル突貫ヲナシ、艦隊援護ノ下
 ニ第四師団先ツ高地線ニ上リ、第一師団之レニ次キ、吾ガ騎兵聯隊モ抜刀追撃ニ移リ大房身附近迄進ミシガ、日已ニ暮、南関嶺ノ

敵砲兵尚ホ退却援護ノ為メ猛烈ニ射撃スルニ依リ追撃ヲ中止シタリ、時ニ午后七時占領部隊ハ各所ニ篝火ヲ燒キ、万歳ノ声ハ天地ニ轟キ、君ガ代ノ喇叭ハ亮々トシテ鳴渡リ、又此日最モ苦戦セシハ第一師団、之レニ次キテ第三師団、第四師団ハ艦隊援助ノ為メニ割合ニ容易ニ偉功ヲ奏スルコトヲ得タリ、吾ガ軍死傷者ハ皆前進ノ際打タレタルニ依リ小銃弾ナルニ依リ美事ニ敵壘ニ面シテ仆レアリ、敵ハ多ク砲弾ノ為メニ死セシニ依リ、其状惨殊ニ金州街道・大連街道附近ハ死屍累々トシテ横タワリ屍山血河ノ感アリ、同夜金州東門外ニ露營ス、此日ノ戦鬪吾ガ死傷四千有余、敵ハ汽車ニテ運ヒ去リ追撃ノ際遺棄セシ而已ニテ八百余アリ、戦利砲六十余門、激戦実ニ十六時間、此役吾ガ聯隊負傷ニ

同廿七日 晴レ 午前五時中村少将ノ率ユル追撃隊ニ属シ行々殘敵ヲ驅逐シ南関嶺ヲ占領シ、三十里堡停車場附近ニ在リテ敵情ヲ偵察ス、同停車場附近ニハ大部隊ノ露營セシ趾狼藉トシテ残り、土人ノ言ニ依レバ汽車ニ乗ルガ為メ同士打チヲナセリト、同夜ハ同地附近ニ在リテ露營ス

同廿八日 晴レ 前草鎮堡附近迄前進敵状偵察、別ニ第三中隊ヲ遣シテ青泥窪ヲ占領セリ、同地附近ニ在リシ敵ハ皆旅順方面ニ遁レタリ、市街ハ多少燒棄セラレタルモ大部ハ完全ニ吾ガ有ニ帰シ、港内二三ノ爆発船アリシモ築港ハ少シモ破壊セラレズ

同廿九日 晴レ 前草鎮堡附近ニ在リテ敵情偵察、三十里堡附近露營ス、此日師団司令部ハ同地迄前進、井水欠乏非常ニ困難ヲ極メタリ

同三十日 前草鎮堡ヨリ王家屯北方高地迄前進敵状偵察、尖兵ハ前牧場駅高地附近ニテ敵ト衝突、富田軍曹ハ馬ヲ打タレ身ニ三弾ヲ受ケテ徒歩帰来復命ス

同三十一日 晴レ 同地附近ニ在リ、数斥候ヲ派シテ敵状偵察ヲナス、敵ハ双台溝・營城子附近ニヨリ防禦工事ヲナシツ、アリ、玉田將校斥候ハ王家屯南方地隙内ニテ敵ノ狙撃スル所トナリ、斃馬二、負傷一ヲ出ス、后草鎮堡ニ退却シテ村落露營ヲナス

同六月一日 晴レ 此ノ日ヨリ人馬ノ大休養ヲナシ、二三斥候ヲ派出スル而已、軍ハ主力ヲ以テ普蘭店方面ニ転進シ、第一師団全部ハ止マリテ半嶋ノ封鎖ニ任ス、此日勅語奉読式アリ

勅語

第二軍ハ海軍支隊ト協力シ敵ノ死守シタル金州城及ヒ其ノ南方要害地ヲ力攻シ遂ニ之レヲ陷シ以テ旅順口ノ咽喉ヲ扼シ且ツ我野戰軍將来ノ地歩ヲ堅固ナラシム

朕深ク爾等ノ忠勇ヲ嘉ミシ尚ホ益々奮勵シテ以テ終局ノ勝利ヲ収メンコトヲ望ム

明治三十七年五月二十九日

皇后陛下令旨ニ宣ハク

第二軍ハ海軍支隊ト協力シ敵ノ死守セル金州城ヲ陷シ奮闘猛進遂ニ其ノ南方險要ノ地ヲ略シシタル趣皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我將卒ノ忠勇ナルヲ深ク御感賞アラセラル

皇后宮大夫 子爵 香川敬三

同日、三日 晴レ 前同断、人馬ノ休養、双台溝附近ノ敵情偵察、此ノ日始メテ酒保商人ノ便ヲ受ク

同日 晴レ 鎌倉建長寺釈宗演師及ヒ本願寺布教師慰問ノ為メ来陣セラル、坂本将校斥候ハ花紅溝附近ニテ敵ニ包圍セラレ斃馬

三、負傷一、戦死一ヲ出ス、屍体ヲ遺棄シテ卒シテ退却ス

同日 晴レ 前同断、此日搜索隊ヲ出シ歩兵支援ノ下ニ屍体ヲ收容ス、銃丸ハ左太股ヨリ馬腹ヲ貫通シ右膝關節ヲ貫通セラレ、最
后迄抵抗セシト見ヘ頭部腹部ノ嫌ナク銃剣ニテ刺傷セラレアリ、后草鎮堡西方ノ山上ニ葬ル、聯隊全員会葬懃懃至ラサルナシ、間
モナク功七級金鷄章ヲ下賜セラル

同日 晴レ 前同断、武器検査

同日、八日 晴レ 前同断、馬匹検査

同日 前同断、葛浦沢出身田村菊造来訪セラル、此日師団長殿下ノ誕生日ニテ上長官以上招宴セラル

同日ヨリ十二日ニ至ル 前日ノ通り舎主范氏詩ヲ書シテ示ス、兄弟二人アリ、弟ハ后チニ吾ガ軍政署ノ使丁監督トナリタリ

大将征俄胆気豪 千軍万馬不辭勞 太平得勝還朝日 金殿賜恩解戰袍

同十三日 晴レ 此日皇太子殿下ヨリ聯隊長ニブランデー・グラスヲ下賜セラル

同十四日 晴レ 伊豆参謀来訪セラル、此日左翼隊ニテハ海軍ト戦闘セン由

同十五日 晴レ后チ曇リ雷模様

同十六日 朝来ヨリ雷模様大雨沛然トシテ至ル 両陛下ヨリ下賜品ブランデー・巻烟草・菓子ヲ拝受ス、蓋シ南山攻撃ニ参与セル部

隊ニ限ル

同十七、八日 晴レ 前日ノ通り、五間房附近ノ海岸ニ至リ鮮魚ヲ買テ還ル

同十九日 晴レ后チ雷雨 明日夏家河子ニ転営ニ付キ同所ニ出張設営ス

同廿日ヨリ夏家河子ニ転営滞陣ス、夏家河子ハ東清鉄道ニ沿ヘ海ニ監ミタル部落ニシテ、鉄道給水所アリ、自来滞陣ノ余暇トシテ附

近ノ川ニ入りテ石ヲ除キテ鰻ヲ捕フ、大ナル鰻三尾ヲ得テ殿下ニ献上セリ、師団司令部ハ前草鎮堡ニ在リ、同地滞在中第一中隊ニ

炭疽病発生、斃馬三頭ヲ出ダス、氣候漸ク熱シ風土ノ変更ニヨリ続々脚気患者ヲ出ダス、当時吾ガ前線ハ案子山ヨリ青泥窪南方高

地ニ至レリ

同廿五日 晴レ 下士以下拾五名補充トシテ来着

同廿六日 第十一師団ト協力シテ前進ヲナス、吾ガ師団ニ在リテハ盤道西方及ヒ南方高地占領、左翼隊ハ歪頭山・劍山・双頂山・小

平嶋占領、此日得利寺大勝ノ情報アリ

同廿七日 雨 前日ノ通り滞在

同廿八日 陰晴不定 此日聯隊長殿ト案子山ヨリ毛頭子附近ノ第一線ヲ巡視ス、帰路得病熱甚ダシ休養

同廿九日ヨリ 休養、雨屢到ル

七月二日 晴レ 全快

同三日 第十一師団前面劍山ニ向テ軍樂ヲ奏シ逆襲シ来ル、同四日五日モ逆襲シ来リシガ五日ニハ全然撃退セラレタリ、此挙中々活

発ニ運動セリ

同五日ヨリ十日ニ至ル 同地ニ在リ、日々雨若シクハ曇天ナリ

同十二日 第一師団長貞愛親王殿下大将ニ昇進セラレ大本營ニ營転セラレ、第一線部隊ヲ除クノ諸隊前草鎮堡ヨリ青泥窪ニ至ルノ道路上ニ整列シ奉送セラル、後任トシテ第一旅団長松本務本閣下中將ニ昇進襲職セラル、訓示アリ

余茲ニ重職ヲ拝ス、当兵団ハ曩ニ廿七八年ノ役偉功ヲ奏シテ戦列ノ首位ヲ辱メサリシ、又当役ノ初メ十三里台及ヒ南山ニ於テ光榮アル戦鬪ヲナシ武威ヲ発揚セリ、然シテ今ヤ万邦注視ノ下ニ旅順ノ大要塞ニ対シ日ナラズ攻撃ノ途ニ就カントス、務本ノ乏シキヲ以テ名誉アル兵団ノ統帥ニ受ケ有終ノ美ヲナス一ニ將校下士卒ノ忠勇ニ之レ頼ル、將校以下既往偉績ヲ負ヘ益々奮励兵団ノ光榮ヲシテ愈発揚スルコト有ラシメンコトヲ期セヨ

師団長

同十三日ヨリ十五日ニ至ル 記事ナシ、鉄道工夫ハ日々線路改修ニ汲々タリ

同十六日 聯隊長隨行第一線ヲ巡視ス、午后金州ノ劉雷氏來訪セラル

同十七日 恤兵品菓子折・絵葉書・扇子ヲ領ス

はらからのなさをあをぐ扇かな

十年のいこんぬぐへと恤兵部

絵はかきにしらせてやらん勝いくさ

同十八日 晴レ 夜半大雷雨 第二中隊ノ宿营地ハ谷間ニテ低地ナル為メ馬繋所ハ溪水ニ浸サレ、彼岸ノ幕舎ト交通絶ヘ、炊事場ノ器具ハ流失スルナド大騒動ヲナセリ、常ニハ溪水微々トシテ微カニ石ヲ積ミテ用水ヲ湛ヘタル程ナリシニ突^{ママ}佐ニシテ此ノ大洪水アリ、蓋シ清国ハ山野皆秃山ナレバ大雨アル直ニ急奔シテ海ニ走ルガ為ナリ

同十九、廿日 雨 前日ノ通り此日初メテ汽車ノ通スルヲ見ル、何トナク愉快ナリ

同廿一日 交代命令ニ接シ一宵本部ノ諸氏ト訣別シ中隊ニ帰還、第三小隊第十二分隊長ヲ命セラル

同廿二日ヨリ廿四日至ル 中隊ノ勤務ヲ取ル、第九師団到着戦線ニ就ク

同廿五日 晴レ 此日命令アリ、明日ヲ期シ総攻撃ヲナス、出撃準備ヲナス

中隊長ノ注意、敵情ニ就テノ講話、衛生ノ注意、軍機ノ秘密

右縦隊(松村兵団) 中央縦隊(大島兵団) 左縦隊(土屋兵団) ト部署ヲ定メ、右縦隊ハ北方旅順街道ヨリ、中央縦隊ハ中央道路ヨリ、左縦隊ハ南方海岸ヨリ共ニ南進シテ敵ヲ旅順要塞内ニ駆逐シ、其最后ノ死命ヲ制セントス

此外ニ友安閣下ノ率ユル后備旅団、大迫少将ノ率ユル砲兵二旅団、里井海軍中佐ノ率ユル攻城砲兵並ニ攻城工兵アリ 敵ハ太白山ヨリ安子嶺ヲ経テ双台溝ニ至ル線ニ於テ、險要地点ニ依リテ得意ノ防禦工事ヲ施シ死守セルモノ、如シ

同廿六日 騎兵聯隊ハ軍ノ最右翼警戒ノ任務ヲ以テ午前三時出発、鉄道線路ニ沿テ案子山西方ニ小休止ヲナシ、吾カ砲兵ハ牧場駅北方高地ニ在リ、歩兵部隊ハ東砂崗子ヲ占領シ、続テ營城子ヲ占領シ戦闘隊形ノマ、露營セリ、聯隊ハ西方ニ突出セル半嶋ヲ占領、文家屯ニ入り歩兵ト連絡ス、同地附近ニ在リテ露營ス

中央縦隊ハ安子嶺及ヒ凹字形山砲台ヲ攻撃セシモ堅固ニシテ抜ク能ハス徹夜セリ

左翼隊ハ老坐山一帶ノ地ヲ占領シ、尚ホ太白山ニ向テ攻撃中ナリ

同廿七日 晴レ 午前四時集合、牧場駅南方高地蔭ニ在リテ予備隊トナル、吾ガ右翼隊ノ砲兵集団ハ營城子北方畑地ニ全砲門ヲ開テ双台溝高地ノ敵砲ヲ攻撃ス、敵ハ巧ニ陣地ヲ構成シ吾ガ威力充分ニ奏セラレズ、之レニ反シ敵ハ高地ニヨリテ瞰射ヲ逞シ非常ノ苦戦ヲナシ一旦沈黙ニ帰セシモ、敵ハ増援隊ニヨリテ再ヒ猛烈ナル砲火ヲ吾レニ集中シ頑強ニシテ抜ク能ハズ、東小磨子附近ニ在リテ露營ス、聯隊ハ營城子附近ニ在リ、敵情ヲ偵察ス

中央縦隊ハ非常ナル激戦奮闘ヲ以テ凹字形山ノ堅塁ヲ攻陥セルヨシ

左翼隊ハ太白山一帶ノ高地ヲ攻撃セシニ敵艦隊ノ来テ砲撃スルニ逢ヘ苦戦セリ

同廿八日 晴 午前四時出発、午前八時ヨリ吾ガ砲兵ハ砲門ヲ開キテ猛烈ニ射撃シ、吾ガ聯隊ハ西小磨子ニ進出ス、途上淖中ニ逢ヒ非常ナル困難ヲ以テ通過シ戦期ヲ待チ、正午頃歩兵ト協力シテ全ク双台溝高地ヲ占領セリ、附近陣地ノ巧妙ナルト一死屍ヲ止メズシテ退却セルニハ感伏セリ、同夜ハ西海岸王殿元ニ露營シ飲用水ニ困難セリ

中央縦隊ハ兜山ヲ占領シ、左縦隊ハ太白山一帯ノ高地ヲ占領セル由

同廿九日 雨 聯隊ハ露營地ニ在リテ休養、吾ガ第三小隊ハ將校斥候トシテ旅順街道方向ノ敵情搜索ニ任ス、歩兵ト共ニ長嶺子附近迄進出シ、夫レヨリ尚ホ進テ東北溝ノ東北地隙内ニテ、小隊長ノ命令ニヨリ兵卒五名ヲ引テ柳樹房・周家屯方面ノ敵情搜索ヲ命セラル、敵ハ前面干大山及ヒ鳳凰山ノ高地脚ニ盛ニ防禦工事ヲナシ、山上山腹ニモ点々露兵ヲ認ム、然レバ斥候ハ生ヘ茂レル高梁ヲ利用シ下馬シテ先ツ前面無名部落ノ搜索ヲナシ、四名ヲ留メテ万一ノ際ノ援護射撃ヲナサシメ、一名ヲ率テ河原ノ崖ニ沿テ鉄道監視家屋ノ焼却サレツ、アル所迄至リ、尚ホ前面ヲ偵察中吾ガ歩兵斥候ノ為メニ見過セラレテ已ニ射撃セラレントシ帽ヲ振りテ無事ナルヲ得、歩兵ノ来ルヲ待チ柳樹房ニ進入セントセシニ其前五百米突地隙内ニ敵ノ哨兵アリ、射撃セラレ止ムヲ得ズ一旦退却シ、周家屯附近ノ敵情ヲ確カメ小隊ニ帰着シテ報告セリ、此日旅順街道附近ヨリ長嶺子附近ノ吾ガ陣地ヲ盛ニ砲撃セリ
中央左翼隊共ニ休養セリ

同三十日 晴レ 此日第二中隊ハ歩兵第一旅団ニ附セラレ午前二時出發、旅団ノ先導トナリ大潮口附近ニ達スル頃曉霧稍晴レントスル頃、前面河原ノ対岸ニ散開セル敵ハ急射撃ヲ始メ、吾ガ中隊ハ徒歩戦ヲナシ応戦中歩兵先頭来リテ猛烈ニ射撃シ、吾ガ砲兵亦夕砲火ヲ送リテ旅順街道附近ノ敵砲ヲ沈黙セシメ、歩兵ハ突貫シ后沙包ヲ占領シ、砲兵援護ノ下トニ泥河子西南一帯ノ高地ヲ占領シ、吾ガ聯隊ハ双嶋灣北岸一対ノ高地ヲ占領セリ、此ノ日ノ戦鬪ニ於テ中央隊ハ干大山・鳳凰山ノ敵ニ向カヘ猛烈ニ突撃シ激戦ノ后之レヲ占領セリ、右翼本隊モ亦夕土城子ヲ經テ同南方高地ヲ占領シ、同日正午頃ヲ以テ双嶋灣一帯ノ高地ヨリ土城子南方大孤山東方高地ニ至ル線ヲ確實ニ占領シ全ク敵ヲ要塞内ニ駆逐セリ、此レヨリ敵ハ要塞砲台ニヨリ発砲シ吾ガ攻囲作業ヲ妨害センコトニ日夜苦心セリ、此夜聯隊ハ李家溝ニ村落露營セリ、死二、傷五、斃馬七

同三十一日 陰晴不定 双嶋灣附近海岸監視兼ネテ右翼警戒ノ目的ヲ以テ八艘船王家屯ニ宿營ス、第一中隊ハ師団伝騎トシテ分遣、自后人馬ノ大休養ヲナス

八月一日 晴レ 滞在第二旅団伝騎交代二名帰着ス

同二日 晴レ 前同断、聯隊長殿ヨリ菓子ヲ拝受ス、此日第二回補充トシテ高橋少尉引率ノ元ニ下士以下四十三名来着ス

同三日 晴レ 海岸監視視哨トシテ黄泥河子ニ出張、此日 兩陛下ヨリ勅語ヲ賜ル

勅語

攻囲軍ハ旅順要塞ノ前進陣地ニ対シ屢々嶮要ヲ侵シ劇戦数日ニ亘リ遂ニ敵ヲ其本防禦線内ニ撃退セリ
朕深ク其ノ勇武ヲ嘉尚ス

令旨

攻囲軍ハ旅順要塞ノ險ヲ冒シ連日猛撃漸次其功ヲ奏スル由

皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我將校下士卒ノ忠勇ナルヲ深ク御感賞アラセラル

同五日 交代帰還ス、軍事郵便一宛ノ差出シヲ許サル

同六日 晴レ 此日右翼砲兵隊ハ砲撃ヲ開始スル筈、蓋シ左翼隊ノ援助運動ナリ

同七日 晴 此日第十一師団ハ大孤山ヲ占領スルノ目的ヲ以テ攻城砲兵援助ノ下ニ運動ヲ開始セリ、余ハ関根昌平・岩波平吉ノ遺骨ヲ護シテ宮城子兵站司令部ニ至ル、途上石阻子附近ヨリ望メバ大小孤山ハ全ク烟ニ包マレ殷々轟々タリ、又長嶺子ヨリ双台溝・宮城子ニ至ル間連日ノ晴天乾キニ燥キタル土塵五六寸モアリ、炎威蒸スガ如キ中ニ補助輸卒隊ハ流汗淋漓タルヲ拭ヘモ敢ヘズ、攻囲作業ニ要スル諸材料又ハ糧食ヲ荷車ニ積シテ運搬スルモノ引モ絶ラズ皆殆ト人間ノ顔色ナシ、后方勤務者ノ労モ亦タ偉ナルカナ、蓋シ未タ鉄道ノ通セサルガ為メナリ、帰路驟雨ニ逢ヘ大潮口附近ノ部落ニテ砲兵比企藤司氏ニ逢フ、那須温泉ノ旧知人見氏・佐藤氏トモ邂逅セリ

同八日 前日来ノ雨未タ休マズ 尚ほ砲声ノ殷々タルヲ聞ク、同地ニ在リテ休養

同九日 陰晴不定 此日左翼隊ハ大小孤山ヲ占領シ得タリト、交戦中敵艦屢来リテ砲撃ヲ加ワヘ非常ノ苦戦ノ后占領シタリト

同十日ヨリ北海村ニテ海岸監視十二日ニ至ル、附近ノ海上一切船舶ノ交通ヲ禁ス

同十二日 聯隊長急病ニヨリ看護ノ為メ召還セラレ王家屯本部ニ在リテ看病ス

同十三日 前日ノ通り此夜半ヨリ第一師団ハ碾盤溝西南約一千米突ノ高地一帯ニアル新設砲台ヲ奪取スルノ目的ヲ以テ夜襲ヲナシ、

吾ガ聯隊モ予備隊トシテ奥野第三中隊指揮下ニ出張ス、銃声終夜絶ヘズ

同十四日 雨 夜来ヨリ連続攻撃ヲナス、払曉彼我砲兵又猛烈ナル砲火ヲ交換シ終日絶ヘズ、雨脚又益々加ハリ毛野ノ健兒モ亦夕頑強ナル抵抗ニ遂ニ目的ヲ達スル能ハズ夜ニ入レリ、此日千田中佐負傷セリ、夜襲モ亦夕効ヲ奏セズ

同十五日 大雨尚ホ勢ヲ休メズ 前日ニ引続キ攻撃ヲ実行シ決死隊ヲ募リ突貫又突貫、砲兵援助ノ元ニ午前十一時頃一帯ノ高地ヲ占領セリ、司令官ハ千田隊ノ苦戦ヲ賞シ同高地ニ高崎山ト命名セリ、此ノ戦鬪ニ於テ伝騎服務中ノ高橋少尉以下三名負傷セリ

同十六、七日 前日ノ通り、隊長殿ノ病勢日ニ薄ラクヲ見ル

同十八日 晴レ 隊長殿病勢殆ト快復セシヲ以テ中隊ニ帰還シ、大西山屯・双島湾北岸ニ至リテ中隊ニ合シ舎營ス、十六日午前 天皇陛下ノ優渥ナル非戦鬪員避難ノ聖旨及ヒ欲降書ヲ山岡參謀ヲシテ敵陣ニ至サシム、敵頑トシテ聞カズ、回答ニ曰ク、^非避戰鬪員ノ避難ハ指定時間内ニ準備ヲ整ル能ハズ、且ツ乞降ノ事ハ旅順守兵ノ忍ヒサル処露国軍人ハ糧尽弾尽ル迄決戦セント欲スト

同十九日 第一回要塞總攻撃ノ命令アリ

右縦隊ハ旅順街道以西ノ地区ヲ前進シ漸次要塞ニ迫リ、椅子山・案子山ヲ攻撃スベシ

中央隊ハ右翼ト連繫シ東団山子ニ至ル線ヲ進ミ、盤龍山東旧砲台ヲ攻撃スベシ

左縦隊ハ中央隊ノ左翼ニ連繫シ南海岸ニ至リテ進ミ、東鷄冠山ヲ攻撃スベシ

吾ガ騎兵聯隊ハ后備旅団友安少將ノ配下ニ属セラレ、午前二時宿營地出發、夜色暗々タル中ニ投ヲ御ミテ旅団ノ右側ヲ警戒シ、兼ネテ双嶋半嶋ヲ占領スルノ目的ヲ以テ秋家塞子ヲ經テ双嶋湾内ノ干瀉ヲ涉リ半嶋ヲ奇襲セントス、吾ガ歩兵モ亦夕同時ニ運動ヲ起シタルヲ以テ、敵ハ鉢卷山附近ノ高地ヨリ二坐ノ探照灯ト數門ノマキネシム光弾丸ニハ附近ハ時ナラヌ不夜城ヲ現出シ、辛シテ天明ントスル頃百余ノ守備兵ヲ驅逐シテ半嶋ノ北部ヲ占領シ山嘴子南方ノ高地蔭ニ聯隊ヲ止メ、余ハ兵卒五名ト其前面鉢卷山西方約三十米突ノ大潘家屯ニ分遣セラレ駐止、斥候トナル時夜全ク明ケ、吾ガ重砲兵隊ハ双嶋湾南岸断崖ノ蔭ニ砲列ヲ敷キ、旅団ノ攻撃点タル鉢卷山西南方高地ニ向テ猛烈ナル砲火ヲ集中シ、敵モ亦夕椅子山・案子山各砲台ノ備砲ヲ発射シ、巨弾空ヲ切りテ斥候ノ駐止部落ニ向テ落下シ土人ノ家屋ヲ破壊シ障壁ヲ碎キ樹木ヲ仆ス、斥候ハ村端南方畑地々隙ニ移リ尚ホ監視ヲ断続セリ、前面部落ニ

当リテハ屢々敵兵ノ搜射ヲ聴ク、終日轡ヲ按シテ立ツ、吾ガ歩兵モ亦タ敵兵意外ニ頑強、加フルニ天險ニヨレルヲ以テ目的ヲ達スル能ハズ、夜襲ヲナスモ更ニ効ヲ奏セズ、敵ノ猛火ヲ浴ヒツ、山腹ニ徹宵セリ、斥候ハ徹宵同地ニ在リ、夜半ヨリ歩兵一分隊来リ加ワル

同廿日 晴レ 此日モ統テ砲撃ヲ開始シ、殊ニ鉢巻山一带ノ高地ニ向テ激烈ナル砲火ヲ浴ヒセ、胸墻崩壊副防禦破壊セラルト雖モ敵兵中々頑強ニシテ退却セズ、午前十一時頃ヨリ砲兵ハ全力ヲ尽シテ急射撃ヲナシ歩兵又勇敢ニ突撃シ、左シモ頑強ナル敵ヲ一掃シ高地線ヲ占領シ得タリ、雖然前面各砲台ヨリ乱射スル砲弾ハ吾ガ占領地点ニ集中シ夜ニ入りテ暫ク工事ヲ施コシ確實ニ占領セリ、此日吾ガ海軍四艇双嶋附近ニ来リテ間接射撃ヲナス、斥候ハ夕刻交代中隊ニ帰還セリ、此夜逆襲アリ、歩兵ト協力シ撃退シタリ此ノ附近土人ハ皆高地ノ蔭等ヲ撰ヒ土窟ヲ構造シ皆此ノ中ニ避難セリ、家屋等ハ重ニ砲弾ノ為メ破壊セラレタリ

同廿一日 晴レ 聯隊ハ右翼警戒ニ任シ陣家溝東南高地ニアリ、此日歩兵ノ一隊ハ大平溝東方高地ヲ占領シ二〇三高地ト対峙ス、此日右翼方面ニハ戦闘ナシ、只々要塞内ヨリ巨弾ヲ送りテ搜射スル而已

同廿二日 晴レ 聯隊ハ前任務ヲ続行ス、右翼方面ニハ戦闘ナシ、左翼方面ハ前日来彼我砲声天地ヲ動カス許リ、陣家溝東南方高地ノ展望哨所ニ至リ平遠乗組海軍兵ト共ニ監視ス

同廿三日 晴レ 本家屯附近歩兵前線ノ伝騎トシテ出張、左翼方面尚ホ盛ニ砲声ヲ聞ク

同廿四日 晴レ 交代帰還ス、状報ニヨレバ吾ガ右翼兵団ノ左翼隊ハ寺兒溝西北方高地ノ一角ヲ占領シ、中央縦隊ハ盤龍山東西砲台ヲ占領シ、左縦隊ハ東鷄冠山砲台ノ一部ヲ占領セシモ后チ放棄セリ、攻囲軍ハ六昼夜連続攻撃セシモ各砲台共予想外ニ堅固ニシテ、三日ヲ出テズシテ要塞全部ヲ占領セント意気衝天ノ乃木將軍モ此日遂ニ攻撃中止ノ命ヲ下ダスノ休ムヲ得サルニ至レリ、自后ハ専ラ正攻法ヲ取り坑道作業ニ従事セリ

同廿六日 晴レ 此ノ日ヨリ聯隊ハ殆ト休養ノ態度トナリ、双嶋湾・鳩湾等ノ海岸監視ニ任ズ、山嘴子及ヒ陣家溝ニ村落舎營ス 勅語ヲ拝ス

勅 語

旅順要塞本攻撃開始以來昼夜斯ノ堅城決死ノ守兵ニ肉薄シ終ニ其ニ墨ヲ抜キ益々奮進ノ途ニ在リト聞ク炎熱ノ候ニ際シ連日困^ア苦^ラ転^シ夕^ニ軫^シ念^スニ堪ヘズ

朕深ク爾將卒ノ勇武ニ信賴ス爾將卒一簣夫レ千仞ノ功ヲ全セヨ

皇太子殿下ノ令旨モ亦夕左ノ如シ

連日連夜敵ノ堅墨ヲ攻撃シ不屈不撓遂ニ其ノ一部ヲ奪取シタル爾將卒ノ極メテ勇敢ナルヲ歎賞ス

同廿七日 晴レ后チ微雨 巨彈屢来リテ山頂ニ破裂^裂シ破片飛デ斃馬二頭ヲ出ダス、依テ高地脚ニ幕營ス

同廿八日 第九師団分遣伝騎中ノ第四小隊帰還ス、小隊長山本中尉ハ歩兵中隊長ノ職務ヲ帯ヒテ盤龍山突撃ノ際負傷セシ由、蓋シ歩兵將校殆ト死傷セシ為メニシテ如何ニ戦鬪ノ激烈ナリシカヲ察セラル、此役伝騎服務中死傷五、斃馬八ヲ出セリ

同廿九日 李家屯駐止斥候トシテ分遣后ビ歩兵第一聯隊ト協力シテ警戒ス、巨彈ハ絶ヘズ村落ニ向テ落下ス、此夜徒歩前村落ニ斥候ス、敵軍狙用ノ軍犬ニ発見セラ^{レ脱カ}急射撃ヲ受ケ地隙ヲ利用シテ帰着セリ、敵ト相去ル僅カニ二千米突

同卅日 晴レ后チ曇リ 日没頃交代帰還ス、敵ハ赤坂山及ヒ南方高地ニ坐探照灯ヲ据ヘテ絶ヘズ警戒ス、恤兵品烟草・菓子等ヲ受領セリ

九月一日 晴レ 鳩湾附近ニ於テ吾ガ哨艦、露兵ヲ乗セテ逸出セントセシ支那ジャンクヲ砲撃、二艘ヲ撃沈シ、一艘ハ速ク老鉄山下ニ逸走セリ

同二日 晴レ 午前馬匹ノ運動、正午頃遼陽大戦ノ情報ニ接ス、軍ハ八月廿五日ヨリ運動ヲ開始シ、九月四日ニ至ル十一日間ニ渡ル激戦ノ后チ全然吾ガ勝利ニ帰シ、敵ノ策源地ヲ奪取セリト

同三日ヨリ五日ニ至ル 同地ニ在リテ休養

同六日 海岸監視哨トシテ出張、海軍ノ掃海隊ノ小蒸気船ニ乗リテ密買支那船ヲ追撃シ捕獲セリ、搭載スル所、粟・高粱・菓物等ナリ

同七日 晴レ 八艘船海岸監視哨第二小隊ト交代命令アリ、第三小隊全部宿营地出發、大井口ヲ經テ塩田附近ヲ通過ス、此ノ塩田ハ附近ノ一事業ニテ海岸ニ塩田ヲ設ケアリ、目下事業ヲ廢セルニ依リ其方法ヲ知ル能ハズト雖モ、塩ハ結晶体ニテ大ナル円山ノ如キ塩塚ノ十余個アルヲ見ル、遠ク望メバ幕舎ニ似、此ノ附近ハ敵彈ノ穿ツ所トナリテ所々ニ小池ヲナシ今モ尚ホ絶ヘズ探射ス、嘗テ激戦地タリシ重砲隊ノ陣地ニ至レバ不発彈破片散乱シ斃馬ノ白骨所々ニ遺棄セラレアリ、秋家塞子ヲ經テ八艘船ニ至リ第二小隊ト交代シ余ハ第一監視哨タリ、王家屯ニ宿營シ沿岸ヨリ大潮口ニ至ル海岸ノ監視ニ任ス、聯隊長殿ハ尚ホ病ヲ此地ニ養ワル

同八日 晴レ 数回巡視異状ナシ、午后 陛下ヨリ御下賜品酒ト海苔トヲ拜受シ、慰問使トシテ宮本侍從武官來陣セララル

隊長殿ヨリ遼陽ノ戦報ヲ聞ク、吾ガ軍ハ八師團ニシテ敵ノ十二師團ニ当リ、吾レノ死傷約二万

同九日ヨリ十三日ニ至ル 海岸監視中異状ナシ、抑モ此ノ附近ハ重ニ漁業ヲ以テ生産トナシ居リ、船舶ノ出入ヲ禁セシ為メ非常ニ困難ヲ極メタリ、大潮口ハ吾ガ兵站部ノ物資輸入ノ淀泊場ニシテ支那船ノ福湊夥〔福〕ダシク、重ニ菜・馬鈴薯・芋等ニシテ后沙包兵站司令部ノ買上品タリ、金州・復州附近ヨリ來ル

同十四日 晴レ 聯隊長殿ノ使節トナリテ、ダルーニ病院ニ山本中尉ノ傷状ヲ訪フベク午前七時出發、長嶺子停車地ヨリ便乘ス、砲兵旅團長大迫少将モ亦タ軍ノ參謀長ニ転任ノ為メ便乗セラル、実ニ戦地ニ在リテ而モ敵ノ敷設セル鉄道ヲ占領シ吾ガ用ニ供ス、実ニ愉快、室ハ無蓋貨車ナリ、双台溝高地附近ヲ通過シテハ当時ヲ追想セラル、況シテ大迫閣下ノ心情察セララル、營城子小休止、輪卒隊アリテ麦湯ヲ供ス、夏家河子ニテ給水、三十里堡ニテ分岐シ、泡子涯ヲ經テ午后四時タルニ一着、兵站病院ニ中尉殿ヲ慰問ス、病院ハ皆露國ノ建築ニカ、リ清潔高爽ナル驚ク許リ、当時ノ戦況ヲ聞ク、感激ニ堪ヘズ扼腕ノ慨アリ、滿州軍倉庫ニ長尾氏ヲ訪フテ一泊ス、晚來ヨリ街頭ニ歩シテ支那人ノ西洋料理店ニ入り出征以來ノ洋食ヲ味ワヘ支那演劇ヲ見ル、語不明ニシテ興味ナク只巧ミニ紅粉ヲ施シテ鐘鼓嘩シク舞フヲ見ル

同十五日 早起公園ニ虎ヲ見ル、此ノ虎ハ嘗テ露人ノ妾タリシ吾ガ同胞ヲ彼レ等ノ毒手ヨリ受ケテ腹ヲ肥シタルモノナリト、園ノ大部ハ荒蕪セリ、朝食后築港ヲ見ル、偵ガ露國東洋蚕食ノ立脚地トナサントシテ經營セシ程アリテ規模ノ大ナル驚ク許リニテ、一時ニ大船十余艘ヲ揚陸セシメ得ベシ、特ニ鉄道支線ハ築港沿岸ニ敷カレ船上ヨリ車上ニ搭載シ得、西方ニ突出セル棧橋堤ハ幅四間余

ニシテ中央ニ輕便軌道アリ、築港内恰モ嘗テ廿日余リ臥起セル安芸丸ノ在ルアリ、旧知船員ヲ訪フテ旧日ヲ話ス、目下ハ一週間ニシテ往復シ得ト、昔日航海ノ愉快ヲ談シテ辞シ去リ、再ヒ山本中尉殿ヲ訪フテ午前十一時ノ列車ニ便乗シ帰途ニ就ク、午后六時帰着ス

同十六日ヨリ十八日ニ至ル 前任務ヲ続行シ同地ニ在リ、吾ガ攻囲軍ハ着々作業ヲ進捗セリト

同十九日 晴レ 寒氣ヲ覺ユ、攻囲軍ハ此ノ日ヲ攻撃ヲ実施スルニ依リ海軍ハ一層注意ヲ要スト訓示アリ、午后ヨリ砲声殷々トシテ晩秋ノ静カナル乾坤ヲ驚カシテ総攻撃開カレタリ

同廿日 未明ヨリ砲声絶ヘズ、吾ガ軍艦モ亦タ双島灣附近ヨリ間接射撃ヲナシ、尤モ威力ヲ逞セルハ右翼ニ在リテハ中村少將ノ指揮下ニ在ルモノハステセル砲台、山本少將ノ配下ハ海鼠山全部ヲ多大ノ損害ヲ払テ占領セリ、只友安閣下ノ隊而已ニ〇三高地ニ向テ三日間ノ激戦遂ニ目的ヲ達スル能ハズ中止セリ

同廿一日 晴レ西風 続テ砲声ヲ聞ク

同廿二日 晴レ 続テ砲声ヲ聞ク、第三監視哨ト交代ス、北海村ニ駐屯ス、酒及ヒ菓子ヲ下賜セラル、平遠号ノ沈没ニ就キ海岸ニ漂着物品ニ付テノ注意アリ

同廿四日 晴レ 土人、酒及ヒ鮮魚ヲ送り來ル、蓋シ此ノ日陰曆八月十五日望月ニ当ル、土人ハ皆仏前ニ香ヲ焼キ舎前ニ於テ紙ヲ焼ク、詩アリ

嘗胆臥薪業始成 心神光景両清々 秋風吹断疾雲散 嫦娥凝粧玲瓏明

新勝義兵歌滿野 敗殘醜虜歎孤城 可憐今歲今宵月 恰似嫣然熨遠征

北海村々童教授次韻ス

威鎮江渚甚廉明 鱉鱉巨艦感恩情 漁人釣懷攸意 商壳獲財發樂声

簞食壺漿慕至德 望雲思覓濟蒼生 封侯万里凱旋日 社稷单政悉反正

北海村ハ全ク漁村ニシテ、船舶ノ出入ヲ禁スル為メ非常ノ困難ヲ感ジ、屢來リテ出漁ヲ許可セラレンコトヲ請フテ休マズ

同廿六日 晴レ 此ノ日ヨリ各方面ノ大口経砲^徑ノ総攻撃ニテ、右翼方面ニテハ碾盤溝南方ニ廿八珊知巨砲四門ヲ据へ間接射撃ヲナシ、各縦隊共ニ海軍砲重砲共ニ砲口ヲ揃へテ攻撃シ、殊ニ廿八珊知巨砲ノ威力ハ敵ヲシテ狼狽措ク能ハザラシメタリ
同廿七日ヨリ廿九日 砲声絶へズ海岸別ニ異状ナシ、村役場ヨリ始メテ慰問状及ビ清龍丹ヲ添へテ送り来ル、前線巡視中山本少将ハ狙撃セラレテ死セリト

同三十日 前日ニ異ナルナシ

十月一日 晴レ 兵士監視ノ下ニ漁船ヲ出ダシ鮮魚ヲ得テ戦線ニ送ル、毎日施行ス

同三日 晴レ午後ヨリ大風雨 夜間非常ナル爆声ヲ聞ク

同四日 第四下士哨ト交代シ黄泥河子ニ至ル、此日モ海岸波高ク機械水雷一個ヲ打チ上グ、前夜ノ爆声ノ水雷ナルヲ察セラル、小銃ヲ打チテ破裂セシム、大破孔口ヲ^{マユ}生ス、此地北風吹ケバ波高ク南風ハ波静カナリ、水雷ハ繫留索断テ浮流セルナリ
同五日ヨリ八日ニ至ル 毎日晴天 異状ナシ

同九日 晴レ 此日命令アリ、坂本少尉ハ川邊少尉ト交代第三小隊長タリ、坂本少尉ハ聯隊旗手、高山少尉ハ中尉ニ昇リ、高橋少尉ハ軍司令部付トナル

同十日ヨリ十三日ニ至ル 毎日晴天 日々寒氣ノ加ワルヲ覚ユ

同十四日 晴レ 武川先生ヨリ歌一首ヲ送リテ慰問セラル

日の本の光り輝く武士よ早や吹き散らせ秋草の露

此日支那船一艘波ニ流サレテ監視区域内ニ入ル、漁舟ニ乗シ小銃ヲ備ナヘ射撃シテ捕獲セリ、載スル所粟及ヒ梨子、蓋シ旅順ニ入ラントシテ風勢ノ為メ流サレテ至リシモノナリ、舟人ヲ村長ニ托シ舟及ヒ貨物ヲ没収シ、梨子ハ戦線ニ送レリ、恤兵品菓子・烟草ヲ拝受ス

同十五日 西北風烈シ 第一下士哨ト交代ス、絵葉書二通ヲ得

渤海の雲霧はれてほがらかにあらわれ出る軍艦の旗 軍旗の絵

同十六日 晴レ 情報ニ依レバ、我が兵龍眼占領以来、敵ノ水源池ヲ発見シ之レヲ断チシ為メ要塞内非常ニ困難ノヨシ

同十七日ヨリ廿三日ニ至ル 毎日西北風 海岸異常ナシ

同廿四日 晴レ 此ノ日ヨリ聯隊長殿前線ニ出張セラレ、旅順市街ハ吾ガ砲丸ノ為メ大火災ヲ起セリ

同廿五日 第四下士哨ト交代シ、聯隊ハ半嶋南部ニ割拠セル敵兵ヲ駆逐シ、嶋灣全部ヲ監視シ得ルニ至レリ

身は仮令異域の土と消ゆるとも誉れ残さん故郷の墓

同廿六日 海軍艦隊ノ要塞攻撃スルヨシ、北方野戦軍ノ情報ニ接ス

敵將黒鳩公ハ新着欧露兵ノ増援ヲ得二十万ノ大兵ト六百門ノ砲煩トヲ有シ、瞳々タル宣言ヲナシ、一挙シテ遼陽ノ大敗ヲ回復セン

トシ、十月六日ヨリ運動ヲ起シ大逆襲ヲ企テシモ、吾レニ機先ヲ制セラレテ全然失敗ニ帰シ、却テ吾レハ敵ヲシテ全ク沙河以北ニ

駆逐シ得タリ、此ノ役捕虜七百、遺棄セル死屍一万三千三百三十、傷者五万、吾レノ損害死傷約一万九千、戦利砲四十五門

恤兵品酒・烟草ヲ受ク

同廿七日ヨリ廿九日至ル 毎日晴レ 怪シキ支那船一艘ヲ撃沈ス、近来要塞内副食物ノ乏シキニ連レ密売船随テ多ク、吾カ仮装巡洋

艦ハ絶ヘズ海上ヲ警戒セリ

同卅日 半晴 攻囲軍ハ第三回総攻撃ヲナセリ、其軍隊区分ハ

右縦隊ハ松樹山砲台、中央隊ハ二龍山砲台、左縦隊ハ鷄冠山砲台

終日只砲声ヲ聞ク而已

同卅一日 晴レ 此ノ日モ続テ攻撃スレトモ、右縦隊ハ遂ニ目的ヲ達セズ、中央隊ニ在リテハ一戸部隊ノ上砲台占領ニテ同砲台ヲ一

戸砲台ト命令セリ、左縦隊ニアリテハ東鷄冠山突出部ノ瘤山砲台ヲ占領セリ、海軍モ亦タ大砲撃ヲ加ワヘ市街及ヒ軍艦ニ多大ノ損

害ヲ得セシメタリ、攻囲軍尚ほ坑道作業ニ全力ヲ灑キツ、アリ

十一月一日 晴レ北風寒甚ダシ 追送品ヲ受領ス

同三日 天長ノ佳晨ナルヲ以テ沿岸土人ニ訓令シテ旭旗ヲ調製シテ各戸ニ立テシメ、資力ナキモノハ金錢ヲ給シテ調製セシメタレ

バ、寂莫^{〔寞〕}荒涼タル寒村モ亦夕何トナク浮キ立ツノ感アリ、新版図ニ此ノ佳節ヲ祝ス、又一生ノ記念ナリトテ網ヲ投シテ鮮魚ヲ得、大旭旗ヲ舎前ニ交叉シ、月末ノ日給ヲ蕩尽シテ酒錢ニ当テ、陛下ヨリ下賜セラレタル御酒ヲ酌ミ、盛宴ヲ張り飲ヲ尽シヌ
 同四日 晴 西北風烈シク午后暗雲雪ヲ催シテ至リ、初雪ヲ見ル

同六日 晴レ 松樹山・二龍山砲台ノ火薬、吾ガ海軍砲ノ為メニ爆発ス、恤兵品受領

同七日ヨリ九日ニ至ル 毎日晴天 寒氣ヲ加ワウ、宿营地附近ニテ葬儀ヲ見ル、死后三昼夜哭女ト云フモノヲ頼ミ来リテ仏前ニアリテ号哭ス、之レ単ニ声ヲ発スル而已ニテ一老人ノ号令ニヨリテ休ム、柩ハ非常ニ堅固ニ造ラル、蓋シ死后百日間入口ニ安置シ出入必ズ拜ス為メニ惡臭ヲ妨ク為メ非常ニ固定ス

同十日 第二下士哨ト交代、此日前線ニ隊長殿ヲ訪フ、途上遙カニ二百〇三高地ヲ望メバ、平々凡々タル一ノ円山ナレトモ、一度怒レバ数万ノ生靈ヲ殺スト思ヘバ何トナク妙ナル感情ノ起ルヲ禁スル能ハズ、陣家溝前面ノ高地ニ造ラレシ展望哨ノ囲壁ハ、敵ノ巨弾ノ為メニ粉碎セラ^{〔レ脱カ〕}海兵三名戦死・騎兵三名負傷セリト、此ノ海兵ハ平遠号乗組ノ水兵ナリシヲ陸上勤務ニ服セシ為メ過日ノ難ヲ免レシヲ今又茲ニ死セリ

同十一日ヨリ十四日ニ至ル 晴天 西風寒威日ニ加ワリ攻囲軍ノ苦心名状スベカラズ

同十五日 朝来ヨリ密雲澹々トシテ飛雪霏々トシテ来ル、此日西北風烈シク又水雷一個ヲ打チ揚グ、積雪尺余、水雷ハ円形ニシテ七ケノ尖角ヲ有シ、永ク水中ニアリシタメ貝類附着セリ

同十七日 晴レ 此日命令アリ、吾ガ騎兵聯隊ハ第一中隊ヲ留メテ伝騎用トシ、第二・三中隊ヲ以テ北進野戦軍ニ参与スベシト、出発準備ヲナス

同十八日 晴レ 午後一時出発、大潮口・長嶺子・双台溝ヲ經テ營城子ニテ聯隊ニ合シ宿營ス

同十九日 晴レ 午前八時出発、牧場駅ヨリ王家屯西方高地ヲ經テ前草鎮堡少休止、三十里堡中食、大房身ヲ經テ金州街道ヲ北進シ、南山ヲ右ニ見テ金州城裡ニ一泊セリ、經来ル所皆古戦場、殊ニ激戦ノ趾ヲ留メシ南山ヲ望ミテハ転々旧懐ノ情ニ堪ヘズ、昔日ノ影ヲ止メズト雖モ、尚ホ漣濠等ノ趾ハ歴々トシテ見ラレ、幾多忠魂ヲ弔ヘシ一片ノ木標ハ扇子山頭ニ立ち、折カラノ晩照ハ金州灣ヲ

染メテ敵兵殺戮ノ当時ヲ想起セシム詩アリ、城中ニハ兵站司令部アリ

兵馬腔腸半歳間 奉令再過旧時関 蒼波洗岸金州海 堅壘繞腰扇子山

轟地砲声今那処 凌天墓標趾猶閑 追思当日血如湧 不破醜夷遂不還

同十九日 晴レ 午前九時出發、十三里台・三十里堡ヲ經テ蘇家屯停車場ニ至リテハ坐口ニ聯隊ノ初陣セシノ日ヲ思ヘ出シヌ、今ハ

吾カ軍用列車ハ絶ヘズ北方ヨリ来リ北方ニ去ル、此日龍口附近老爺廟ニ宿營ス、此地ハ日清役ニモ吾ガ軍ニ妨害ヲ加ワヘタル程ニテ土人ノ心情甚タ險惡ナリ、初メテ豆油ヲ絞ル器械ヲ見ル、其構造甚ダ粗造ナレトモ清人ノ事業トシテハ見ルニ足ルモノアリ、舎主ノ子靴下及ヒ手套ヲ盜シ去ル、鞫問状ヲ得大懲戒ヲ加フ、馬賊ノ巢屈地ナリト聞ク

同廿一日 午前九時三十分出發、普蘭店停車場ニテ中食ス、此地ハ第二軍上陸ト共ニ騎兵第三聯隊ノ鉄道破壊ヲナシ占領セシ所、線路ニ沿テ北進シ南瓦房店停車場ニ宿營ス、同停車場ハ非常ニ広大ニテ構内延長ニ千米突ニ及ヒ、兵舎・厩舎數棟建設ニ着手シ已ニ大部分ヲ了シタル、落成シタル構内及ヒ東山ノ斜面附近ニ充滿シ、敵国ガ此地ヲ以テ中間ノ根拠地トナサントセシ景跡顕然タリ、聯隊ハ馬繫場ヲ北端ニ置キ夫ノ南端ニ宿ス、往復ノ困難名状スベカラズ給養又不良、宿舎モ亦タ不良、人々不平ヲ訴フ、夜寒特ニ烈シク感セララル

同廿二日 同地ニ在リテ滞在人馬ノ休養ヲナス、諸事余リ不便ナル為メ充分ノ休養ヲ得ズ

同廿三日 晴レ 午前八時出發、鐵道線路ニ沿テ北進、得利寺停車場ニテ午餐、同地ハ構内等ハ余リニ広大ナラズト雖モ、奥軍ガ敵ノ滿州軍ノ主力ヲ辟頭ニ擊破シ、彼等ヲシテ又立ツ能ワザルニ至ラシメタル古戰場ニシテ、構内ノ北方ニ当リ險峻ナル山脈連ナリ、僅カニ鐵道線路附近ヲ余スノ而已、當時彼我兵力五ヶ師団ニ上ルニモ似ズ、敵力得意ノ防禦工事ノ趾モ見受ケラレス、蓋シ遭遇戦ノ結果ナラン、午后六時頃北瓦房店ニ着泊ス、荒涼タル山村ナリ

同廿四日 晴レ 午前九時出發、線路ニ沿テ北進シ某村落ニテ午餐、熊岳城東北莫家屯ニ宿營ス、熊岳城ハ日清役ノ古戰場、城壁等ハ尚ホ巍然トシテ聳ユ

同廿五日 晴レ 午前八時半出發、二道河子附近ニテ午餐、蓋平西北方海山寨ニ村落舎營ス、蓋平南方ニ蓋平河アリ河水已凍結ス、

鉄橋ハ幸ニ破壊セラレズ、蓋平城モ亦夕日清ノ古戰場タリ、夜ニ入り少雪アリ

同廿六日 午前八時半出発、蓋平城北方ヨリ線路ニ沿テ北進シ無名部落ニテ午餐、大石橋ニ着泊ス、同地ハ東清鉄道ノ営口ニ達スル分岐点タルヲ以テ停車場モ亦夕日壮ナリ、市街ニハ別ニ障壁ナシ、重ニ商業ヲ営ミ中々繁盛ナリ、市街南方約一公里突ノ地点ニ地隙ヲ利用シテ四十門余リノ砲兵陣地ヲ構成シアリ、此地ニハ黒鳩公來陣セシトカニ聞ケリ、今ハ吾カ兵站部及ヒ測図部其他種々ノ部隊アリ、民舎ニ投宿ス、南瓦房店以來停車場ノ宿営ヲ避ケタリ

同廿七日 晴レ 同地ニ在リテ人馬ノ休養ヲナス、余等ノ舎主及ビ主婦中々ノ愛驕者^驕ニテ一兵ノ疎造ナル三弦ヲ見出シ弾センコトヲ乞フ、舎主歌ヘ主婦彈ズ、其音其節中々面白ロシ、只夫ノ意味ヲ解スル能ハズ、后チニハ余リ賞揚セシ為メ彼レ得意ニナリテ中止セシムルニ困難セリ、午后街頭ニ歩ス、当日ハ市ニシテ地方ノ土民四方ヨリ集マリ来リ、馬匹ヲ売ルモノ、農具食料、客ヲ呼び直段ノ押引ノ声異様ニ聞コユ

同廿八日 午前八時出発、此日行軍途上ニ病兵トナリ入院セシメシモノ四名、后チニ至リ三名病死シ、一名ハ凍傷ニカ、リ不具者トナリシト、中隊ノ大行李監視ヲナシ、八里河ニテ午餐、海城南方ニモ河流アリ大鉄橋ヲ架ス、破壊セラレズ、海城西方約一里言堡子ニ村落舎営ス

同廿九日 晴レ 出発、鞍山砦ニテ午餐、鞍山砦南方ニ山脈連互シ道路ハ洞門ニヨリテ通セラレ線路ハ西方ニ迂回セリ、部落大破ニ及ヒ荒涼タリ、北方約二里ノ地陶管屯ニ村落営ス

同卅日 晴レ 午前九時出発、前面遙カニ山脈ノ連ナルヲ望ム、此レ遼陽南方首山堡一帯ノ高地ナリ、近クニ随テ累々タル山脈ニヨリテ巧ニ防禦工事ヲ敷設シアリ、線路ハ首山堡高地西方ヲ迂回ス、本道ハ首山堡東方ナレトモ聯隊ハ線路ニ沿テ北進ス、同高地脚線路附近ニハ吾ガ兵ノ急造掩堡アリ、此ノ附近幾多ノ生靈ヲ損セシ跡歴然タリ、敵ハ高地半腹ニヨリ工事ヲ施コシ吾ガ軍ヲ瞰射セシ有様ニテ四辺馬骨散乱セル、吾兵士ノ帽子・靴等ハ四方ニ遺棄セラレ遺体モ亦夕日村ノ瓦堀スル所トナリシヲ見受ケラル、山腹南面ニハ數基ノ墓標ハ肅然トシテ立テラレ數ヶ月ノ後チ激戦ノ趾ヲ想起セシム、首山堡北方ノ菜家屯ニ村落舎営ス、遙カニ遼陽停車場ノ高塔ヲ望ム、此地ハ少数ノ寒村ナル上古戰場ノ后チナレバ諸物資欠乏シ宿営不便ナリ

十二月一日 同地滞在、諸物品ノ清潔整頓ヲナス、宿營倭小・不潔・不愉快極マリナシ、部落北方畑地ノ高粱ハ中間ヨリ刈り取ラレ、遼陽城ニ至ル約一里ノ間殆ト急造掩堡連互セリ、如何ニ前進ノ困難ナリシヲ察セラル、掩堡ハ高粱ヲ土台トナシ泥土ヲ以テ造ラレアリ、連日ノ雨天ニ道路行軍ノ状態想ヘヤラル

同二日 晴レ 東方約一里半方家屯ニ転宿ス、首山堡高地脚ニアリ東方ニ当レリ、首山堡東面半腹ニハ珍ラシク古樹生茂シ一仏寺アリ、風光稍佳也、同地モ亦夕寒村ニシテ^蔬踞菜類等求ムルニ由ナク不便ナリ、寒威日ニ加ハリ地上凝結セリ、命令アリ、当時聯隊ハ遼東守備軍ニ属セラル、聯隊本部ハ首山堡ニアリ

同三日 晴レ西北風 滞在五日ニ至ル迄別ニ記事ナシ、馬匹運動后物品ノ整理

同六日 晴レ 前同様、滿州軍司令部付閑院宮殿下ヨリ酒二合ヲ下賜セラル

同七日 晴レ 外乗シテ首山堡高地防禦工事ヲ見ル、其巧ナル驚ク許リナリ、野狐ヲ見出シ襲撃捕獲セリ、此日氷上鉄ヲ給セラル、氷上鉄ハ一肢ニ四ケノ角錐ヲ附着シ氷上ノ行動ヲ自由ナラシム

同八日 午前九時命令ニヨリ出発、首山堡ニ集合シ鐵道線路ヲ横断シ西北ニ向テ行軍ス、朔風切ルガ如ク浮雲ニ連レテ飛雪面ヲ打チ来ル、午后二時頃大沙嶺ニ至リテ舎營ス、同部落ハ此ノ附近ノ大部落ニテ耶蘇教会堂アリ、井水鉄臭ヲ帯ヒテ飲ムニ堪ヘズ

同九日 晴レ 午前十一時頃黄泥窪ニ達ス、此地モ亦夕附近ノ大部落ニシテ商業又盛ナリ、聯隊ハ暫ラク同地ニ在リテ滿州軍ノ左翼警戒ニ任ス、第三小隊ハ一大商家ヲ徵發シテ舎營ス、此地ハ北方約一里ニ媽々街アリ、太子河沿岸ニシテ吾兵站部アリ、其下流ニテ西方ニ当リ同シク一里ノ地ニ小北河アリ、兵站司令部アリ

同十日ヨリ滞在十四日ニ至ル 毎日馬匹運動后休憩

同十四日ヨリ 軍命令ニヨリ渾河・遼河間ノ地区ノ馬上略図ヲ取ル、同日前田特務ニ從テ老官坨附近ヲ測図ス、当時敵ハ四方台ヨリ烏邦牛・阿司牛・上下馬^{上下}ノ線ニ在リ、時々斥候ヲ出ス

同十五日 休憩、此日二〇三高地ノ占領ヲ伝フ

同十六日 川邊少尉ニ從テ遼河左岸ノ地区ニ出張測図シ六間房ニ一泊ス、此辺一面ニ広濶地ニシテ騎兵ノ活動ニ適ス、池沼水沢モ亦

夕氷結シ自在ニ行動スベシ

同十七日 晴レ 双山子・富家屯・三家子屯附近ニ至リ、富家屯北方ニテ敵ノ十余騎ト遭遇セシカドモ、彼我戦鬪ヲ交ヘズシテ退却セリ、馬圈子ヲ経テ午后十時帰宿セリ

同十八日 滞在休養、午后同、雲雪ヲ催シテ至リ少時ニシテ休ム、西北風ハ凜烈トシテ手足自由ヲ失ナウ程ナリ、名古屋后備騎兵中隊来リ合シテ名和支隊トナル

同十九日ヨリ廿三日迄 同様滞在、馬匹運動后休養ス、我小隊ノ舎ハ大家ニシテ尤モ冬營ニ適ス、舎主又懇篤ナリ、店頭木綿ヲ売ル、廿四日モ同様休養

同廿五日 兵卒二名ト劉二堡守備隊后備第四十九聯隊ニ至リ情報ノ交換ヲナス

同廿六日 晴レ 増永少尉ニ從テ頭道勾子・大万附近ヲ測図ス、同夜大万ニ一泊ス

同廿七日 晴レ 葦子溝・大烟角ヲ経テ帰營ス

同廿八日 晴レ 旅順背面ニ龍山占領ノ情報ニ接ス、滞在休養

同廿九日 晴レ 同地滞在迎歳準備ヲナス、陣中ナレトモ支給セラレタル糲米四合ニ食料ノ残米ヲ蓄ヘ置キシヲ粉ニシ餅ヲ搗キ各分隊ニ分配セリ、清国ニテハ臼ナキ為メ瓶ニテ杵ハ新造ナシテ搗キタリ、其疎造ナル内地ノ餅ノ比ニ非スト雖モ、戦地ニ在リテハ又

^格角別ニ感セラヌ

同三十日 晴レ 同様各營舎粧飾ニ競争ナシ、吾ガ小隊ニテモ門前ニ寄生草ヲ取り来リテ縁門ヲ造リ、国旗ヲ交叉シ、藁ニテ兵士ノ人形ヲ造リ防寒用外套ヲ着セ、病兵ノ帽子ヲ借りテ步哨ヲ立テ、軍刀銃ヲ持タシメタルヲ以テ、土人ハ皆奇異ノ思ヲナシ門前常ニ人ノ山ヲナシ、店頭殊ニ商業アリシトカニテ店主モ亦夕豚肉ヲ送り来リテ新年ヲ祝スルノ意ヲ表セリ、室内ニハ日本の神棚ヲ造リ、
メヲ張り松ヲ立テタリ

同三十一日 晴レ 同様諸般ノ準備ニ日ヲ暮ラシヌ、除夜ノ詩アリ

百戦拳鞭常作先 尚余九死一生縁 西夷未滅年還逝 撫劍慨然除夜天

陣中更無俗塵纏 債鬼不來歲暮天 恩賜金尚殘囊裡 黃昏去訪酒保辺
東天微白曉雲橫 聽尽隣鷄三四声 料識惜年人未寐 残灯明滅映窓明

明治三十八年一月一日 征露第二年

晨起乗馬武装ヲナシ同地西方畑地ニ集合ス、聯隊長指揮ノ下ニ遙拝式ヲナシ抜刀最敬礼ヲナシ君が代ノ楽譜ヲ吹奏シ、土民見ルモ四辺山ヲナス、此ノ異様^{〔偉容カ〕}嚴肅ナル容儀ヲ拝シテ彼レ等何ノ感アル一斉ニ日本国好々ト囁キヌ、式終リテ解散、将校ハ聯隊本部ニ集合ス、祝賀会ヲナシ、各兵士ハ各小隊若シクハ各分隊毎ニ恩賜ノ酒肴ヲ酌ミテ新年ヲ祝ス、吾ガ小隊ニテハ小隊一堂ニ会シ、堂ノ粧飾肴ノ調理各委員ヲ設ケ、室内ニハ毛布ヲ敷キ連ネ、正面ニハ金紙ヲ切り抜キテ菊桐ノ御紋章ヲ天幕ニ貼付シ中央ヲ絞リテ、壁ニハ兩陛下万歳ト大書セル一幅ヲカケ祭壇ヲ設ケ、室ノ四面ニ各国々旗ヲ引廻シ、中央ニ清国ノ花灯籠ヲ釣り、料理ハ生魚鶏ノ吸物ニ馬鈴薯^{〔薯〕}ノ金トン、菜、人参、午旁（人参・午旁）干シテ内地ヨリ送りシモノ（スルメ等アリ）、入口ニハ征露亭千客万来ノ安灯^{〔行〕}ヲカケ、正午開会、小隊長川邊少尉招待シ盛ニ宴会ヲ開ク、点灯后尚ホ各兵士ノ財囊ヲ蕩尽シテ第二ノ宴ヲ張り夜半ニ至ル、情報アリ、敵ハ老官坨附近ニ出沒シ其数約三百ト、明日ハ午前六時出発、第二中隊ハ同地附近ヲ搜索スベシト、宴ヲ撤シ準備ヲナシ寝ニ就ク

同二日 晴レ 午前三時起床、搜索中隊トナリテ出発、第三小隊尖兵タリ、呉家岡子附近ニ至リ搜索ス、更ニ敵情ヲ得ズ、進テ老官坨ニ隻騎ヲ見ズ、蓋シ前日敵ノ斥侯同地附近ヲ徘徊セシヲ謬リ伝ヘタルナリ、帰途小北河通信所ニテ旅順ノ開城ヲ聞キ万歳ヲ唱、午后三時帰途ニ就ケリ、即刻聯隊本部ニ至レバ同様情状着セリ、去年以来左シモ頑強ナリシ旅順守兵モ遂ニ吾ガ攻撃ニ堪ヘズ軍門ニ降ヲ乞ヘリト

同三日 晴レ 西方畑地ニ集合、聯隊長ハ旅順開城ノ情報ヲ告ケテ万歳ヲ三唱ス

同四日 晴レ 微風暖 斥侯トシテ六間房附近ヲ搜索シテ敵情ヲ得ズ、帰来ス

同五日 晴レ 休養、福岡県高等二年女学生ノ作ニナレル慰勞状ヲ受領ス

同六日 晴レ 兵二名ト共ニ刘二堡ニ情報交換ニ至ル

同七日 晴レ 外衛兵トナル、敵騎襲来ノ風説アリ

同八日 晴レ 此日名古屋中隊ハ搜索中隊トナリテ出発命令アリ

(一) 去ル六日、東木口(小北河西北四里半附近)ニ敵騎五十、裁反子附近ニ八百騎出沒セリ、又昨日敵騎百四十西例子(牛莊北四里半)ニ、同日午后二時頃敵騎二十名例分子(海城西北三里)附近ニ出沒セリ

(二) 聯隊ハ敵騎ヲ撃退スルノ目的ヲ以テ、九日唐麻塞附近ニ向テ前進セントス

(三) 熊本中隊ハ搜索中隊トナリ本日午前九時出発、大駱駝背附近ニ向テ前進シ、太子河兩岸ノ地区ヲ搜索スベシ

(四) 各中隊ハ明九日午前九時、同村西南畑地ニ集合スベシ、馬装ハ輕装

同九日 晴レ 午前九時出発、第二中隊前衛トナリ太子河ニ沿イテ西南ニ前進シ数斥候ヲ派シテ搜索ス、敵情ニ就テ得ル所ナク、唐馬塞ニ至リテ村落露營ス

同十日 晴レ 午前九時出発、三尖泡ヲ経テ黄沙坨ニ向テ前進セントシ、第二中隊前衛第三小队尖兵トナリ太子河ヲ渡ルヤ否ヤ前面ニ銃声ヲ聞ク、之レ斥候ノ敵騎ト衝突セルナリ、尖兵ハ急歩外口子西北方ノ斜堤ニヨリ前面ヲ望メバ、長崗子・麻線勾ノ線ニ在リテ一団ノ黑影ヲ認ム、彼我識別ニ苦ム、銃声ハ益々此ノ方面ニ聞コユ、暫ラクシテ馬賊一名来リ報シテ曰ク、様子泡附近ニハ敵騎多数ニ来襲シ日本軍ニ属セル馬賊ヲ駆逐セリト、依テ前面ノ黒団ヲ問ヘバ知ラズ、中隊ハ斜堤ニ徒歩戦ヲナシ、余ハ斥候ヲ命セラレ、広濶セル地ヲ彼ノ黑影ニ向テ近クニ彼方ヨリモ二三騎群ヲ離レ馳セ来リヌ、見レバ支那服ヲ着スレトモ帯劍ヲナシ銃ヲ負ヘ手ニ長槍ヲ横タリ、依テ敵ノ服装ヲ変セシモノナルヲ覺リ還リテ報告ス、間モナク前面ノ黒団ハ前進シ来リ、斜堤前三千米突ノ地ニ留マリ散開隊形ヲ取レリ、中隊ハ徒歩戦ヲナシ、射界ニ入ラバ急射撃ヲナサント待チ構ヘタリシニ中々近ヨラズ、見レバ黒団益々増加シ前面民舎ニ放火セリ、同時敵騎四五名吾ガ前面ニ来リシカバ射撃、其二馬ヲ殪シ死体ヲ遺棄シテ退却セリ、然ルニ前面畑地ニ轟然タル響キヲ聞クト同時ニ巨弾空ヲ切りテ来リ背后ニ落ちて爆發セリ、続テ一発又一発附近ニ破裂シ斃馬三ヲ出セリ、中隊長ハ衆憂敵セズ且ツ砲ヲ有スルヲ以テ一時退却ニ決ス、望宝溝附近ニ向ヘル第三中隊及ヒ本部モ優勢ナル敵ノ為メニ退却シ来リ、魚

窟子附近ニ在リシ吾ガ軍使用ノ馬賊共モ砲撃セラレ退却シ来レリ、彼レ等ハ日章旗ヲ真先ニ立テ、隊伍不整頓ニテ騎兵アリ歩兵アリ、皆劍ヲ帶セズ、モーゼル銃若シクハ村田銃ニ似タル銃ヲ持チ、中ニハ二人ニテ担ヘル大ナル銃アリ、長サ九尺位アリ、唐馬塞附近ニ在リテ敵ヲ監視ス、數斥候帰来シテ報スル処ニヨレバ、敵ハ騎兵約五千砲八門ヲ有セルモノ如ク尚ホ南下ノモヨウアリシト、茲ニ於テ各地枢要地ニ伝騎ヲ馳セテ警戒セシメ、聯隊ハ刘二堡ニ退却シ、中隊ハ小西地（刘二堡西方一里）ニ在リテ前哨トナル、此ノ日荒井少尉ノ斥候ハ包围セラレ、夜ニ入りテ馬装銃器ヲ放棄シ軍刀ヲ振テ突出シ不意ヲ衝キシ、為メ七名ノ内三名ノ戦死者を出シ他ハ無事ニ帰来セリ

同十二日 晴レ 同地ニ在リテ斥候ヲ派遣ス、他ハ出発ノ準備ヲナス、昨日駱駝背附近ノ歩兵ヨリ出サレタル駐止斥候モ亦タ襲ワレテ死傷者ヲ出セリト、諸情報ヲ綜合スレバ敵ハ南下シテ牛莊ヲ襲ヘタルモノ、如ク、海城・鞍山站間ニ於テ數ヶ所ノ鉄道少破壊ヲサレタリト

同十三日 晴レ 遼陽附近ニ在リシ歩兵第五聯隊ニ砲兵ニケ中隊及ヒ騎兵支隊ヲ以テ混成支隊ヲ編成セラレ、吾ガ分隊ハ川邊少尉ニ從テ洞羅堡ヲ經テ四方台ニ至リ、牛莊方向ノ敵情搜索ニ任ス、支隊ノ行進路ナリ右翼ハ騎兵集團ニシテ清水中尉斥候タリ、左翼ハ熊本中隊ヨリ斥候ヲ派遣ス、吾ガ斥候ハ洞羅堡ニテ支隊本隊ニ合シ、夫レヨリ常ニ一里余前面ニ在リテ搜索ス、四方台ニ至ル敵情ヲ得ズ、午食、耿家庄子ヲ經テ大路沿ニ至ル途上吾ガ軍ニ使用セラル、支那人ノ間諜ニ逢フ、露騎ハ昨日牛莊ヲ襲ヘ守備二名生擒セラレ他ハ皆退却セリ、彼レ等ハ市街ニ入ラズシテ露營シ、今早朝營口ニ向テ出発セリト、又支那人ノ馬三四頭ヲ引キ来ルニ逢フ、故ヲ問ヘバ昨日牛莊方面ニテ吾ガ軍ノ為メニ糧食ノ運搬ヲナシタルニヨリ油ヲカケテ焼棄セラレタリト、尚ほ陸統同様ノ土人ニ接ス、彼レハ五十余台ヲ焼却セリトゾ、此夜ハ支隊ニ合シ耿家庄子ニ村落露營ヲナス、歩兵三十五聯隊ノニケ大隊増加セラル

同十三日 晴レ 早朝出発前任務ヲ続行ス、午前十時ニ牛莊ニ入ル、敵兵ナシ、土民不安ノ色アルヲ見ル、兵站部ノ位置ニ至ラントシ街ノ中央ニ至ル、同市街ハ非常ニ不規律ニシテ曲折而已、遠ク前面ヲ望ム可カラズ、忽チ見ル前面ノ土民周章狼狽シ各戸皆戸ヲ閉チ顔色ヲ失フテ奔走ス、故ヲ問ヘバ露スキー至ルト、依テ斥候ハ急馳街端ニ出テ附近ヲ搜索ス、蓋シ土人ノ風声鶴鳴ニ響カセシナラン、兵站部ニ至リ見レバ、天一會ト云ヘル大商店ノ裏門ニ設ケラレ、周章返却セシト見ヘ食器雜具散乱シアリ、然シ敵ノ発見

スル所トナラズ渾テ依然タリ、支那兵二名之レヲ監視シ余ヲ見テ非常ニ驚喜セリ、間モナク歩兵部隊ノ尖兵到着ス、午后二時頃土人來リ報シテ曰ク、大鼻子來ルト(大鼻子ハ露兵ノ別名、鼻高大ナルヲ以テナリ)、早速散開シテ南方障壁ニヨリ戦闘形隊ヲナス、敵ハ南方約一里ノ藍旗堡附近ヲ通過シテ西走ス、其側衛ハ散開シテ村端一公里突位ノ地点ヲ行進シ敢テ牛莊ニ逼ラズ、吾ガ歩兵射撃シテ効力ナシ、午后四時頃伝騎トシテ那家窩棚ノ支隊本部ニ至リ帰り、同夜ハ牛莊ニ在リ、歩兵一小隊ト協力守備ニ任ズ、傍ラ通騎トナル、午后拾時頃支隊當テ電信アリ、一兵ヲシテ那家窩棚ノ支隊ニ至ラシム、敵ハ西方中立地帯ニ入りシモノ、如シ

同十四日 午前二時頃ニ至リ電報ニ通來ル、夜正ニ暗黒事又至急、殊ニ川邊少尉ノ撰抜ニヨリ伝騎トナル、支隊宿營地ニ向テ出發ス、道路弁セズ或ハ徒步シ或ハ乘リ漸ク那家窩棚ニ至ル、寂トシテ人影ナシ、土人ノ家ヲ叩テ聞ケバ日没頃西方ニ向テ去レリ、休ヲ得ズ、暗夜僅カニ方向ヲ定メテ小娘廟ニ至ラントス、途上微カニ馬蹄ノ響キヲ聞キ下馬、凹地ニ入りテ賺シ見レバ乘馬兵三名ナリ、敵カ味方カ不安ノ念ニ堪ヘズ、近クニ随テ帽子ノ形暗ニモ日本兵ナルヲ知り誰レカト呼ヘバ、彼レ等モ暗中不意ノ事ナレバ一驚ヲ喫セシモ、其ノ内ノ一名ハ早クモ余ノ声ヲ聞キ分ケ分隊長殿テスカト問ヘヌ、之レゾ先キニ出シタル兵卒ナリ、彼レハ未タ那家窩棚ニ至ル能ワズ、途中ニ彷徨スル内同シク支隊ニ至ル伝騎ト共ニ尋ネ來リシナリト、依テ共ニ尚ほ目的地ニ向テ前進、土人ノ家ヲ敲キ起シテ聞クニ知ラズト答フ、止ムヲ得ズマツチヲ摺リテ砲事ノ跡ヲ尋ネテ北進シセシヲ知り、夫レヨリ西北方ニ向テ追躡ス、浅湖ヲ經テ黄土坎ニ達スル頃ハ夜正ニ四更凜烈タル寒氣ハ絨衣ヲ通シテ肌ニ逼マリ、外套馬体ハ皆霜ヲ結ヒテ雪ノ如シ、殊ニ終夜奔走セシ為メ空腹ヲ感シ、各兵士共ニ此ノ附近ニ入りテ夜ヲ明サント乞テ休マズ、三十分間此地ニ在リテ休息センコトヲ許シ、民舎ヲ起シテ各戸ヲ密閉シ火光ノ漏レサル様ナシ、粟ノ粥ヲ造ラシメ各自舌鼓ヲ打チテ賞味シ約五十分ヲ費シ、舎主ノ厚意ヲ謝シ戸外ニ出ツレバ、此ハ如何ニ西南約千米突許リノ地点ニ於テ夥多シキ篝火ヲ燒キ火光天ヲ焦ス許リ、敵カ味方カ兎ニ角大部隊ニハ相違ナキモ、渾テノ点ヨリ考察スルニ敵トナスヨリ外ナク、然レバ此ノ附近トテ安心ナラズ、然レトモ自分ハ飽迄吾ガ支隊ハ此ノ道路ヲ行進セシモノト確信シ、尚ホ大光ヲ避ケ道路上ニ屢マツチヲ摺リテ前進スルニ、前面ハ茫茫タル一面ノ葦原ニ一路ノ通スル而已、時已ニ明ケントシ、昨夜火光ノ附近ニ當リ砲声殷々トシテ鳴ル、急馳太子河岸ニ達ス、吾ガ乘馬隊ノ休憩セシ趾アリ、尚ホ進テ遼河々岸ニ達スレバ前面始メテ日本兵ノ徘徊ヲ見ル、ホツト息シ尋ヌレバ之レ右側支隊ニテ騎兵集團モアリ、敵騎兵ハ本道上ニ

於テ吾ガ支隊ニ擊破セラレ退却中ニテ、前面敵霜銀世界ノ如キ中ヲ真黒ニナリテ西走セントシ、右側隊又銃火ヲ見舞ヘ敵ノ砲兵留マリテ奮戦シ、吾レニモ右側ニテ死傷二十ヲ出シ、本隊ニテ五十ヲ出セリ、敵ハ死体三十、傷十ヲ遺棄シテ退却セリ、忽チニ支隊本隊ニ至リテ使命ヲ果シテ牛莊ニ歸リテ舍營ス、敵ノ死傷約三百、捕虜ノ言ニ依レバ敵ハミスチンコ將軍ノ外三將軍ノ率ユル騎兵砲兵ニシテ克薩克兵ナリ

同十五日 晴レ 牛莊ニ在リテ前任務ヲ続行ス、此日第二中隊ハ開河城附近ニ敵騎出沒スルノ報ニ接シ午后〇時出発斥候ヲナス、支隊本部ハ牛莊ニ在リ、諸隊滞在休養、第二中隊ハ土城子附近ニ在リテ警戒ス、去ル十二日敵ハ營口ニ至リシ、偶々大石橋ヨリ趣援セル歩兵ノ為メ多大ニ損害セリ

同十六日 晴レ 朝来十溝子ニ至リテ還ル、他ニ情報及ヒ異状ナシ、第二中隊ハ土台子ニアリ、土人來リ話セラル、日清兩國ノ親睦ヲ説キテ愛嬌アリ、大石橋ヨリ赴援セル兵ハ旅順軍ノ北進部隊ナリ

君在辺関妾在呉 西風吹妾妾思夫 一行書信數行淚 寒到軍辺衣到無 支那人作

士為軍国在江長 婦守孤閨不思夫 天子有恩衣食饒 滿州寒氣眼中無 戲和作

懸軍偶到牛莊城 一擲千金欲慰情 清国美人那辺去 空看壁画思芳声 戲作

勤若務正去閑情 奮志壯場勇戰征 露国破時掛桂印 嬌妻美妾尽傾城 支那人和作

同十七日 晴レ 午前十時牛莊出發、大行李監視ヲナシ土台子ニ向テ行進ス、聯隊ハ同地附近ニ在リテ警戒スル筈、途中大望台ニテ

中隊ニ合ス、同地ニ舍營シ警戒ス、此ノ夜騎兵第二旅団ハ小北河ニ着セル由、聯隊ハ当地ニ在リテ太子河・遼河間ヲ警戒スベシ

同十八日 晴レ 支隊ヲ解散セラル、同地ニ在リ滞在郵便物到着、馬匹運動ヲナス、宿主元清国官兵タリシコトアリ諸事注意周到好

都合ナリ、此地始メテ機業ヲ見ル、機ハ日本旧式ノ機ノ如シ

同十九日 晴レ南風 休養、馬匹運動后異状ナシ

同廿日 晴レ微暖 前同断、第二中隊ヨリ第四小隊ヲ刘家台ニ、第三中隊ヨリ一ヶ小隊ヲ八家子ニ分遣、各守備ニ任ス、黄泥窪小北

河附近敵兵來襲ノ風説アリ

同廿一日 晴レ 各小隊ヨリ兵一名宛ヲ黄泥窪ニ派遣シ、遺留品ヲ整理回送セシム、当聯隊ハ一時齊藤少将ノ支隊ニ属セラレ、牛荘ヨリ開河城ニ至ル線ノ警戒ニ任セラル、支隊本部ハ牛荘ニ在リ、本日ヨリ遼東守備軍ヲ解カレ野戦軍ニ属セラル

同廿二日 晴レ 馬匹運動后記事ナシ、南風

同廿三日 夜来ヨリ北風化雪来リ寒威一層ノ凜烈ヲ加ワウ、地図調製ノ為メ太子河右岸地区ニ出張シ、石炭窩子・七房身附近ニ至リテ帰ル、第二中隊第三小隊ハ遼陽附近、第三軍司令部ノ伝騎トシテ分遣セラル

同廿四日 北風寒甚ダシ 黄泥窪ニ残留セルモノ皆来リ合ス、其言ニヨレバ、黄泥窪北方ニ於テ絶ヘズ砲声ヲ聞キ黄泥窪ニモ少数ノ敵兵来襲セル由、第三中隊ヨリ師団司令部伝騎トシケ分隊分遣セラル、支隊長齊藤閣下来村セラル

同廿五日 陰リ 馬匹運動后休養、情状ニヨレバ、阿司牛附近ノ敵ハ敵騎十八中隊来リ、我搜索隊ヲ圧迫シテ老官坨ニ逼レリ、旅団ハ吳家崗子ニ在リシモ、小北河ニ退却シテ太子河線ヲ防守セリ、北方ニ当リ遙カニ砲声ヲ聞ク

同廿六日 夜来ヨリ降雪終日休マズ北風寒甚ダシ 北方ニ当リ非常ナル砲声ヲ聞ク

同廿七日 陰リ 第四小隊ト交代シ、開河城ヨリ官草溝ニ至ル太子河徒渉点ノ監視ニ任ズ、小哨ハ刘家台ニ在リ、第一下士哨トシテ開河城ニ至ル、此日夜来ヨリ降雪寒甚ダシ、情報ニヨレバ敵ノ歩兵約一軍団・騎兵一ヶ師団ハ沈旦堡附近ニ頭ハレ、騎兵第一旅団之レト対峙シ、予備隊第八師団ト后備旅団ハ此ノ敵ヲ撃退スルノ目的ヲ以テ行動セルモノ、如シ

同廿八日 晴レ 前任務ヲ続行ス、無異ヲ刘家台ニ報ジテ情報ヲ得タリ

沈旦堡附近ニ現ハレタル敵ハ約一軍団ニシテ、吾ガ第八・第三師団之ト作戦中ナリ

騎兵第二旅団ハ渾河右岸ニ在リテ、小北河守備隊ト共ニ小北河援護中ナリ

第八師団ハ黒溝台・沈旦堡附近ノ敵ヲ攻撃中ナリ、昨日午后五時頃敵砲兵ヨリ成ル敵騎一旅団半黄蠟坨子ノ方向ヨリ東方、即チ黒溝台ニ向カヘ前進中、之レニ対シテハ我騎兵第五聯隊対戦中ナリ、諸種状報ニヨレバ敵ハ我左翼向カフテ運動セントスルモノ如ク、之レニ対スル軍ノ準備ハ凡テ整ヘ居レリ

中村上等兵ハ三名ヲ率ヘ、斥候ハ金家坨子附近右岸ノ地区ヲ搜索スベシ

此夜午後六時頃開河城北方一帯ノ地、怪シキ爆声ヲ聞キ、当初ハ氷裂トナセシモ漸次其数ヲ増シ如何ニ思考スルモ小銃声トカ聞カレズ、依テ警急乗馬集合ヲナシ刘家台ニ報告ス、能々土人ニ就テ聞ケバ旧歴尽月廿三夜ニ属シ神聖ヲ祭ル為メニ爆竹ヲナセリト、四辺皆発シテ哨処附近ニハナク却テ各哨皆非常警戒ヲナセリ、土台子聯隊舎營地ヨリモ右爆声ヲ聞テ斥候連絡ノ為メ高橋伍長来ル、此日尚ホ砲声ヲ聞ク

同廿九日 晴レ后チ陰リ 前任務ヲ続行ス、数斥候ヲ派シテ敵情搜索ニ勤ム、過日来左翼方面ニ屢々来襲セシ騎兵師団長ミスチンコ將軍ハ負傷セシヨシ、吾ガ軍ニテモ津川聯隊長重傷ヲ負ヘ、死傷約八千、味方案外苦戦ナシ、殊ニ寒氣〇度下廿度ニ及ヒ雪中ノ戦闘ナレバ非常ノ困難ヲナセルモ、遂ニ敵ヲ渾河右岸ニ撃退シ将来ノ戦闘計画ニ多大ノ功果ヲ与ヘタリ

同卅日 晴レ 午前刘家台ニ至リ午后黄土坎・林家泡ヲ巡視ス、小隊長殿巡視セラル、那家窩棚ヨリ歩兵斥候来リ前面ノ敵情ヲ問テ還ル

同卅一日 晴レ 前任務ヲ続行ス、異状ナシ

同貳月一日 晴レ 午前刘家台ニ報告ニ行ク、情報一月廿九日ニ於テ

第五師団ハ李大屯・沈旦堡間ヲ占領シ、第三師団ハ沈旦堡ヨリ黒溝台ニ至リ、第八師団ハ黒溝台ヨリ牛居ニ、村山支隊ハ牛居ヨリ七台子ニ至リ確實ニ占領セリ

第九師団ハ黒仁屯ニ開進シ、騎兵第二旅団ハ「ドウダイシ」ニアリテ阿司牛ヨリ黄蠟坨子間ヲ搜索シ居レリ、約二ヶ師団以上ノ敵ハ長灘西東ノ線ニ退却シ、是ノ線ニテ防守セントスルモノ如シ

敵ノ騎兵部隊ハ首力ヲ四方台ニ置キ、我騎兵第二旅団ニ列ス、敵ハ南下セル模様ナシ
昨三十日午后ニ於ケル情況

第二師団ノ一部ハ狼洞溝ニ増加セラレタリ、種田大佐ノ率ユル一枝隊ハ興隆台・七台子ヲ確實ニ占領セリ、騎兵第一旅団ハ李大屯ニアリ

騎兵第二旅団ハ明日尚在門方面ニ行動シ、第八師団ト連絡スル筈

敵ハ約三ヶ師団及ヒ騎兵約一ヶ師団ニシテ、目下小黄旗堡方面ヨリ長灘ニ至リ対峙シ居ルモノ如シ
 去ル十四日三叉河附近ニ来リシ敵騎ハ「ミスチンコ」「カルサコフ」「クレユコフ」三将官ノ率ユル決死隊ナリト、太子河右岸斥候
 ヲ派遣ス

同二日 晴レ 此日モ砲声ヲ聞ク、黄土坎附近ヲ巡視ス、他ニ記事ナシ

同三日 晴レ 異状ナシ、此日陰歷除夜ニ当ス、訓示ヲ出シテ爆竹ヲ禁ス、午前十一時第三中隊玉田小隊ト交代シ帰還ス、追送品到
 着、聯隊本部ニ至リ茶菓ヲ賜ワル

同四日 陰曆正月元日ニシテ土民ハ皆休業シ、分ニ応シテ美食ヲ求メテ佳辰ヲ祝シ、門前・入口・厩舎等ニ赤紙ニ天子万年・富貴不
 招来・万宝重来・黄金万両等、渾テ神前ニ一厘錢ヲ投シテ巨万ノ利ヲ得ントスルガ如キ虫ノ能キコトヲ書キテ貼付ス、之レ日本ノ
 飾リニ代用スルモノナリ、神前ニハ種々ノ裝飾ヲナス紙ヲ焼クハ一般ナリ、彼レ等ノ膳部ニ上ル美食上等ニアリテハ豚肉ノ油煮、
 吸物ニテ菜・葱・赤大根・ニンニクヲ刻ミ込メリ、其他豆ウドンニ豚肉ヲ交ヘテ煮タルモノ、渾テ甘塩ニシテ油臭ク一口忽チ嘔吐
 ヲ催ス、下等ニ在リテ豚ノ頭・腹ワタ、牛ノ頭ヲ煮込ミニセルモノニテ、飯ハ相変ラズ高粱ナリ

此日池田曹長ハ特務ニ、水上軍曹ハ曹長ニ昇進、洲本特務ハ少尉ニ、堂浦工長ハ獣医ニ任セラレ
 爆竹声中送旧年 一陽回復万象鮮 和風催暖死迷雪 旭日添光霞似烟
 兒女滿街歌里謠 佳賓戸々醉清筵 誰隣天外漂流客 遙望故山賦短扁

同五日 晴レ 此日第三中隊ノ開河城守備兵歩哨ニ立ちテ夜間怪シキ土人ニ狙撃セラレテ左大股内部ニ負傷セリ、狙撃者未詳、第三
 軍ノ集合地区ヲ達セラル、左ノ如シ

第八師団ハ羊魚灣・太子河・北辺楼子ノ線以内

第一師団、第九師団后方山崗子・小河口ノ線トス

第七師団ハ第一師団ノ后方海城・牛莊線以北トス

第七師団ハ六日ヨリ来ル十四日迄ニ吾師団ノ区域内ニ集中スル筈

吾聯隊ハ同地ニ在リテ前任務ヲ続行ス、第七師団野戦倉庫ハ耿家庄子ニ在リ

同六日 晴レ 馬匹運動后記事ナシ、此日偶水瓶ニヨリテ温浴ヲナス、第七師団騎兵土台子着、此日去年七月以来旅順攻圍軍ノ驍將ト聞ユヘシ松村務本閣下、脳充血ニカ、リ逝去セラレタリ

同七日 晴レ 馬匹運動后中隊本部ニ蓄音器アリ、午后宿營転進ノ命令アリ、此日ヲ以テ第一師団長陸軍中将松村閣下ニ功三級勲一等ヲ賜ワル

同八日 晴レ 午前九時出發、行李監視ヲナシ、烟狼塞附近交良塞ニ着泊ス、北風寒甚ダシ、当分隊滞在ノ命令アリ、夜半又命令アリテ又出發ノ準備ヲナス

同九日 晴レ 午前九時出發、行李監視ヲナシ柳家柳毫子ニ宿營ス、此日旅順ニ残セル第一中隊来リ合ス、着后殊命アリ、第二中隊ハ唐馬塞北方約二里南辺墻子ニ在リテ歩兵第三聯隊第六中隊ト協力シテ太子河附近ノ警戒ニ任ズ

同十日 同地ニ在リテ大林子・下口子等三ヶ所ニ下士哨ヲ分遣シテ徒渉点ヲ監視ス、第一師団司令部ハ黄泥窪ニ在リ、飯田中将閣下第一師団長ニ任セラル、第一中隊第四小隊ヨリ師団ノ伝騎ヲ派遣ス、栃木県ノ旧友高松卯三郎補充トシテ来ラレ共ニ旧交ヲ温ム

同十一日 同地滞在記事ナシ 両陛下ヨリノ下賜品ヲ拝受ス
同十二日 晴レ 中隊命令アリ

一、中隊ハ前任務ヲ続行ス 二、カ力馬・阿司牛ニ至ル敵ノ依然活潑ナル運動ヲナサミルモノ、如シ 三、野沢中尉ハ諸兵種通過ノ目的ヲ以テ大林子ヨリ唐馬塞ニ至ル間ノ太子河ヲ偵察スベシ 四、高山中尉ハ大烟角附近ノ敵情ヲ偵察スベシ、前田特務曹長ハ諸兵種通過ノ目的ヲ以テ菜家房子ヨリカ力馬ニ至ル遼河ノ偵察ヲナスベシ

中隊ニテ得タル情報ニヨレバ、小駱駝背駐止斥候ノ得タル報告ニヨレバ、遼河右岸老房達ニハ敵騎二三百駐屯シアリ
昨十一日渾河右岸ニ出シタル斥候ノ諸報告ヲ綜合スレバ、左ノ如シ

カ力馬・阿司牛ニ至ル敵ハ依然活潑ナル運動ヲナサミルモノ如シ、本日モ其小斥候ハ李家窩棚・老官坨附近ニ出沒セリ
田家房子ニ在ル馬賊ノ言ニ依レバ、大蘭坨子ニハ敵騎約二百アリト

土人ノ言ニヨレバ、阿司牛ニハ敵騎三百余・砲兵六門、^{〔マヤ〕}カ力馬ニハ敵騎約百、化家窩棚・六間房・馬圈子ニハ毎日敵騎約三四十来り、日没頃ニ至リ北方ニ帰ルモノ如シ

同十三日 晴レ 大林子停止、斥候トシテ出張、同地東北約半里蛤蜊崗子ニ歩兵第三聯隊ノ第二大隊アリ、皆太子河阿徒涉点ノ監視ニ任ス、異状ナシ

同十四日 晴レ 午後六時交代帰還ス、情報アリ

敵騎約八九千ハ本日日没頃三尖泡附近ニ於テ渾河右岸ニ進出セルモノ、如シ、其后不明、第二中隊ハ敵襲ニ際シテハ歩兵中隊ト協力シテ現位置ヲ固守スルコト、連絡ノ為メ倒台子騎兵第二旅団ニ前進セシ清水中尉ノ報告下ノ如シ、今十四日午前三時二十分ヨリ敵ノ騎兵約三中隊刘家崗子ヨリ老官坨ニ進入シタルモ其后前進ノ模様ナシ、其斥候ハ楊家窩棚附近ニ出沒セリ、午後三時三十分敵騎兵大部隊(目撃セル所五六中隊)ハ大烟角方ヨリ南下シ来リ尚后統部隊アリ、敵ハ渾河右岸ニ於テ吾カ軍ノ左側ニ運動セントスルモノ、如シ、歩騎連合各小隊防禦区域ヲ定メ、各個掩堡ヲ築造シ鹿柴ヲ造リ徹宵警戒ス、此夜大林子駐止斥候附近ニ小夜襲アリシモ歩兵ト協同撃退セリ

同十五日 晴レ 数斥候ヲ派遣シ現地ニ在リテ警戒ス、敵ハ吾ガ配備ノ敵ナルヲ察シ猥リニ行動セズ、騎兵旅団ト交戦少時遼河ニ沿テ退却セルモノ、如シ、午後斥候ノ報告ニヨレバ、此日歩兵支隊ハ高璋子ヨリ、騎兵聯隊ハ黄土坎ヨリ共ニ渾河ヲ渡リテ前進ス、時已ニ騎兵第二旅団八午前十時蒲河附近ニテ敵騎四五中隊ヲ撃退シ、追テ大烟角附近ニ至リ非常ニ優勢ナル敵ト遭遇シ一時渾河左岸ニ退却スルノ休ムヲ得サルニ至リ、歩兵支隊・騎兵聯隊モ同様渾河左岸ニ退却シテ防守セントセシニ、敵モ亦夕北方ニ后退セルモノ、如シ、此日玉田將校斥候、負傷一、斃馬三

同十六日 晴レ 同地ニ在リテ数斥候ヲ出シ警戒ス、午前十一時頃北方ニ砲声ヲ聞ク

同十七日 晴レ 川邊少尉ニ從テ午前九時出発、高庄子・黄土坎ヲ経テ大烟角方面ノ敵情ヲ搜索ス、過日来ノ敵ハ大烟角附近ヨリニ縦隊トナリテ阿司牛・カ力馬方向ニ退却セルモノ、如シ、帰路蛤蜊崗子ヲ経大林子ヲ巡視シテ帰還ス、恩賜ノ「粟ヲコシ」「ピスケツト」酒及ヒ烟草・防寒靴下・冰糖若干ヲ支給セラル

同十八日 晴レ 馬匹運動、午后特命アリ出発準備ヲナス

同十九日 午前八時出発、大林子ニ至リ駐止斥候トナリ、同午后一時撤退シ、月子泡ニテ中隊ニ合シ、郭家灣子ニ宿營ス、軍隊区分達セラレ

第七師団ハ黄泥窪ヨリ外馬吠ニ至ル線ニ在リ、太子河ノ右岸ニ宿營スルモノトス

第二騎兵旅団ハ阿達一路附近ニ在リテ前任務ヲ続行ス、后備歩兵第四十九聯隊ハ三家沈附近ニ在リ第一師団長ノ指揮下ニ属セラレ、第一師団ハ刘二堡ニアリ

同廿日 晴レ 馬匹運動ヲナシ、第一小隊ト交代、外衛兵ヲナス命令

一、清水中尉ハ黒坨子附近ニ位置シ双樹坨・徒家窩棚・沙崗子ノ敵情ヲ搜索スベシ

二、淵本少尉ハ老坎坨附近ニ位置シ刘家崗子・孫家崗子附近ノ敵情搜索スベシ

三、第一中隊ハ河東黄土坎ニ、第二中隊ハ郭家灣子ニ、第三及ヒ本部ハ三裸樹ニ宿營スルモノトス

四、外工兵ハ各宿營地ニ於テ出スベシ

同廿一日 晴レ 馬匹運動ノ旁ヲ歩二ノ旧友関政一君ヲ訪フテ快談壯語、田村菊造氏ノ戦死ニ対シテハ滿腔ノ同情ヲ表ス、此ノ前日清水中尉ノ斥候ハ双樹坨附近ニテ包圍セラレ一名負傷、一名捕虜セラレタリ、六間房ニハ敵兵ナキモ、馬圈子ニハ敵騎約百駐止シアリ

同廿二日 晴レ 馬匹運動后特命アリ、川邊少尉ニ從テ六間房・馬圈子附近ニ至リ、旅団佐久間斥候ト協力シテ馬圈子ニ入ラントシテ急射撃ヲ受ケ目的ヲ達セス、旅団騎兵一名負傷セリ、自后一望広闊彼我ノ識別ニ苦ムヲ以テ、斥候ハ必ず上赤下白ノ旗ヲ携帯シ記号ヲナスベシ、滿州軍司令部ノ旗ハ日章旗ニ四隅ニ星章ヲ附シタルモノ、他ハ規定ノ通り

同廿三日 午后ヨリ少雪從來少シク暖氣ニ向カヘ河水等モ周圍ハ少シク融解シ始メシガ、昨今又々寒威ヲ増シ〇度下廿度ニ至少ナカラズ、師団長ノ注意、通信ヲ迅速ナラシムル為メ独り伝令使ノ疾走ノミニ依頼セズ、諸種ノ記号ヲ用ユルヲ要ス、左ノ規定ハ各隊ヲ通シテ記号トシテ用ユ、各部隊ノ斥候ハ必ず紅白ノ小旗ヲ可成多数携行スベシ、此ノ小旗ニ依リテ通信ヲ行ナフ、其約束下ノ如

シ (一)垂直ニ立ツルトキハ連絡ノ為メニ位置ヲ示ス (二)垂直ニ上下スルハ敵ノ小部隊発見 (三)左右ニ動カスハ敵ノ大部隊発見、但シ大小部隊ノ區別ハ記号スル者ノ部隊ニ比シテ定ムルモノトス (四)敵ノ発見ト併テ敵方向ヲ示スニハ、初メノ記号ヲ済マシタルノ后チ敵ノ方向ニ向テ小旗ヲ垂平ニ保持スルモノトス、次テ敵ノ前進ヲ示スニハ腕ヲ延ハシテ標旗ヲ高ク上リ、敵ノ退却ハ小旗ヲ地上ニ向テ休スベシ (五)記号者ノ前面ニ向ケ円形ニ廻ワストキハ自己ノ前進ヲ示ス (七)記号者背面向ヲナシ円形ニ廻ワストキハ退却ヲ示ス (八)各記号ハ必ス相面シテ之レヲ行ナフ(退却ヲ示スヲ除ク)、又之レヲ受ケザルベカラズ、発記者ハ受記者ノ之レヲ受ケル迄記号ヲ連続スベシ (九)二種ノ記号ヲナスニハ第一ノ記号ヲ受クヲ見テ第二ノ記号ヲナスベシ、例令ヘバ敵兵発見及ヒ我前進ヲ報告スルニハ、小旗ヲ垂直ニ上下シ、之レヲ受ケタル后続テ記号者ノ前面ニ於テ円形ニ廻スベシ、又発記者ニ命令スルニハ、発記者ノ記号ヲ受ケタ后チ直ニ記号スベシ、此ノ如ク記号ヲ定ムルト雖モ之レニノミ依ルベカラズ、出来得ル限り記号ト同時ニ伝令ヲ派遣スルモノトス

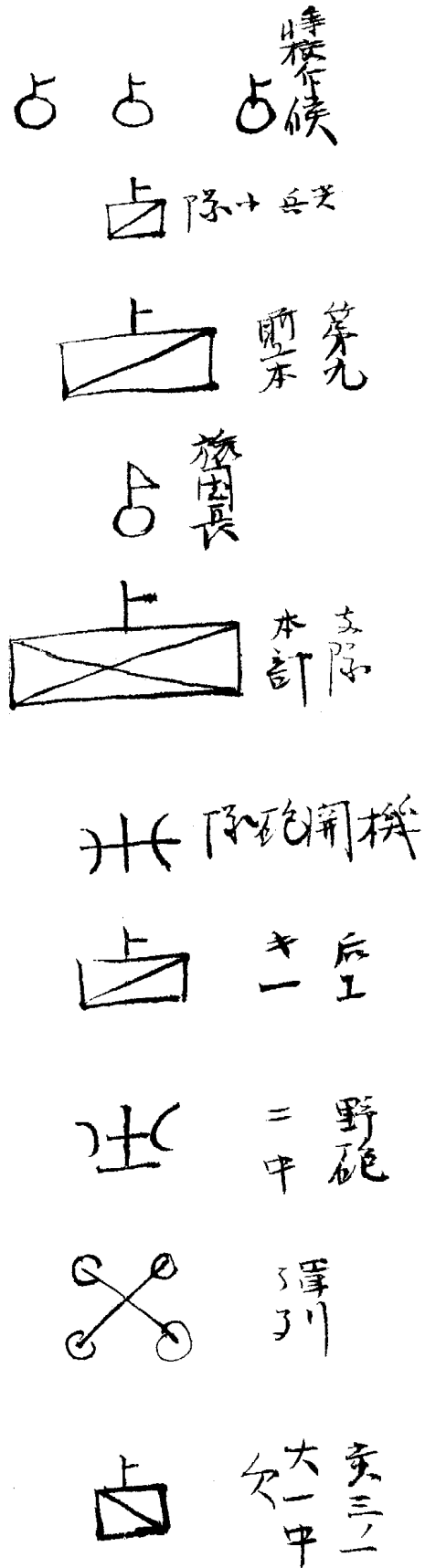
同廿四日 晴レ 午后軍旗衛兵ヲナス、此夜出發命令アリ、第一聯隊第一・第二中隊ハ騎兵第二旅團長ノ指揮ニ属セラル、第三中隊ハ第一師団伝騎トシテ分遣セラル

同廿五日 陰晴不定 午后一時出發、聯隊本部及ヒ第一中隊ハ田家頭子ニ、第二中隊第一・二小隊並ニ大行李ハ孫家凹子ニ宿営、警急舎營外工兵第九分隊

同廿六日 晴レ后チ曇リ 日没頃ヨリ雪寒威殊ニ甚ダシ、同地ニ在リテ滞在右翼方面ハ徐々行動ヲ起セルヤニ聞ク

同廿七日 晴レ 午前六時出發、旅団集合地ニ会ス、降雪已ニ休ミタリト雖モ凜烈タル朔風肌ヲ切ルカ如ク、鬚鬚、馬尾ノ凝氷憂々声アリ、第九聯隊ヲ前衛トシ、騎兵第一・四・十五・十六聯隊肅々トシテ行動、馬蹄雪ヲ蹴テ遼河ヲ涉リ右岸ニ出テ孤家子ニテ午食、当時左岸地区ニ於テハ第三軍、即チ第一・七・九、三個師団ノ貔貅雪ヲ踏ミ氷ヲ渡リテ運動ヲ起シ、最左翼第一師団ハ阿司牛・カ力馬ノ線ヲ駆逐スル目的ヲ以テ猛進シ、第七・第九ハ烏邦牛・馬圈子・茨榆坨ノ線ヲ攻撃スルヨシ、吾ガ騎兵集團ハ田村少將指揮ノ下トニアリ、少数ノ監視兵ヲ駆逐シテ前衛ハ東長崗子迄進出シ、支隊本隊ハ達連房ニ村落露營ス、此日川辺少尉ハ十二名ヲ率エテ大民屯方面ノ搜索ニ任セラル、師団ハ目的地ヲ占領セルヨシ

旅団隊形左ノ如シ



同廿七日ニ於ケル支隊命令

同廿八日 支隊命令

- 一、搜索隊本隊ハ午前八時小黃旗堡東北側畑地ニ集合スベシ、続テ運動ヲ起ス筈
 - 二、第一聯隊（第二中隊欠）及ヒ歩兵第三聯隊、大隊砲兵中隊、支隊本部ノ順序ニテ老達房ニ向カヘ前進ス
 - 三、第二中隊ハ午前七時出発、茨林子ヲ經テ大民屯方向ノ敵ヲ搜索スベシ
 - 四、支隊本部タル諸隊ハ明午前八時大達連房南方畑地ニ集合スベシ
- 騎兵第一聯隊命令

一、本日斥候ノ報告ニヨレバ、老達泡附近ニハ少数ノ監視兵ヲ見ル而已

第四縦隊ハ微弱ナル敵ノ騎兵ヲ撃退シテ老窩棚ヨリカ力馬ニ至ルノ線ヲ占領セリ

明日ハ藁子崗ニ向カヘ前進スル筈 支隊ハ明日老廟子南方地区ニ進出シ、大民屯及ビ新民屯方面ヲ搜索セントス 各搜索隊ハ明日

左ノ如ク運動ヲ起ス筈

(イ) 第一搜索中隊ハ午前七時出發、茨林子方向ヨリ大民屯ヲ搜索スベシ

(ロ) 第二搜索隊中隊ハ午前七時出發、新民庁方向ヲ搜索スベシ

(ハ) 前衛ハ午前八時小黃旗堡東北端ヲ出發シ、老達房ヲ經テ揚拉溝北方無名部落ニ向カヘ前進ス

第二中隊ハ第一搜索中隊トナリ、第三小隊ハ前田特務曹長指揮ノ下ニ尖兵トナリテ前進急速ナル歩度ヲ以テ大崗子・鴨子街ヲ經テ將ニ滿戸都ニ至ラントス、忽チ見ル部落北端ニ当リ三四發曳火彈ヲシキガ爆發スルト同時ニ村落内ニモ小銃声ノ盛ニ起ルヲ聞ク、依テ尖兵ハ前衛ニ急報ナシ一時停止シテ狀況ヲ視察スルニ、尚ホ爆声ハ盛ナリト雖モ土民沈着ノ体ナルヲ以テ部落ニ突入シテ搜索スルニ、此ハ清人ノ花火ヲ打チ揚ケシニテ相顧ミテ思ワズ一笑、夫レヨリ尚ホ遼河ニ沿テ前進シ、対頭灣対岸無名部落ニ達セシトキ、対頭灣ヨリ秦子崗附近ノ地ニハ敵騎ノ徘徊スルヲ見ル也、什牛堡附近ニ当リテハ盛ナル砲声ヲ聞ク、搜索中隊ハ羅家窩棚迄進出一時停止シテ左岸ノ狀況ヲ視察セリ、當時敵ノ騎幕ハ秦子崗・綱戸屯及ヒ黃三家子附近ニ至リ警戒セルモノ、如シ、搜索中隊長ハ高山中尉及ヒ前田特務曹長ヲシテ、各自任意ノ方面ヨリ大民屯ヲ搜索ヲ命ズ、大民屯遼河ノ左岸三十清里ノ地ニ在リ、前田斥候長ハ北方ヨリ大迂回進入ニ決シ精騎八名ヲ撰ブ、余モ其ノ撰ニ入レリ、高山中尉モ亦タ同シク八騎ヲ率ヘテ出發セリ、時已ニ午后四時ニ垂ントシ、馬匹モ亦タ已ニ七里余ノ行程ヲ經来リテ疲労セリ、高山斥候ハ茨林子附近ニテ敵騎ノ為メニ擊退セラ^レ、再ヒ右岸ニ退却セシ間ニ、吾ガ斥候ハ直線ニ北方ニ向カヘ、遼河ニ沿テ前進シ龍廟子附近ニ達シ、土人ニ就テ敵情ヲ問フニ、黃三家子ニハ歩騎連合ノ監視部隊アリ、一半台及ヒ其ノ北方馬廠附近ニハ軍橋ヲ架シアルモノ、如シ、依テ斥候ハ黃三家子南方ヨリ遼河ヲ涉リテ右岸ニ進出シ、首尾能ク警戒線内ヲ潜リ東ニ向テ前進、某部落ニ達セシトキ土人ヲ捕ヘテ敵情ヲ聞カントスルニ、此ノ附近ノ土人ハ日本兵ヲ見ル事ナキ故何ヲ聞テモ呆然トシテ居リ、字ヲ知ル者ヲ呼ヒテ筆談セントスルニ、尚ホ露兵ヲ恐レテ吾レ等ニ同情ヲ表セズ、道ヲ聞キテモ録々教ヘズ、永ク一地ニ停止スレバ敵ニ通報セントスル景勢アリ、正シク附近ノ部落ニハ露兵ノ出沒セルヲ推知セラル、斥候ハ注意ニ注意シ潜行セントスルニ、物珍ラシゲナル土人ハ老若男女ノ區別ナク、斥候ガ次ノ部落ヲ偵察セントシテ馬ヲ止ムレバ忽チ周圍ヲ取り巻分時ニシテ四辺人ノ山ナス、実ニ斥候ノ苦心名状スベカラズ、依テ一策ヲ案シ防寒用ノ外套ニ頭

布ヲ以テ面部ヲ掩ヘ露兵ヲ仮装シテ、急進シテ大民屯西方五清里（日本里一里弱）ノ風家房身ニ達セシトキ、東南方約半里ノ大ナル城ヨリ小民屯方向ニ向テ敵騎一小隊進入スルヲ見ル、尚ホ部落内ヨリハ清兵十五六名、我レ等ヲ露兵ト見誤リテ馳セ来リヌ、見レバ各自露国ノ記章ヲ付シアリ、彼等ハ夫レナラヌニ驚キタル様子ニテ、中ニハ手早く記号ヲ剝ガシテ隠セル者モアリ、去レバ斥候ハ油断ナク短銃ヲ出シ軍刀ヲ抜キ示シ、尚ホ伴リテ一万余人ノ日本兵跡ヨリ来ルヨシヲ告ケタルニ、彼レ等ハ五里夢中ニアル如ク寐耳ニ冷水トモ言ワンカ呆然タル而已、斥候ハ心利キタル者一人ヲ捕ヘテ、武器ヲ示メシ威赫^嚇シテ大民屯露兵ノ有無ヲ尋問セシニ、大民屯ニハ敵騎常ニ来往シツ、アリ、現時有無ヲ知ラズト、如何ニ詰問スルモ同様ナレバ稍信ズベキコトトナシ、苦心ノ末意ヲ進入搜索ニ決セシガ、尚ホ注意シテ状況ヲ視察セントスルニ、晚霞ハ模糊トシテ東方ヨリ来リ詳細^詳ニ視察スル能ハズ、依テ村端四五百米突迄進ミ一時停止シテ、防禦工事等ヲ看察スルニ別ニ見受ケラレズ、去レトモ敵ヲ釣り見ントテ急激退却ノ真似ヲナスモ異状ナシ、遂ニ大民屯西南端ニ達セリ、大民屯ハ新民庁二次キテ大部落ナレバ狼リニ市街ニ入ルヲ得ズ、土人ヲ捕ヘテ有無ヲ聞クニ、彼レ等ハ日本兵天ヨリ湧リ地ヨリ降りシカト思フ様ナル面地シテ更ニ言ヲ発セズ、漸筆談シテ聞ケバ東街ニハ敵騎駐在シアルヨシ、斥候ハ土人ヲ携ヘテ村落ヲ去ル五六百米突墓地ノ影ニ至リ種々情况ヲ聞クニ、大民屯ニハ少数ノ敵兵常ニ駐在シ、又毎日多数車輛ヲ引キテ四方台方面ヨリ糧食ノ徵発ニ来ルヨシ、村落周圍ニハ別ニ防禦工事ナシ、西・北一平台大荒地、黄三家子、東・南荒山子、干家台、冷子堡ニハ步騎約五六百駐屯セルヨシ、現在当地ニハ二十余名宿營シアリト、依テ斥候ハ目的ヲ達セルニヨリ初メテ馬ノ頭ヲ西ニ向タトキハ稍心強クモ感セラシガ、如何セン日ハ西天ニ没シ暮雲次第々々ニ四辺ヲ包ミテ何トナク心細ククナ^{ママ}リ、殊ニ如此敵中ニ在リテハ同一ノ帰路ヲ取ルハ危儉ノ極ナルニヨリ、不案内ノ地ヲモ願ミズ村落ヲ避ケ道モナキ畑中ヲ只北斗ノ光リト金星ヲ目当トナシ暗路ヲ西ニ向テ進ミ、迷テ遼河河原ニ達セシトキハ嬉レシクモ思ワレシガ四面皆凹凸ナル沙原而已、夜ハ深々トシテ更ケ渡リ凜烈タル朔風ハ一層身ニ染ムテ覺ヘ、馬ハ疲レテ屢蹙レントシ人ハ飢テ声ヲ出スモノナク、漸ク遙カニ村犬ノ吠ユルヲ聞キ奮進シテ土人ノ家ヲ叩テ部落ノ名ヲ問ヘバ、「ホイチャガンザ」トテ中隊ガ宿營予定地タル揚拉溝北方二里ノ地点ニアル部落ナラントハ、初メテホツト息シ暗中ヲ探リテ漸ク中隊ノ宿營地ニ達スルニ、中隊ハ高山中尉ノ報告ニヨリ情況不安ナリトテ尚ホ二里余ノ后方羅家窩棚迄退却宿營セシヨシニテ、又モヤ疲馬ニ鞭チ午前二時頃漸ク中隊ノ宿營地ニ達シ、步哨ニ唯何セラレ

シトキハ全ク蘇生ノ思ヲナシ、小隊二回りテ戦友寝面ヲ見シトキハ又固ノ雄心ニカヘレリ、他ノ戦友ハ警急露営ニテ民舎ノ檐等ニヨリテ馬ノ韁ヲ握リシマ、疲レタルマ、ニ満身霜ヲ帯ヒテ眠リ居ル中ニモ、他ノ斥候ニ挺ンデ深ク敵中ニ侵入シ、敵ノ糧食ノ徵発場タル大民屯ノ地ニ初メテ日本ノ蹄跡ヲ印セシヲ思バ愉快極マリナク、徹宵夢ヲ結バズ曉鶏ヲ聞キヌ、余等ノ報告ハ更ニ中隊ヨリ伝騎ヲ出シ旅団ニ通報ナシタリ、前日来出サレタル川邊斥候モ途中敵兵ニ妨ケラレ、高山中尉モ同様目的ヲ達セサリシ由、此日左翼軍ノ右縦隊ハ四方台ノ西方長家窩棚ニ、中央隊ハ牛心地附近ニ、左縦隊ハ藁子崗ニ到着セリ、各隊共稍有力ナル輕砲ヲ有スル敵騎ニ遭遇シ之レヲ駆逐シタリ、軍司令部ハ阿司牛ニ到着セルヨシ、尚ホ明日ヲ期シ四方台ヲ三面ヨリ挾撃スル筈

同二月一日 晴レ 支隊ハ大民屯ヲ占領ノ目的ヲ以テ行動シ、別ニ騎兵十六聯隊ヲシテ新民庁ヲ占領セシム、中隊ハ依然搜索中隊トナリテ午前八時出發、茨林子附近ニテ敵監視兵ヲ駆逐シ前進ス、吾カ第三小隊ハ川邊少尉ニ從テ尖兵トナリ、龐王廟・小民屯ヲ經テ午前十一時頃大民屯ニ達ス、露三十騎余リ村端ニヨリ少抵抗ヲ試ミ北方ニ向テ逸走セントセス、尖兵ハ折カラ来リ合セル中隊一部ト協力シテ抜刀襲撃ヲナシ二名ヲ殺シ三名ヲ捕獲セシニ、乘馬兵ハ皆北方部落ニ向テ逃走シ、馬ヲ失ナヘタルモノ及ビ二台ノ馬車ヲ監視セル敵ノ歩兵ハ逃走スル能ハズ、土人ノ家ニヨリテ頑強ニ抵抗シ屈セズ頻リニ旗ヲ振り帽ヲ上ケテ北方部落ニアル敵兵ニ応援ヲ求ム、吾カ隊ハ直ニ徒歩シ火ヲ放チテ之レヲ攻撃シ遂ニ之レヲ生擒セリ、中ニ新来ノ歩兵曹長アリテ此ノ附近ノ測図ニ来リシ由ニテ二輛ノ馬車ハ測図機械ナリ、此ノ日ノ戦鬪少数ノ窮鼠ノ為メニ吾レノ死三・傷者四ヲ出シ、又前ニ生擒セシ露兵ヲ押送セシ二名ノ騎兵ハ露兵ト共ニ行衛不明トナレリ、土人ノ為メニ殺害セラレシナラント、以テ此ノ附近ノ尚ホ敵兵ニ欲ヲ通スルヲ知ルニ足ル、吾ガ分隊ニテモ茨城県人大和田集之助戦死セリ、同氏ハ資性温順能ク軍務ニ従事シ、前日ニハ余ト共ニ当地ヲ斥候シ功績ヲ顕ワシ今又共ニ敵ヲ撃チテ狙撃セラレタリ、死体ヲ檢スルニ襦袢・袴下ハ勿論靴下・手袋等ニ至ル迄渾テ新品ヲ着得タリ、以テ決心ノ程ヲ察スルニ足ル、他ノ戦死者ト共ニ火葬ニ付シ大民屯西方畑地ニ埋ム、同夜土人ノ露探六名ヲ捕ヘテ斬ニ所ス、支隊全部村落露営ヲナス、新民庁ニ向カイタル部隊少抵抗ヲ受ケシ而已ニテ同地ヲ占領シ、將校以下廿余名ヲ捕虜トセリ、分捕品ハ糧食・器械等アリタル由、四方台附近ニテハ正午頃右翼ハ四方台ニ向カヘ、中央ハ蒲河附近ニ、左翼ハ北偏堡子ニ達セシニ、四方台ノ敵ハ尚ホ頑強ニシテ退却セズ、右翼ノ攻撃ヲ容易ナラシムル為メ砲兵團ヲ蘇家安ニ出シ砲火ヲ注ガシム、右翼ハ援助ヲ得テ攻撃ヲ開

始セシモ夜ニ入ル迄對抗セリ、中央隊ハ小新屯、左翼隊ハ大橋附近ニ前進シタリ、東方一帯ノ地区ハ砲声殷々トシテ絶ヘズ、夜ニ入レバ火光天ヲ焼ク許リナリ、小新屯ノ敵ノ糧食倉庫ハ自ラ放火セル由

同日 晴レ 聯隊ハ旅団ノ指揮下ヲ放レ師団ノ左翼警戒ニ任セラレ、三家子ヲ通りテ同莊子ニ達セシトキ前衛第一中隊ヨリ伝騎来リ、敵騎ニケ中隊ト遭遇シ對抗中ナリト、依テ徒歩戦ヲナシ第一中隊ヲシテ敵ヲ誘致セシム、敵ハ散開隊形ヲ取り進ミ来リシモ一千五六百米突ニ至リ停止シテ動カズ、休ムヲ得ズ一斉射撃ヲナシタルニ敵ハ直ニ退却セリ、依テ前進ヲ起シ万家台・爽河沿・含路ヲ経テ午后四時頃曹家台ニ到着セリ、騎兵旅団ハ吾ガ左翼ニアリテ運動スル筈

第一師団ハ沙嶺堡ニテ敵兵ヲ駆逐シ拉木河ニ達セリ、敵ノ砲兵ハ藍山台附近ニ在リ盛ニ砲火ヲ送レリ、吾ガ砲兵モ亦タ拉木河東南端ニアリテ応戦夜ニ入レリ、四方台ニ向カヘシ右翼隊ハ夜襲ヲ以テ前夜ノ中ニ四方台ヲ占領シ尚ホ白水塞ニ向テ行進中、北三台子・瓢坨子附近ニ於テ敵ト衝突ナシ瓢坨子附近ニ宿陣シ、中央隊ハ達子堡附近ニ達シタリ、最左翼ニハ秋山騎兵団来リ加ハリタルヨシ、此ノ日敵ハ拉木河・達子堡ノ線ヲ回復スルノ目的ヲ以テ逆襲シ来リシモ撃退セラレ多大ノ損害ヲ与ヘタリ、聯隊ハ曹家台ニアリテ警戒徹宵セリ

同三日 晴レ 聯隊ハ前任務ノ元ニ茫家台迄進出シ数斥候ヲ放テ搜索ス、左翼秋山支隊ハ小辺・小房身附近ニ在リ、優勢ナル歩騎兵ヨリ成ル敵ハ北太房身附近ニ頭ハレ秋山支隊ヲ圧迫シ、吾ガ背后ニ行運セントスルモノ、如ク盛ニ砲火ヲ送り、吾ガ分捕砲及ヒ一中隊ノ砲兵応戦セシガ中々頑強ニシテ一時危殆ニ逼マリシモ、秋山少将ノ剛氣ナル終日激戦ヲ続ケタリ、此日連絡ノ為メ秋山支隊ニ至ル、支隊ハ小房身附近ニ位置シ第十六聯隊ヲシテ徒歩戦ヲナサシメ、状況不穩ニシテ本部ノ附近ニハ弾丸雨下シ傷者及ヒ斃馬ヲ続出スル中ニ在リテ、^泰奏然トシテ秋山アラバ心配スナト伝ヘトテ戦況ニハ及バサリシ、午后ニ至リ歩兵ノ援助ヲ得テ盛ニ射撃セリ、分捕砲ノ如キハ弾丸ヲ射尽セリ、敵モ亦タ中々勇敢ニシテ五六百米突迄近接セシモ遂ニ突貫スルニ至ラズ、夕刻ニ至リ漸次退却ヲ始メシカバ吾レハ機関砲ヲ利用シテ追撃掃射シテ多大ノ損害ヲ与ヘタリ、此日左翼師団ニアリテハ巖家荒・藍山台ニ向テ攻撃セントセシ所、敵ハ増援兵ヲ得テ逆襲シ来リシモ悉ク撃退シタリ、吾砲兵ハ也什牛条ニ位置シ近距離ニアリテ多大ノ損害ヲ与ヘタリ、中央ニアリテハ敵砲四十余門、藍山台・高明台ノ線ニ砲列ヲ敷キ盛ニ砲火ヲ送レル為メ砲兵団ト共ニ之レト応戦セリ、右翼ニ

アリテハ璋駅店附近ニテ逆襲セラレ一時退却セシモ再ヒ奪取シタル后チ、隣接軍ニ譲リテ林家台ニ至リ中央隊ト連絡セリ、軍司令部ハ胡台ニアリ、聯隊ハ同地ニアリテ警戒露營セリ

同四日 晴レ 午前七時出発、川邊少尉ニ從テ斥候トナリ道義屯ヲ經テ三家子方面ノ敵情搜索ヲ命セラル、藍家屯ヲ經テ奉天・新民庁街道ニ出テ馬三家子東方部落ニ達セシトキ、敵騎約一小隊ト衝突シ射撃ヲ交換セシモ、敵ハ直ニ退却シテ大石橋方向ニ退却セリ、時ニ騎兵旅団ヨリ出サレタル將校斥候ハ奉天街道ヲ大石橋ニ向カヘシニ、敵ノ為メニ射撃セラレ其ノ三騎ヲ失ヘタリ、吾ガ斥候ハ尚ホ前進、秋家屯附近ニ到リ敵騎七八名ヲ追撃シ、平羅堡東南無名部落ニ達セシトキ、平羅堡ヨリ奉天ニ通スル軍用道路上ヲ歩兵約二ヶ大隊南下スルヲ見、同地ニテ報告ヲ出シ、午食スル中ニ吾ガ騎兵集団及ヒ聯隊ハ馬三家子ヲ經テ前心台ニ至リ、先頭部隊ハ少数ノ敵兵ヲ平羅堡ニ圧迫セン為メ、敵騎ハ北方丘陵ノ下ヲ過キテ退却セシヲ襲撃シテ九名ヲ殲シタリ、斥候ハ尚ホ大椿屯ニ進出ス、大椿屯ハ軍用街道上ニテ五台子・道義屯等ニ相對ス、其間地物ノ依ルベキナク、道義屯ヨリ続々敵ノ輜重車ヲキシガ東南ニ向テ移動シツ、アリ、五台子ニハ敵兵アルモノ如シ、斥候ハ道義屯附近ニ接近シテ敵情ヲ偵察セントシ畑地ヲ前進シ、村端千米突ノ地点ニ達セシトキ一斉射撃ヲ受ケシモ、后方ヨリ何ノ氣モナク付キ来リシ土人一名ヲ殲セシ而已、之レト同時ニ五台子ヨリモ十四五騎出テ来リテ包圍セントス、依テ斥候ハ退却シテ大椿屯東端ノ林縁ニヨリテ監視ヲ続行セシニ、吾台子ノ敵一騎吾ガ前面ニ来リテ頻リニ誘致セントスルモノ如ク、同時ニ街道上ヲ迂回シ小勢ト侮リ包圍シテ捕虜トナサントスルモノ如シ、依テ斥候ハ大椿屯北端ニ移リ、小河流ノ岸ニ沿テ再ヒ道義屯ニ近ツカントス、道義屯ノ敵ハ二名ヲ出シテ斥候ヲ誘致シテ包圍セントス、斥候ハ三名ヲ徒步セシメ射撃シテ夫ノ一馬ヲ殲セシニ、彼レ等ハ歩兵援護射撃ノ下トニ退却セリ、斥候ハ河岸ノ凹地斜面ヲ伝ヘ道義屯ニ至ラントス、道義屯北方高地ノ蔭ニアリシ敵ノ監視兵ノタメニ射撃セラ斃馬一ヲ出シ、敵ハ高地ヨリ射撃スル為メ隠蔽スル能ハズ、負傷一名ヲ出シ、斥候長ト共ニ彈丸注射ノ元ニアリナガラモ見捨ツルニ忍ヒズ扶ケテ馬ニ乗セ退却セリ、道義屯附近ニハ大部隊ノ敵兵アルモノ如ク、其北方ニモ騎兵活動シツ、アリ、日没頃迄監視ヲナシ、平羅堡ヲ經テ赫三家子ニ村落露營セリ、左翼隊ハ正午頃大石橋附近ニ達シ、一部ヲ以テ高力屯ニ向カヘ小抵抗ヲ受ケシ而已ニテ占領セリ、中央縦隊ハ盆台・李官堡ノ中間ニテ西方一千五百米突ヲ隔タル小部落ニ達セシトキ敵ト衝突シ、敵ハ漸次増援兵ヲ得テ陣地ヲ固守シ、我ガ砲兵盛ニ砲火ヲ集中セシモ遂ニ抜ク能ハ

ズ、右翼隊モ亦夕揚士屯附近ニテ優勢ナル敵ト遭遇シ對抗夜ニ入レリ、此夜決死隊ヲ撰ヒテ鉄道ノ破壊ヲ謀リシモ果サズ、軍司令
部ハ后民屯ニ在リ、当時吾ガ第三軍ハ迂回包圍ノ目的ヲ達スルニ垂ントシ、騎兵集團ノ所在地ヨリ鉄道線路ハ僅距離ニ逼マリシ為
メ、敵ハ命脈ト頼ム東清鉄道ヲ掩護スル為メ此ノ方面ニ増援シ、迂回兵團ハ之レヨリ常ニ優勢ナル敵ニ遭遇スルコト多シ

同五日 晴レ 宿营地ニ在リテ左翼警戒ニ任シ、騎兵集團ハ平羅堡ニアリテ北東ニ向テ警戒セリ、此日モ進藤特務曹長及ヒ野沢中尉
ハ鉄道破壊ノ目的ヲ以テ出発シ、野沢中尉ノ如キハ已ニ鉄道線路ニ達シタリシヲ敵騎ノ来ルニ逢ヘ退却スルノ休ムヲ得サルニ至リ
タリト、旅団ヨリモ同様派遣セシニ皆目的ヲ達スル能ハズ、此ノ日ハ三縦隊共大ナル活動ナク、蓋シ李官堡・大寒屯・小寒屯ニ至
ル線上ニハ堅固ナル防禦工事ノ設ケアルヲ知り、正面攻撃ノ不利ナルト、隣接友軍ノ攻撃進捗ニ連レテ尚ホ左翼ニ延長スルノ有利
ナルヲ覚リ、中央ト左翼ノ中間ニ右翼ヲ挿入シテ逐次左翼ニ延長ノ行動ヲ起セリ、李官堡附近ニハ敵砲兵盛ニ吾レヲ砲撃セリ、軍
司令部ハ后民屯ニアリ

同六日 晴レ 川邊^{「ママ」}少隊長ニ從テ下崗子附近ノ敵情偵察ヲ命セラレ、兼ネテ機ニ監ミテ鉄道ヲ破壊スルノ任務ヲ有ス、二台子・三台
子・馬家店ヲ經テ李家堡子ニ至ル時ニ、東李家堡子ト心台子ヨリ敵騎約一中隊包圍來襲シ、斥侯ハ休ムヲ得ズ西方青堆子ニ向テ逸
出セントセシニ、茨榆坨附近ヨリ南進シ來レル敵ト遭遇シ、再ヒ刑家子ニ向テ退却セントシ、畑地ノ凹地泥濘ニ出会シ、后尾ノ一
兵ハ遂ニ捕虜ノ不幸ヲ見ルニ至リシモ他ハ皆逸出セリ、李家堡子附近ノ騎砲兵モ亦夕斥侯ノ退却ヲ追撃射撃ヲナシテ榴散弾ヲ盛ニ
送レリ、午后斥侯ハ刘家窩棚ヨリ旅団斥侯ト合同シテ再ヒ青堆子迄進出セシモ、前面ニ徘徊スル敵騎優勢ニシテ進ムヲ得ズ、午后
四時頃ニ至リ砲兵ヲ有スル敵騎二台子前面ニ頭ワレ、吾ガ聯隊及ヒ騎兵集團ハ之レト対戦シ交戦少時北方ニ撃退セリ、聯隊ハ二台
子北方無名部落ニ前哨ヲ張リテ露營ス、左翼隊ハ大部ヲ以テ平羅堡附近ニ至リ戦鬪準備ヲナセリ、只高力屯附近ニ右翼軍挿入セラ
ル、迄残シ置ケル部隊ハ挿入軍ノ遅延セシタメ、有力ナル敵ノ逆襲ヲ受ケ非常ニ苦戦ニ陥リシモ、右翼隊ノ到着ニヨリテ撃退スル
ヲ得タリ、大石橋附近ニモ逆襲アリテ一時苦戦セシモ遂ニ撃退セリ、軍司令部ハ三家子ニ進出セリ

同七日 晴レ 聯隊ハ左翼警戒ノ任務ヲ以テ第一中隊ヲ前衛トナシ、李七堡子ニ於テ敵ト遭遇、徒歩戦鬪ヲナシ撃退シ、五兵林子ニ
進出セシモ砲丸雨注、斃馬五・傷二ヲ出ス、殊ニ前面敵兵屢々攻勢ニ転セントシ、状況不利ナルヲ以テ迂回シテ好心台ニ出ツ、午

后騎兵第四聯隊来リテ聯隊ト行動ヲ共ニス、同地ニ在リテ警戒ニ任ス、此夜再ヒ決死隊ヲ募リテ兩組トナシ遂ニ目的ヲ達シテ破壊セリ、此日軍ハ包圍形隊全ク成リタルヲ以テ右翼ハ北陵ニ、中央柳条屯ニ、左翼ハ張家子(一名電義屯)ニ向カヘ行動セントス、左翼隊ハ平羅堡ヲ出発シ左側高地ニアル敵ヲ撃退シ、主力ハ敵ヲ驅逐シテ三家子ヲ占領セリ、続テ前進ヲナシ道義屯ヲ占領シ郭三屯附近ノ敵ヲ砲撃シ、五台子・四台子ノ線ニ進出セリ、中央隊ハ造花屯附近ノ敵ヲ攻撃シ非常ニ激戦ノ后チ之レヲ占領セリ、左翼隊モ亦タ之レニ援助ヲ与ヘテ大ニ成攻セリ、右翼隊ハ小寒屯附近ノ敵ヲ攻撃セシモ目的ヲ達セズ、此日滿州軍ヨリ情報アリ、敵ハ吾ガ迂回兵団ヲ阻止スル為メ続々増援兵ヲ出セル由ニテ滿州軍總予備隊ノ一部ヲ迂回兵団ニ加ハヘラル、当時迂回兵団ハ南ニ向テ奉天ヲ攻撃シツ、アリ

同八日 晴レ 午前六時出発、師団ノ左側警戒ノ任務ヲ帯ヒテ郭七屯ニ進出シ、全部徒歩戦闘ヲナシ、第四聯隊ノ全部及ヒ第二中隊ヲ以テ南及ヒ東ニ備ナヘ、第一中隊ヲ以テ北部ヲ警戒セシム、午后二時頃ニ至リ敵ノ歩兵約一聯隊来襲ス、交戦少時之レヲ撃退セリ、此夜同部落ニ在リ戦鬪形ノ儘露營ス、夜半ヨリ歩兵一大隊来リテ守備ニ任ス、此日各縦隊ハ石仏寺街道ヲ中心トナシ左ハ柳条屯、右ハ金窩子ヲ目標トシテ行動ヲ起シ、殊ニ滿州軍ヨリ第一・第二軍前面ノ敵ハ漸次退却ストノ通報ニヨリ、機ヲ過タズ猛烈ニ攻撃ヲ続行スベシト命セラレタリ、右翼小寒屯ヲ攻撃シテ目的ヲ達セズ、中央隊ハ苦心ノ末八家子ヲ占領セリ、左翼隊ハ分レテ二隊トナリ三台子及ヒ楊城屯ヲ攻撃ス、敵兵頑強ニシテ昼間占領スルヲ得ズ、兩隊共夜襲ニ決ス、此夜騎兵集團ハ好心台ニ舎營シ前面ノ敵騎ト對抗セシガ、夜半逆襲セラレ第三聯隊ノ一部ハ非常苦戦ヲナシ一時敵ニ乱入セラレタリシト、吾ガ損害モ多カリシヨシ、三台子及ヒ楊城屯ニ向テ夜襲セル部隊ハ一部ヲ占領セシ而已ニテ全ク目的ヲ達スル能ハズ

同九日 夜来ヨリ西南風起リ漸次風勢ヲ加ワヘ乾燥セル土塵ヲ吹キ飛ハシテ展望スル能ハズ、払曉ト共ニ歩兵ハ別任務ヲ以テ行動ヲ起スニ先チ機関砲ヲ乱射シ敵ヲ威赫シ潜カニ持チ去リ、騎兵而已ニテ前面ノ敵ト對抗ス、正午頃ニ至リ敵ノ歩兵砲兵援護ノ下ニ散開前進シ来リ千五六百米突ニ至リ尚ホ前進ノ景勢アリ、砲丸又四辺ニ落下シ民舎ヲ焼キ馬匹ヲ斃ス、午后一時半頃ニ至リ前面ノ歩兵突貫シ来リ土塵飛揚セル為メ射撃ノ目標ヲ確定スル能ハズ、敵ハ五百米突ノ地点迄前ノ地物ニ依リテ猛烈ニ小銃ヲ乱発シ、吾レハ土壁ヲ擁スルト雖モ死傷相繼キ、苦戦ノ最中第十五聯隊ノ一部迷テ来リシ為メ応援シ、野砲隊モ亦タ続テ来リ射撃ヲナシ遂ニ撃

退セリ、敵ハ多大ノ損害ヲ受ケタルモノ、如シ、此日軍ハ隣接軍ノ進捗ニ連レテ戦線ノ短縮セシメ、中央隊ヲ抜テ最左翼ニ進メ、右翼ヲシテ中央ノ位置ヲ受ケテ攻撃セシム、左翼隊ハ依然前面ノ敵ヲ攻撃セシム、騎兵聯隊ハ郭七屯ヲ左翼隊ニ譲リ其北方小新屯ヲ占領シテ前方ニ対シテ警戒ス、此ノ時ヨリ左翼隊第九師団ノ指揮下ニ属ス、郭七屯及ヒ郭三屯ニハ屢逆襲ヲ企テシモ常ニ之レヲ撃退セリ、元ノ左翼隊タル東海男兒ノ集団ハ一面馬場少將ニ從ヘ統テ三台子ヲ攻撃セシモ、敵ハ退却セサル而已カハ増援兵ヲ得テ逆襲セントシ終日終夜銃声絶ヘズ、同シク一面ニハ中村少將ノ率ユル所トナリテ楊城屯ヲ占領セシモ、其敵モ亦タ頑強ニ抵抗シタリ、当時吾ガ前線ハ鉄道線路ヲ去ル僅カニ千余米突ニ過キズ、師団長飯田中將ハ予備隊タル后備聯隊ヲ以テ、中村隊ノ左側ニ出テシメン鉄道線路ヲ遮断セントス、敵モ亦タ死力ヲ尽シ益々増援兵ヲ得テ茲ヲ専途ト防戦シ、殊ニ第一・第二軍ノ攻撃面ニ対シテハ非常ニ有利ナル風勢ナル程ニ、迂回兵団ハ南面攻撃ナルニヨリ夫ノ反対ニ非常ニ不利ニシテ、敵ハ又之レヲ利用シ屢々攻勢ニ転セントスルトキ、優勢ナル敵ノ増援兵ハ鉄道線路附近ニ到着シ直ニ突進シ、吾カ元ノ中央縦隊カ左翼ニ延長セサルニ乗シ割合ニ突出セル后備隊ノ左側ニ向カ^{〔七脱カ〕}猛烈ニ逆襲シ来リ、多大ノ損害ヲ受ケテ后備隊ハ后退スルノ休ムヲ得サルニ至リシ為メ、其右翼ニ連ナル中村隊ハ風塵ノ為メ同シク不意ノ襲撃ニ此レ又非常ノ損害ヲ受ケ、張家子ニ退却スルノ止ムベカラサルニ至リ、夫ノ或ル大隊ノ如キハ殆ト全滅セリ、吾レノ后退ニ乗シ敵ハ益勢ヲ得テ張家子ニ襲来セシモ、直ニ撃退シテ再ヒ旧陣地ヲ占領セシニ、日没頃ニ至リ又優勢ナル部隊ノ来襲ニ逢ヘ再ビ非常ナル苦戦ノ后遂ニ之レヲ撃退セリ、此日最后ノ逆襲ノトキニハ軍司令部ヲ張家子ニ進メシ為メ軍司令部附近ニモ彈丸雨下セリ、此日騎兵聯隊カ最左翼隊ニ郭七屯ノ線ヲ讓ルト同時ニ、優勢ナル部隊ハ郭三屯増援シタルヲ砲兵援護ノ下ニ突貫シ日没頃之レヲ占領セシモ、夜ニ入りテ再ヒ逆襲セラレ旧陣地ニ后退セリ、此ノ日ハ各隊非常ノ苦戦ヲナスト雖モ遂ニ鉄道線路ヲ奪取スルニ至ラズ、夜ニ入りテモ各方面ニ夜襲アリ銃声絶ヘズ、民舎又兵燹ニカ、リテ火光天ヲ焼ク許リナリ

同日 聯隊ハ小新屯東南端ニアリテ前面地隙内ニヨレル敵ニ対シ警戒セリ、前日来最左翼第九師団ノ前面ニハ有勢ナル砲兵ヲ加ハヘタル約ニケ師団ノ敵頭ハ来リ、吾カ線路ヲ圧迫セントスルヲ阻止シ屢逆襲ヲ企テ、殊ニ郭七屯・郭三屯ニ向テ猛烈ナル砲火ヲ集中シ全村兵火ニ罹リ、吾レノ損害又相續グ、去レトモ午前十時頃奉天陥落ノ報ニ接シ万声ノ声叫喚ト相和シ勇敢ニ奮戦セリ、小新屯モ亦タ漸次砲火ノ元ニ葬ラレ吾ガ山砲隊ノ如キハ沈黙ノ休ムナキ至リ、正午頃優勢ナル部隊来襲シ騎兵聯隊而已ニテ苦戦ニ落

チ入り止ムナク急ヲ大島兵団ニ告グルノ伝騎ヲ命セラル、小新屯ヨリ郭七屯ニ至ル間一望浩然タル畑中ナレバ敵ニ暴露シテ行進セザルヲ得ズ、殊ニ砲兵ノ瞰射下ニ彼レガ得意ノ一斉射撃ハ八発又十発常ニ四辺ニ爆発シ、弾子ハ飛ヒテ土塵ヲ挙ケ屢々爆烟ト土塵ヲ掩ヘシモ、幸ニ村端ニ達スルニ吾ガ同胞ハ頻々トシテ横タワル、稍ク村落内ニ入レバ四面皆大敵弾ハ絶ヘズ爆発シ危儉言フ許リナシ、村ノ西端地隙内ニテ漸ク師団司令部ヲ認メ報告ヲ呈セルニ、白髪ノ老將軍ハ完爾トシテ宜シ一戸少将ニ二ヶ大隊ヲ率ヘテ赴援セシメヨト、使命ヲ果シテ再ヒ砲弾下ヲ馳セテ帰来セリ、間モナク一戸少将ノ率ユル二大隊ハ畑地ヲ散開隊形ヲ造リテ前進シ来ル、敵砲ハ之レヲ見ルヤ一層猛烈ニ砲火ヲ注ギシモ、比格的損害ナクシテ到着シ直ニ前面ノ敵ヲ撃退セリ、此ノ日第七師団ハ正午頃北陵ヲ占領シ、中央第一師団ハ午后二時頃迄二三台子及ヒ楊城屯ヲ占領セリ、三台子附近ニ在リシ吾カ砲兵隊ハ奉天北門北陵附近ヨリ鉄道線路ニ沿テ退却スル敵ニ対シ砲火ヲ浴ヒセ多大ノ損害ヲ与ヘ、余リ美事ニ命中セシ為メ將校兵士ニ至ル迄一発毎ニ手ヲ叩テ万歳ヲ呼ヒツ、射撃セリ、吾ガ正面ニアリテ抵抗セシ敵モ漸次地隙ヲ利用シテ退却セシモ尚ホ線路附近ニ至ラ得ズ、聯隊ハ同地ニ在リ露営セリ、中央隊及ヒ右翼ハ線路ニ到着セリ、此日吾カ分隊ニテモ斃馬ニヲ出シ負傷者一ヲ出セリ、此日ヲ以テ奉天ノ攻撃ハ結了シ追撃ニ移レリ

同十一日 午前六時出発、先発隊トナリ胡士台停車場ヲ少抵抗ヲ受ケシ而已ニテ占領セリ、同停車場附近ニハ露軍ノ死者ヲ引き来リテ已ニ埋メタルモノ未ダ埋メザルモノハ山ノ如ク堆積シアリ、場内家屋ニハ日本負傷兵五、露兵四百余名アリ、二名ノ看護手付添ヘ居レリ余等ノ面ヲ見シトキノ吾ガ負傷兵ハ喜ヒ、諺ルニ物ナク彼レ等ハ已ニ斬ラレントセシトコロナリシト語レリ、同停車場ヲ后続部隊ニ譲リ尚ホ追撃ヲ続行セリ、途上見渡ス限り弾薬車・輜重車・諸行李等遺棄セラレ帽子・被服類ニ至ル迄混乱遺テラレアリ、大軍ノ敗退セル様目モ当テラレズ、武器ヲ持セザル敗残兵ハ疲労困憊ノ極、三三五々ヲ相連ナリ南ニ向テ吾ガ軍ニ投降シ来ルモノ続々絶ヘズ、長大ナル体軀ヲ持シテ尚ホ健全ナルニ態々来リテ降ヲ乞フ、士氣察スルニ足レリ、更レトモ彼等ノ一部ハ尚ホ有力ナル后衛ヲ置キ各所ニ少抵抗ヲ試ミテハ退却セリ、此日ハ最右翼第一軍ノ前進部隊モ亦奉天街道ヲ追撃セシ為メ混乱シテ彼我ノ識別ニ苦ム程ナリ、益々追撃シテ九里崗子停車場ニ達セシトキ、稍有力ナル后衛アリテ線路ニヨリテ阻守シ我騎兵集團ハ全部徒歩シテ之レト塵戦シ、夜ニ入りテ追撃ヲ中止シ同地ニ村落露営セリ、此ノ日我ガ山砲隊ハ后尾ヨリ来リテ九里崗子ニ在ル吾ガ騎兵

ニ向テ十余発ノ砲弾ヲ送りシモ幸ニシテ負傷ナク、直ニ伝騎ヲ飛ハシテ中止前進セシメタリ、此ノ日聯隊ニテ分捕馬二十余頭アリ、奉天ヨリ同地附近ニ到ル六七里ノ長程物資ノ遺棄セラレサルトコロモナク、殊ニ馬匹ノ如キモ廢物トナリタルハ到処ニ肅然トシテ立チ、河流ナドアルトコロハ解氷セシ為メ皆搬送スル能ハズ、車輛河中ニ充滿セリ

同十二日、晴レ 午前六時出發、追撃ヲナシ途上屢々少数ノ敵ヲ驅逐シテ心台子停車場附近ニ至リ停止ス、此ノ日軍隊区分ヲ解カレ、各軍ヨリハ別ニ前進部隊ヲ出シ鉄嶺開原ヲ攻撃占領セシメ、其他ノ諸隊ハ休養ニ就ケリ、聯隊ハ第一師團ニ帰属セラレ盤板ニ村落舎宮ス、前進部隊ハ重ニ此レ迄予備隊タリシモノヲ編成セリ

抑モ奉天ノ戦鬪ハ最右翼即チ河村兵團ノ二月廿三日ニ行運〔機〕ヲ起セシヲ動季トシテ、右翼第一軍ハ廿六日ヲ以テ運動ヲ開始シ以テ敵ノ左翼ヲ衝クノ氣勢ヲ示シ、敵ヲシテ此ノ方面ニ力ヲ用ヘシメ其間ニアリテ中央沙河線亦タ呼応シテ牽制運動ヲナシ、敵ガ首尾能ク吾ガ術中ニ陥リ鴨綠江軍ノ前面ニ敵勢ノ増加スルヲ見テ、尺蠖ノ縮ムガ如ク去年以來旅順ノ堅塁ニ勇名ヲ轟カシタル乃木兵團ヲ放チテ渾河及ヒ遼河ノ中間地区ヲ猛進セシメ、戦局未タ中バニ達セザルニ已ニ奉天ノ北方ニ突出セリ、敵ハ狼狽シテ急ニ各方面ヨリ兵ヲ繰上ケ一意之レガ防遏ニ勤メタリ、故ニ第三軍ハ数日急行輜重等も充分続カズ、各隊餓ヲ忍ヒ寒ヲ犯シテ非常ニ広闊セル面ヲ少数ノ兵ヲ以テ持續シ常ニ幾倍ノ敵ヲ迎ヘテ激闘セリ、之レガ為メ敵ハ益々各方面ノ兵ヲ引上ケテ退路ヲ援護セサル能ハズ、故ニ迂回兵團ノ苦戦セル割合ニ正面等ハ案外容易ニ潰裂ニ帰シ、敵ガ去年以來力尽シテ馬鹿丁寧ニ築キ上ケタル半永久ノ防禦線モ角別ノ功績ナクシテ奪取セラレタリ、之レガ為メ迂回兵團ハ其兵勇ノ三分ニヲ失ヘタリ、初メ世界ニ名ヲ轟カシタル克薩克騎兵ノ集団ハ一望浩然タル迂回兵團ノ前進地区ニアリテ、驍將「ミスチンコ」ノ統率ノ元ニ二二万有余アリシニモ係ラズ更ニ活発ナル運動ヲナサズ、之レニ対スル配慮ハ全ク杞憂ニ属セリ、之レト反対ニ吾ガ騎兵ノ精英ハ遠ク哈爾濱ノ附近ニ達シ松花江ノ鉄橋ヲ破壊セシニ非スヤ、彼レミスチンコ騎兵ハ僅カニ海城・鞍山站間ニ於テ鉄道ノ少破壊ヲナセシ而已ニテ支那馬車等ヲ焼却セシ而已、其技量果シテ如何、此ノ戦役ニ会シ殆ト天佑トモ称スベキハ、已ニ解氷セントセシ沙河ガ天候ノ急ニ寒キ為メ結氷シ自在ニ砲車ヲ運搬スルヲ得タリ、又左翼軍ノ動作地区ニアリテモ敵ノ本防禦線ニ近キ附近ノ外ハ兵燹ニカ、ラズ、秋毫モ犯スコトナク土民皆悦服歡迎セリ、乍然各方面共露兵ノ行動ハ中々勇敢ニシテ確カニ世界陸軍國ノ名ニ恥ズ、只彼レ等ハ常ニ最后ノ短時間ニ於テ吾レニ一步ヲ

譲リシ而已、其防禦工事ノ如キハ実ニ精妙ヲ極メタリ、此ノ防禦物ニ対シテハ旅順方面ニアリテ威力ヲ呈セシ廿八冊ノ巨砲ヲ用ヘタリ、有史以來如此巨砲ヲ野戦ニ用エシ事ナキヨシ、此ノ役非常ナル損害殊捕虜ヲ生セシハ、一二ハ軍司令官ノ妙算敵ヲ奔命ニ疲ラシタル結果ト、一二ハ彼レ等ノ特性トモ言フベキ力、屈セバ降伏シテ他日ノ報効ヲ謀ルト云フ決心ノ速ナル為メ、武装セル一旅団以上ノ兵ガ^{〔坂〕}僭令彈藥尽ルトモ包囲中ニ陥ルトモ最后ノ決戦ヲナサズシテ降伏セシナリ、之レヲ吾ガ北陵占領部隊ノ一部ガ群ヲ離レテ突進セシ為メ、非常ナル優勢ナル敵ニ対スルノ休ムヲ得サルニ至リトキ、而モ彈丸已ニ尽キタル悲境ニ陥リシニ、尚ホ又銃ヲナシ平常ノ如ク前面ノ敵ヲ睥睨ツ、烟草ヲ吞ミテ氣勢ヲ示シ、終ニ夫ノ攻撃点ヲ保持スル事ヲ得タルニ比シテモ戦況ノ一端ヲ推知スルニ足ル、聯隊ノ総死傷、死七・傷二十一名、斃馬廿六頭ニ過キズ、捕虜行衛不明四、大山總司令官ハ奉天陥落ト同時ニ敵命ヲ出シテ奉天城中ニ入ルヲ禁シタリ

同十三日 晴レ 同地出發、三台子ヲ經テ黃崗子ニ舎營セリ、第一師団司令部ハ三台子ニ、第三軍司令部ハ刘王屯ニアリ、情報アリ、当宿營地附近ハ井水ニ乏キニ困難セリ

一、チーチー山附近ニハ猶諸兵連合ノ敵停止シアリ、猶郎家屯東北地区ニ敵ノ監視騎兵アリ、師団ハ現地ニ在リテ戦鬪準備ヲナス
筈

二、聯隊ハ別命アル迄現地ニアリテ遼河右岸ノ地区ヲ搜索スルモノトス

三、給与ハ別命アル迄大行李ノ糧秣ヲ用ユベシ、大行李ハ鉄炉舗ニテ補充ヲ受ケルモノトス

師団通報 一、昨日午前十二時頃新屯方向ニ第二師団ノ進出セルヨシ

二、兎家子北方高地ニハ敵ノ歩兵一、旅団砲兵二三中隊存在スルモノ、如シ

三、秋山支隊ハ鉄嶺方向ノ敵偵察ニ任スル筈ナリ

四、法庫門附近遼河ノ橋梁ヲ敵ノ一部之レヲ破壊セリ、依テ第七師団之レヲ修理スル筈ナリ

師団司令部ハ大孤河子ニアリ、右翼隊第二步兵旅団ハ達連屯・覺家窩棚・拉馬台附近ニ宿營スル筈、左翼ノ第一旅団ハ龍崗子・陵角阿子附近ノ地ニ宿營スル筈、聯隊ハ師団ノ予備隊トナリ徐家窩棚ニ宿營ス、但シ第二中隊ハ黃崗子ノ西端ニ宿營ス

第九師団ハ副趙大房・リンゴヤラピンノ線ニ在リ、第七師団ハ石仏寺附近ヨリ砂崗子附近ニアリ警戒ス、其一部ハ遼河右岸ニ在リ
テ橋梁ヲ占領ス

同十四日 同地滞在、通報アリ

一、遼河右岸ニアル敵ノ気脈ハ苗家溝東西ノ高地ヨリ康家屯・寧家山ヲ経テ独花台

二、本日チウチウ山ヲ秋山支隊占領セリ

同十五日 同地滞在、郵書一通ヲ許サル 一、諜報ニ依レバ鉄嶺附近ノ敵ハ逐次北方ニ退却シツアリ 二、病馬廠ハ藍家屯ニ開設ス
ル筈、三、聯隊ハ主力ヲ以テ遼河右岸ノ敵情ヲ搜索セントス

此ノ日第三小隊長ハ斥侯トシテ石仏寺ノ軍橋ヨリ三面船ヨリニ台子方向ヲ搜索セリ

聯隊ハ宿营地ヲ拉塘湖ニ転センコト

同十六日 晴レ 午后一時出発、拉塘湖ニ舎営セリ、第一聯隊命令

第一軍・第四軍ノ前進部ハ本十六日午前〇時二十分鉄嶺ヲ占領セリ、師団ハ現地ニ在リテ戦闘準備ヲ整ヘラル
各中隊ハ内部ノ整理ヲナスト同時ニ教育ヲ実施スベシ

日課表

午前六時三十分起床、馬匹入手入水飼与、十時ヨリ十一時半ニ至ル乗馬演習、旅囊ヲ除ク、十二時朝食^{「ママ」}、一時ヨリ二時ニ至ル徒歩演
習、午后二時諸勤務ノ交代、二時ヨリ三時半ニ至ル武器・馬具・被服ノ入手、三時半ヨリ五時ニ至ル馬匹入手飼与、六時夕食、人
馬診断午前十時、午后勅語奉読式アリ

勅語

奉天ハ昨秋以来敵軍此処ニ強固ナル防禦工事ヲ設ケ優勢ノ兵ヲ備ナヘ必勝ヲ期シ功ヲ争ハントセル所ナリ我ガ滿州軍ハ機先ヲ制
シ奮然攻進沍寒氷雪中力戦健闘十余昼夜ヲ連ネ遂ニ頑強死守ノ敵ヲ撃破シ数万ノ将卒ヲ擒ニシ多大ノ損害ヲ与ヘ之レヲ鉄嶺方向
ニ駆逐シ曠古ノ大勝ヲ博シ帝國ノ威武ヲ中外ニ発揚セリ

朕深ク爾將卒ノ克ク堅忍持久絶大ノ勲功ヲ奏シタルヲ嘉ミス尚益奮勵セヨ

同十七日 晴レ 同地滞在会戦以来始メテ瓶風呂ノ馳走ニ逢へ、大ナル豚二尾ヲ銃殺シテ英氣ヲ養ハントセリ、午后忽テ命令アリ、出発準備ヲナスベシト

命令第二中隊ハ馬場少将ノ前進部隊ニ属セラレ、鉄嶺西北約三里ノ老辺ニ向テ行進ヲ起ス筈、枝隊編成ハ歩兵一聯隊・騎兵一中隊・砲兵一中隊・工兵一中隊

同十八日 晴レ 龍岡子ニ集合シ搜索騎兵中隊トナリテ遼河ニ沿テ東北進シ高台子付近老辺ニ宿營ス、当時遼河ハ結氷シ居レリ

同十九日 晴レ 午前七時半高台子・姚家屯・黄台子ヲ経テ馬峰溝ニ至ル、馬峰溝ハ鉄嶺ヲ去ル約半里ノ地点ニアリ、遼河ノ岸ニアリ露兵ノ物資ノ集積地ナルヲ以テ船舶ヲ非常ニ集メ目下ハ皆陸地ニアリ、見渡ス限り此ノ附近ハ悉ク船舶ナリ、同地ニテ午食ヲナシ元軍橋ヲ架シタル趾ノ下方ヨリ渡レリ、軍橋ハ露兵自ラ焼却セリ、対岸ヨリハ露兵ノ造リシ軍道ニヨリテ進ム、両辺皆防禦工事ノ跡アリ、午后四時頃遼河右岸果子園ニ至ル、同地附近ノ軍橋モ破壊セラレタリ、水上ヲ渡リテ対岸老辺ニ到リ、歩兵第一聯隊ノ一大隊及ヒ工兵大隊ノ第二中隊ト共ニ宿營セリ、同夜同字田村茂三郎氏ノ工兵第一大隊ニ入營從軍セラレシ、逢ヘテ旧情ヲ語り大ニ慰メタリ

同廿日 晴レ 第二中隊ハ孤家子附近ニ前進シテ通江口附近ノ敵情ヲ搜索セントス、午前八時奥隆台ニ至ル異状ナシ、孤家子ニ至ル別ニ敵情ヲ得ズ帰来、老辺ニ宿營セリ、支隊本隊ハ果子園ニ前衛ハ老辺ニ在リテ防禦工事ヲ施セリ、工兵隊ハ老辺・果子園間ニ軍橋ヲ架設シツアリ

同廿一日 晴レ 午前八時出発、第十一分隊ハ馬家窩棚ヲ経テ塵雲堡ニ至リ敵情ヲ搜索ス、土人ノ言ニ依レバ昌図府ニハ敵兵五百、沙河子ニハ四千駐止シアルモノ、如シ、十八日ニ於ケル敵情、敵ハ鉄嶺以北ニ退却シ法庫門以南ニハ敵兵ナシ、第四軍ノ一部ヲ以テ中固附近ヲ占領セリ、軍ノ主力ハ懿路附近ニ集合スル筈、第一軍ハ先進部隊ヲシテ「サイカホ」(鉄嶺東方約六里半)占領セシメ、軍ノ主力ハ丁家湖(鉄嶺南方六里附近)ニ集合スル筈、第二軍ハ依然奉天ノ西方及ヒ北方ニ位置スル筈、軍ハ現在地ニアリテ戦鬪力ヲ恢復スルヨシ

秋山支隊ハ開原附近ニ前進シ昌図府及ヒ威遠堡方向ヲ搜索スル筈、田村支隊ハ大嶺附近ニ位置シ一部隊ヲ以テ西城附近ヲ占領ノ筈
 同廿二日 晴レ 午後外工兵后果子園ニハ歩兵第一聯隊ノ第二大隊、老辺ニハ同第三大隊、前果子園ニハ旅団司令部及ヒ工兵第二中
 隊宿営シアリ、騎兵中隊ハ前施家堡ニアリ

同廿三日 晴レ 交代情状アリ、前田支隊（中固占領部隊）通報左ノ如シ

イ 前田支隊ノ主力ハ依然中固ニアリ、又開原ニハ歩兵一ヶ大隊在リ、開原附近ハ廿日以来一般静穩ニ帰セリ、長棚以南又敵兵ナ
 シ

ロ 秋山支隊搜索隊ハ廿一日午後二時敵ヲ圧迫シテ昌図府ヲ占領セリ

ハ 威遠堡門ニ在ル將校斥侯ノ言ニヨレバ、去ル十七日以来該地ヲ出発シテ吉林方向ニ退却セル敵ハ約一師団ニシテ、騎兵四五中
 隊南城子以北ニ停止シ、紀家屯・馬家林子及ヒ其東南高地ニ至リ監守嚴ニシテ斥侯ノ通過ヲ許サズ

秋山支隊ノ通報ニヨレバ支隊ノ一部ハ敵ヲ追接シテ昌図ニ進入セリ、午前九時敵ノ大縦隊ハ鉄道線路ニ沿テ東北方ニ退却セシガ如
 ク、騎兵ノ一部ハ尚昌図府北方ニ約二三千米突ノ所ニ在リテ我ト接触ス、該支隊ハ主力ヲ拳ケテ昨二十二日昌図府に進入セリ
 第三軍副官松原少佐ノ開原附近ニ派遣セル間諜ニ依テ得タル情況左ノ如シ

本月十八日開原ニテ露兵北走セシト聞キ直ニ昌図府ニ赴カントシ通江口ニ達セシニ、露兵約二千・騎兵約一千・野砲二十門アリ、
 屋外ニアリテ夕食準備中ナリシガ午後八時喫食シ后再ヒ北行セリ、歩兵ハ大ニ疲労セルモノ、如ク跛行スルモノ少ナカラズ、軍馬
 モ亦夕疲労セル如ク、軍用馬車六百輛、彈藥・糧食ヲ載積シテ同行セリ

同廿四日 晴レ 駐止斥侯トシテ馬家窩棚・老頭虎ヲ経テ双楼台ニ至ル、敵情ナシ、情報アリ

將校斥侯及ヒ搜索隊ノ報告ニヨレバ、双廟子・興隆嶺・四面城以南ニハ敵ノ大部隊ヲ見ズ、奉化ヨリ来ル土人ノ言ヲ綜合スレバ、
 敵ハ奉化街道上柳樹台北方諸村落ニ露營シテ今二十三日北方ニ退却セリ

二、本日午後敵ノ騎兵約五百双廟子附近ヨリ南下シ来リ、沙河附近迄テ来リシガ、午後 三時頃北方ニ退却セリ、思フニ尚ホ日没
 頃迄ハ双廟子附近ニ停止シアリ、我搜索隊ハ之レト接触ヲ保チアリ

秋山支隊前面昌図府東北二三里ノ地点ニハ敵騎二三中隊出沒セリ、尚同支隊ハ同地ヨリ春長・奉化方面ノ敵情地形偵察ニ勤ムル筈馬市堡及ヒ吉林街道兩側ノ高地ハ急峻ニシテ部隊ノ通過困難ナリ、威遠堡附近冠河ハ水深最モ深キ処ニテ八十珊知兩岸ニハ二米突余ノ断崖アルモ、約二十米突毎ニ緩斜面アルヲ以テ、至ル所諸兵種ノ通過容易ナリ

第三軍兵站參謀長ノ通報左ノ如シ、輕便鐵道ハ奉天新民庁街道ニ敷設スル計約ナリ、最初馬三家子ヨリ新民庁ニ向カフ筈、鐵道敷設枕木未タ来ラザリシヲ以テ確實ニ云ヘ難キモ、来ル廿五日頃ヨリ布設ニ着手セントス、兵站守備隊ノ位置左ノ如シ、后備歩兵第四九軍ナル部隊ハ拉々屯(奉天北約八里)、后歩第十六ノ主力ハ新民庁東角屯、小北河ニハ第四九ノ一大隊

同廿五日ヨリ廿七日ニ至ル 晴レ 同地滞在

同廿八日 晴レ 午前七時出發、小隊長ニ從テ秋山支隊ニ連絡ノ為メ出張、八宝屯・馬千台ヲ經テ昌図府ニ至ル、途上此ノ附近ハ露軍敗退折糧食等欠乏セシ為メ到処ニテ徵發ヲナシタリト見テ、部落ハ渾テ荒涼ニ帰シ、牛馬ハ勿論鶏犬ニ至ル迄更ニ見受ケラレズ、其ノ白骨ハ到处ニ累タトシテ遺棄シアリ、如何ニ彼等ガ困難退却セシカヲ知ルニ足ル、午后四時昌図着、支隊本部内ニ宿營ス、前面ノ敵情至テ静穩ナリ

同廿三日^五 同地ニ在リ敵情ヲ考察ス、昌図府ハ東清鐵道ノ西方ニ當リ馬千台ノ長柵附近ヨリ約三里ニアリ、馬千台ノ長柵ハ今ハ高サ一米突許リノ土堤ノ上ニ楊樹ノ大木ノ植付ケアル而已ニテ道路上ニハ古キ門アリ、扁額ニ馬千總台門トアリ、其ノ傍固稅務司ニテモアランカト見ラル、建家アリ、夫レヨリ途上ハ高地起伏シ道路不良、昌図ハ此附近ノ物資集散地ニシテ中々繁盛、周圍ニハ外郭等ナシ、此日モ別ニ敵状變化ナシ、同三時頃ヨリ雪

同卅日 雪 午前七時出發、前路ニヨリテ歸隊ス、朔風肌ヲ衝キ路亦タ泥濘困難ヲ極メタリ、午后七時無事前施家堡ニ歸着セリ、諸種情報ニヨルニ敵ノ大部ハ遠ク長春・吉林ノ線ニ退却シ部隊ヲ整頓シツ、アルモノ、如シ

同三十一日 晴レ 同地滞在、非常ニ暖氣ヲ加ワヘ河水殆ト解氷セリ

四月一日 晴レ 午前六時出發、小塔子附近騎兵第二旅團ニ連絡ノ為メ出張、孤家子・三台子ヲ經テ通江口ニ至リ伝騎二名ヲ殘シ午食ヲナシ、尚遼河ニ沿テ北進、小塔子附近ニテ遼河ニ架セル軍橋ヲ渡リ小塔子支隊本部ニ至ル、小塔子ハ東北遼河ヲ控ヘ西方ニ高

地アリ好地形ナリ、古塔アリ遠クヨリ望ミ得ベシ、前面敵情ニ就テハ別ニ異状ナシ、午后四時通江口ニ帰り伝騎ヲ出シ同地ニテ休止、同地ハ遼河ノ沿岸ニアリ商業中々盛、船舶ノ繫留セル、モノ多シ、商家ノ広大ナル其周囲ノ土壁ノ如キハ丈余ニ達シ一見城郭ノ如シ、同夜ハ三台子ノ一商店ニ投宿ス、懇切中々至レリ、此日中隊ヨリ八宝屯及ビ馬千台ニ連絡ノ為メ駐止斥候ヲ派出セリ

同二日 午前九時出發、午后一時帰着ス

同三日 晴レ 同地滞在情報アリ、昨日馬場支隊ヨリ歩兵第一大隊昌凶ニ至リ、第七師団歩兵第一大隊ハ金家屯ニ至リ秋山支隊及ヒ田村支隊ノ后援ニ任ズ、田村支隊ハ四月二日大窪附近ニ進出シ太平庄方向ヲ搜索ス、秋山支隊ハ同三日出發鷺鷺樹附近ニ向カヘ前進奉化方向ヲ搜索セシトス、前田支隊前面ノ独立騎兵ハ綿花街方面ニ進出シ該地ニアル敵騎ヲ撃攘シ葉赫城方向ヲ搜索スル筈ナリ、蓮花街方面ノ敵情変化ナク、双廟子ニハ尚ホ数千騎兵停止シアリ

同四日 晴レ 同地滞在情報アリ

騎兵第二旅団及ヒ后援歩兵ハ目下金家屯ニ在リテ、敵騎廿ヶ中隊砲六門ヲ有スル敵ト對戰中

同五日 雨 此日連絡ノ為メ金家屯附近ナル田村支隊ニ至ル、通江口ヨリ三眼井ヲ經テ午后四時金家屯ニ達ス、途中盛ニ銃砲声ヲ聞ク、支隊ハ昨日来ノ敵ニ對シ攻撃ヲ加ハヘ、歩兵ト協力シテ遂ニ之レヲ撃退シ、尚警戒中同地ニ在リ、村落露営夜ニ入りテ雪寒又加ワ、ル

同六日 陰晴不定 同地出發ノ帰途ニ就ク、午后三時前施家堡ニ帰着セリ、情報アリ、馬場支隊ヨリ、一、在昌凶牛尾少佐ノ報告ニヨレバ、昨五日午前十一時頃敵ノ騎兵ハ昌凶ノ西方ニ現出シ、我下士哨ハ一時之レヲ拒止セシモ敵ノ兵力ハ増加シ来リ、正午ニハ其兵力騎兵二三中隊トナリ、西翼ハ拡張シ昌凶ヲ包圍スルノ形勢ヲ示シ、二千乃至千五百米突迄接近シ、又敵騎二三中隊ハ午后四時昌凶西方ヨリ南方ニ運動シツ、アリ、昌凶東方及ヒ南方ニハ露軍ノ指揮セル支那馬賊現ワレ、屢々通信線ニ妨害スル者アルヲ以テ、昌凶・鉄嶺間通信線ノ保護並ニ開原ニアル野戦倉庫守備ノ為メ、歩兵第一聯隊ヨリ北川中尉ノ率ユル一中隊ヲ出シタルヨシ、秋山支隊ノ通報、一、露国衛生員引渡シノ際我將校ノ目撃スル所ニヨレバ敵ノ馬匹ハ著シク疲瘠セリ、鷺鷺樹發、喜多大尉ノ率ユル搜索隊、今四日午後〇時三十分双廟子附近ニ在リシ敵騎ヲ驅逐シテ三道溝附近ノ鉄道監視家屋ニ達セリ、鉄道線路東方ニアリシ

敵騎約五百ハ北方ニ向カヘ退却、途中我猛火ヲ蒙リテ一時潰乱セシガ、目下太陽附近ニアリテ隊伍整頓中ナリ、支隊前面ノ敵ノ騎幕ハ楊木林子ヨリ双廟子ヲ経テ蓮花泡ニ至リ居リ、蓮花泡ニハ歩兵モ駐止シアリタルモノ、如シ、支隊ハ全部鷲鷲樹ニ位置シ毎日搜索中隊ヲ以テ鐵道線路奉化方面ノ搜索中ナリ

同七日 晴レ 同地滞在警戒中隊命令、中隊ハ前日ノ通り

軍ハ作戰上ノ情況ト衛生上ノ顧慮ニ基キ各部隊ノ宿营地ヲ遼河右岸ニ移サル

第一師団左ノ如シ(鉄嶺・法庫門間補足図参照)

心家窩棚ヨリ長勿川ニ沿ヘ長溝沿・英家台子・陣家窩棚ノ線ヨリ以西、高力勾・拉馬山・桃家勾・鳥辺海・花牛堡子・高坎・拉塘湖・八間房ノ線以東ノ地区上村落ニ舎營ス

第九師団ハ我師団ノ右翼ニ、第七師団及ヒ野戰砲兵第二旅団ハ其左翼及ヒ左翼后ニ

各部隊ハ準備出来次第宿营地ヲ移転スル筈、当支隊ハ第九師団此地ニ到着スルヲ待チ交代師団ニ復歸スル筈、但シ昌図ニアル部隊

ハ軍司令部ノ直屬ニ屬ス

又軍ノ背后連絡ノ為メ古城子ニ人馬通過ノ渡船場ヲ開設スル筈

同八日 晴レ 同地滞在老辺ニ田村氏ヲ訪フ、同地ノ架橋殆ト落成セリ、中隊ヨリ出シタル間諜ノ言ニヨレバ、八面城ニハ諸兵連合

ノ敵兵五千ヲ算ス、歩兵多クシテ騎兵少ナク砲兵アレトモ偵知スル能ハズ

大窪ニハ騎兵五百アリ、八面城ヨリ来リシモノ如シ、大窪・八面城間ニハ多数ノ騎兵来往シアリ

昌図・開原ノ背后連絡ノ為メ歩兵第一聯隊長ニニヶ大隊ヲ率ヘテ此ノ附近ノ守備ニ任ス

同九日 曇 南風塵起ル、第二中隊ハ昌図附近ノ敵情探索ノ為メ出発、八宝屯・馬千台ヲ経テ午后四時昌図ニ達ス、前日来秋山支隊ハ優勢ナル敵ニ圧迫セラレ昌図ニ退却シアリ、此ノ日モ鐵道線路東側ニ沿テ南下シ来リ、馬千台ヲ襲ヘタリト急報ニ接シ、歩兵及ビ騎兵ヲ分チテ赴キ援ハシム、敵ハ馬千台・昌図間ノ通信線ヲ破壊シ夜ニ入りテ退却セリト、中隊ハ支隊本部内ニ宿營シアリ、夜半命アリ、報告ヲ持シテ果子園馬場支隊ニ至ルベシト、夜正ニ暗黒途上又危儉ナラントス、依テ他ノ途ヲ取り歸ルニ決シ兵二名ト

共ニ亮子河ニ沿テ行々、土人ノ家ヲ叩キ又ハ覺東ナキ地図ヲ按シ、亮中橋ヲ經テ双楼台附近ニ達シテ漸ク天明ケタリ、途中雷雨ニ逢ヘ路亦タ泥濘困難ヲ嘗メテ午前十時果子園ニ至リ報告ヲナシ、前施家堡ニ還リテ休養セリ、近日来ノ暖氣ニ連レテ旅雁ノ来リテ附近ニ落下スルコト夥シク時々好下物トナレリ

同十日 中隊ハ一部ヲ留メテ聯絡シ馬千台ヲ經テ帰還セリ、馬千台ニテハ中隊ヨリ出サレタル騎兵一分隊・歩兵半小隊而已ニテ約三
中隊ノ敵騎ニ包囲セラレ、既ニ三百米突ニ近接スル迄知ラサリシ為メ非常狼狽苦戦セシモ、遂ニ支隊ノ増援ヲ得テ撃退スルヲ得テ
后方ノ兵站線ヲ保持スルヲ得タリ

同十一日ヨリ十三日ニ至ル 同地ニ在リテ警戒、雨天ナシ、氣候余程暖ニ向ヘリ

同十四日 陰晴不定 中隊長ノ訓示アリ、橋口中佐ニ就テ得タル情報左ノ如シ

- (一) 八宝屯（金家屯北方約一里）及ヒ奥隆嶺以南ノ地区ニハ敵兵ナキモ、ノ如シ
- (二) 馬隊ノ配布左ノ如シ

通江口ニハ歩騎兵合シテ約一千 法庫門同約四五百 康平県同約三百

橋口馬隊ノ約六百ハ明早朝通江口康平県ヲ經テ遼陽窩棚ニ前進シ鄭家屯方向ヲ搜索スル筈、蒙古馬隊ハ橋口馬隊ノ左側ニ連繫シテ
行動スル筈、田村旅団ハ目下小塔子西北方刘家屯ニ在リテ警戒中、小塔子新軍橋ハ十六日頃落成スル筈

橋口馬隊ト称スルハ橋口歩兵中佐ノ統率シテ常ニ中立地帯ニアリテ我が最左翼ヲ警戒セル支那馬賊ニシテ、数他^{〔多カ〕}ノ日本将校下士其
間ニアリ、隠見出没処ヲ極メズ、熟知セル地理ニヨリ馬ニ跨リ各人個々ノ服務ヲナシ、中々敏活ニ運動シテ常ニ敵軍使用ノ支那馬
賊ト對抗シツ、アリ、蒙古馬隊トハ之レモ亦タ支那人ニシテ、別ニ吾ガ将校統率ニヨラズシテ、吾レニ好意ヲ表シテ蒙古地方ニア
リテ遙カニ援助ヲ与ヘツ、アリ

同十五、六日 同地滞在記事ナシ

同十七日 第九師団到着ニ付キ支隊編成ヲ解カレ、中隊ハ午前九時出発、老辺ヨリ軍橋ヲ渡リ黄古洞・往戸屯ヲ經テ宋家荒地ナル聯
隊宿营地ニ合シテ休養ス、自后日常ノ起居動作皆喇叭号音ニヨリテナス

同十八日 晴レ 同地滞在異状ナシ

同十九日 第三小隊馬匹検査ヲナシ、明日ヲ以テ第三軍司令部ノ伝騎ヲ命セラル

同廿日 晴レ 午前八時出發、阿吉牛条堡ニ至リ増永小隊ト交代シ、第九分隊ハ同地ニ、第十一ハ瓦子窰ニ、第十二ハ拉馬台ニ、第

十八王家庄ニ各進騎哨トナル、余ハ十二分隊六名ト遼河軍橋架設点拉馬台ニ在リ、工兵第一大隊ノ第三ノ二小隊ト共ニ舎營ス

当時遼河運送ノ便開ケ、吾ガ兵站部ノ使用支那船類々トシテ上下シ、布帆風ヲ風ヲ孕ミテ風光転タ佳ニシテ荒漠タル山村モ何トナク賑カニ感セラレ、又之レガ為メ吾ガ輸送上ノ便利ヲ与フル多大ニシテ、実ニ百米突間ニ帆船一アル位ノ割合ニテ、只從來更ニ公益事業ニ意ヲ用ユサル清人ハ河流ノ曲折水路ノ梗塞等モ等閑ニ付スル為メ長時間ヲ要シ、又或時ハ袴ヲ脱シテ河中ニ入りテ帆檣ノ頭ニ網ヲ付ケ三四人ニテ之レヲ引キツ、上ルヲ見ル

同廿一日 晴レ 午前九時出發、高坎・三台子ヲ経、石仏寺軍橋ヲ渡リ三面船ナル第七師団兵站部ニ至ル、同地ハ遼河右岸ニシテ運輸ノ便アリ、大孤家子ヲ経テ法庫門ニ通スル道路アリ、電信ヲ架シアリ

同廿二日 晴レ 前任務ヲ続行ス

同廿三日 晴レ 南風暖和、午后一時ヨリ石仏寺橋梁司令官ノ許ニ至ル、石仏寺ハ遼河左岸ニアリ塔山(山上ニ古塔ト烽火台アリ)東麓ニアリ、第七師団ノ区域ナリ、同所ノ軍橋ハ船橋ナリ

同廿四日ヨリ廿六日ニ至ル 記事ナシ、毎日七八通宛ノ書信ヲ奉天ナル滿州軍司令部ヨリ第三軍司令部ニ伝達シツ、アリ、北ハ黄家窩棚南ハ对王屯ニ連ナリ、騎兵第九聯隊ト共ニ交通機關ヲ主ル

同廿七日 晴レ 午前川邊少尉殿巡視セラル、午後黄家窩棚ニ至ル、同地ニハ第九聯隊ノ騎兵駐止シアリ、此日第一聯隊ハ聯隊指揮ノ下ニ名和支隊トナリ通江口ニ在リ、第三中隊ハ法庫門ニ至レリ

同廿八日 晴レ、奉天・鉄嶺間汽車ノ交通完全セル為メ、拉馬台ヲ撤シ大鮑家崗子ニ移ル、同所ニハ第七師団兵站司令部アリ、南心台子停車場ニ北ハ索龍崗子ニ連ナル、心台子ヨリハ汽車ニテ奉天停車場ニ至ル、北方ハ古城子ヨリ渡船ス、渡船ハ吾ガ工兵之レヲ司ル兵站部アリ

同廿九日 同地ニ在リテ前任務ヲ続行ス、西隣大丁子泡・小丁家泡附近ハ皆第二軍ノ宿营地ニシテ、時候漸次熱スル為メ諸種流行病
 予防ノ為メ清潔法ヲ励行シ、日本兵ノ宿営タル土人ノ家ハ水渠ヲ鑿チ、築山ヲ造リ小松ナド拾へ来リテ移シ植へ、^障璋子ヲ張り替ナ
 ドセルニヨリ、宛然^{〔突カ〕}日本内地ノ部落カト見受ケラル

同卅日 雨 川邊少尉殿奉天巡視ノ帰途止宿セラル、此日固現役当時ノ旧友茅野氏ニ逢フ、同氏ハ輜重監視隊ニ編成セラレタリ

五月一日 晴レ 西南風、午后二時心台子停車場ヨリ公用ヲ帯ヒテ奉天停車場ニ至ル途上、無蓋貨車内ヨリ九里崗子・胡士台・三台
 子・北陵等ノ古戦場ヲ望見シテハ坐口旧時ノ感ニ打タレ、殊ニ兩側地隙内水淖中ナドニ村犬ノ発掘スル所トナレル人馬ノ白骨散乱
 シアリ、靴・帽子等ノ遺棄セラレアリ、敵ガ自ラ焼却シテ走りシ車輛ノ赤錆トナリタルモ所々ニ捨テラレアリ、如何ニモ古戦場ノ
 影ヲ止メタリ、停車場附近ハ大凡焼却セラレタレトモ夫ノ病院トナリ居リシ部分等ハ完全セシアリ、今ハ吾ガ病院旗翻レリ、遞騎
 哨宿舍ニ至リ馬ヲ借リテ奉天城内ナル滿州軍司令部ニ至ル、途中城外広大ナル傍りナル第二軍司令部ニ至リ使命ヲ果シ城内
 ニ至ル、奉天城ハ周圍五六里ノ土壁ヲ以テ囲マレ土壁内ハ商家輻湊セリ、外衛兵アリ狼リニ通行ヲ免サズ、東行スル十余町ニシテ
 小西門ニ達ス、之レ奉天城壁ニシテ高サ一丈五尺余幾分損所アリト雖モ尚ほ巍然トシテ聳ユ、東西南北八ヶノ大門ヲ設ケ通行一二
 之レニ依ル、門扉ハ鉄板ヲ張リタル堅固ナルモノナリ、市街ハ大凡商家ニシテ中々繁大、皆堵ニ安シ常業ヲ營ミ、市街等モ軍政署
 ノ監督ノ下ニ清潔法ヲ励行セラレ下水等モ完全ニ構築セラル、夫ノ尤モ繁盛ナルハ四平街附近ナリ、四平街ニハ中央ニ鐘樓アリ、
 街路階下ヲ四通セリ、滿州軍總司令部ハ奉天將軍增柑氏ノ宅ニアリ、警戒中々嚴重ニシ紅帽隊守衛シ居レリ、副官部ニ至リ使命ヲ
 果シ尚ホ城内ヲ巡覽ス、南大門ノ方向ニ固^{〔マヤ〕}ノ清国宮殿アリ、屋瓦皆朱瓦ニテ中々宏壯ナリト雖モ、大破ニ及ビ修繕ヲ加ヘサル様子
 ニテ何トナク昔ヲ忍ハシムル趣キアリ、出入ヲ禁シ支那官兵及ビ我兵モ之レヲ守衛セリ、街頭ニ出ツレバ各種ノ商業更ニ吾ガ内地
 ノ都市ニ違ハズ、殊ニ狡猾ナル支那商人ハ日本人ノ歎意ヲ買ハン為メ、日本国輸入品トカ日本在留何年間ノ商店ナリトカ、又ハ片
 カナニテ日本品何テモアリマスナド、渾テ日本ニ縁故ノアルヲ此上ナキ光榮トセル様子ナリ、僅カニ一ヶ月余ヲ隔テシ以前ハ万事
 露国ニ法リタルナラン、忽チ見ル異様ナル昔シノ青龍刀ノ如キ木造ノ大長刀ヲ真先ニ押立テ、赤キ衣ヲ着テ鳥ノ羽ノ付キタル帽子
 ヲ載キタル^{〔マヤ〕}官人ニ護衛セラレ、輿ニ乘リテ鍊リ来ルヲ聞ケハ官憲貴人ノ婦人ナリト、簾ヲ垂レテ服装等ハ見ルヲ得ズ、中々業々シ、

帰路再ヒ大西門ニ出テ新ニ構築セラレタル軍道ニヨル、途上支那官兵ガ赤キ軍服ニ丸ニ奉ノ字ヲ染メ抜キタルヲ着シ、吾ガ補助輸卒隊ニ指揮セラレ土ヲ担テ運搬セリ、如何ニ利欲ニ迷ヘバトテ軍服ニテモ脱シテ作業セバ如何ナラント考ヘラレヌ、城ノ東北ニ当リ羅馬ノ古塔アリ、停車場附近ノ尖塔ノ元ニ本願寺布教師慰問所アリ、同夜ハ停車場遙騎哨所ニ止宿セリ

同二日 西南風晴レ 午前中馬ニテ北陵ニ至ル、城ノ西北一里余ニアリ、茲而已ハ珍ラシク松柏蒼々トシテ圜壁アリ、松林ニ取り付テヨリ五六町ニシテ下馬標アリ、暫ラクシテ蠟石造リノ石門ニ達ス、其前ニハ四頭ノ獅子頭ヲ比ヘテ立チ其左側ニ小門アリ之レヨリ入ル、正面ノ門ハ皇帝参廟ノ外開カズ、内門ニ達スル迄ニ三三個ノ獅子ト馬・駱駝・象各二個ツ、相對シテ立テ皆石造ニテ中々美麗ニ彫刻シアリ、内門ヨリハ入ルヲ得ズ、仰テ門内ヲ望メバ青黄ノ屋瓦ニテ四丈余ノ圜壁ニ包マレ四隅ニ角樓ヲ設ケラル、兎ニ角ク門内門外共ニ皇陵丈ケアリ、無道ナル露兵ノ之レニ凭リタル為メ修羅場トナリテ吾ガ第七師団ノ古戦場タリ、馬ヲ回シテ停車場附近ヲ逍遙スレバ茫茫タル広原見渡ス限り長方形ナル土窟ヲ造リアリ露軍冬營ノ旧陣地タリ、正午癸ノ汽車ニ乗リテ帰途ニ就ク、午后四時哨所ニ帰着セリ

同三日 晴レ 前任務ヲ続行ス

同四日 晴レ 遙騎哨人数改正ニ就キ分隊兵三名ヲ軍伝騎所ニ送り奉天哨所ヨリ二名来着、午后至急電報ニ接シ直接阿吉牛条堡軍司令部ニ至ル

同五日 晴レ 前任務ヲ続行ス、小鮑家岡子ノ仏国邪蘇教会堂ニ至ル、土壁倭屋寒村高夏魏然トシテ聳ユ、門内支那婦人等ノ避難者多シ、門前標札アリ、交戦国民ノ入ヲ禁ズ、此日頃ヨリ脚部ノ魔靡〔麻痺〕ヲ覚ヘ心気亢進ノ微候ヲ現ハスヲ感ズ

同六日 晴レ 前任務ヲ続行ス、此日心台子停車場二分捕砲十五門来着、皆旅順ニテ得タル者、馬匹・馬具・牽具一切、敵国ノ者ニシテ僅カニ二人間ヲ換ヘタル而已、砲モ亦タ皆砲身后坐式新式ナリ、馬匹ハ皆長大ニシテ小ナルモ尚ホ五尺一寸以上ヲ有ス、蓋シ分捕野砲大隊ヲ編成シ各軍ニ配属セラレタリ

同七日ヨリ十五日ニ至ル 晴天 概ネ西南風土塵常ニ飛揚セリ、前任務ヲ続行シ遙騎哨タリ、此ノ四月上旬ヨリ土人ハ漸ク農業ニ着手セリ、馬耕セシメテ直ニ播種スルナリ

同十六日 雨 鉄嶺ニ通信所開設セラレ鉄嶺第一師団司令部ノ通騎ニヨリテ第三軍ニ通信セラル、軍ハ此ノ前日ヲ以テ総戦線ヲ前進セラル、第九師団ハ司令部ヲ両家子ニ置キ、毫中橋ヨリ樹林子ニ至ルノ線、第七師団ハ主力ヲ康平県ニ置キ、大横道ヨリ五家子ニ至ルノ線ニ進出、第一師団ハ其后方ニ位置シ主力ヲ柏家附近ニ置ク、軍司令部ハ前進シテ法庫門ニ至ル、奉天・心台子等ノ通騎哨ハ不必要ナルニヨリ撤去セラレ、奉天通騎哨来リ泊セラレ発進備ヲナス

同十八日 午前九時出發、索龍崗子ヲ経テ古城子ヨリ渡河ス、門橋及ヒ支那船ヲ以テ渡ス、時ニ外国覽戦將校三名来リテ渡河方法ヲ視察ス、阿吉牛条堡ニテ牛食姑文屯ヲ過キテ紅具堡ニ舎營ス、途上左側ニ高地上廟宇ヲ囲ミテ樹木ノ繁茂セルアリ、風光佳龍王山ト云フ

同十七日 晴レ 午前八時出發、李家荒地ヲ経テ大孤河子ニ至ル、大孤河子ハ兵站司令部アリ、石仏寺・法庫門街道上ナリ、趙具堡ニテ午食、午后四時法庫門着、伝騎所ニ止宿セリ、此ノ日日暖カニ風輕シ、楊柳已ニ新緑ノ糸ヲ梳リ景色長閑ニシテ更ニ戦地ニアルノ感ナシ

同十九日 夜来ヨリ熱発風邪ノ気味ナリ、益々脚部ノ牽引痛アリ歩行困難ニ至リ受診ス、医官ノ言ニヨレバ、前日来微候ヲ現ワシタルヲ、両日ノ行軍殊ニ甚ダシキ暖氣ニ向カヘタル為メ急ニ症状ヲ増進セルナリト、伝騎所ニアリテ休養ス、此日法庫門西南方地区ニ敵騎約五千米襲シ、法庫門・康平間ニ於テ第七師団第二野戦病院ヲ襲ヘ、衛生部員ヲ殺傷シ病院財料ヲ焼却セリ、続テ吾ガ軍使用ノ馬賊ヲ圧迫シ法庫門西南方約三里ノ地点ニ達セリト、当時軍司令部ニハ歩兵一大隊（一中隊欠）アル而已、全部警急集合ヲナシ西方方高地ニヨリテ防禦線ヲ張ル、終日終夜警戒ス、敵ハ法庫門ニ至ラズシテ西方ヲ迂回シ南下ノ模様アリト、午後五時歩兵増援隊到着追撃シテ大房身附近ニ至リテ遭遇セリ

同廿日 晴レ 依然警戒ヲ続行ス、午后情報アリ、歩兵隊ハ大房身附近ニテ敵騎ヲ要撃シ、敵ハ死屍八十餘・斃馬數十頭ヲ遺棄シテ西方ニ退却セリト、思フニ尚未ダ全ク北方ニ退却セザルモノ、如シ、各方面ニ伝騎ヲ飛バシ打電シテ警戒セシム、此日交代命令アリ、第三中隊ト交代ス、余ハ病症尚ホ依然タルニヨリ残留セリ、小隊ハ中隊ニ合シテ敵騎追撃ニ任セリ

同廿一日 晴レ 敵ハ依然西南方地区ニ徘徊シツ、アリ、此ノ日医官ノ勧告ニヨリ大房身兵站病院ニ入院ノ休ムナキニ至リ、土人ノ

担へ来リシ担荷ニ乗リテ東方約一里ナル病院ニ入院シヌ

同廿二日 晴レ 情況不穩ナルニヨリ后方病院ニ転送スベシトノ軍命令ニ依リ、后方約五里ナル通江口兵站病院ニ転送セラル、当地遼河水運殆ト上流ナルヲ以テ船舶ノ輻湊中々ナリ、入院兩日間身体ヲ動揺セシ為メ症状増進ノ模様アリ、此日三面船附近ニテ后備兵第四十九聯隊ノ一部ハ敵騎ノ包囲スル所トナリ殆ト全滅セリトノ報アリ

同廿三日 晴レ 此日他ノ患者ハ后送セラレシモ、症状危儉ナリトテ見合セトナリ同病院ニアリ、此ノ病院ハ第九師団ノ兵站病院ナリ、大商家ヲ徵発セシモノナリ

同廿四日ヨリ 同病院ニアリ、全回復隊ノ希望ヲ以テ英意静養ニ勤ム、天候ハ廿五日午后雨、廿六日同雨、廿七日晴雨不定、廿八日晴レ、廿九日晴レ暖、三十日陰晴不定、雨屢来ル、卅一日晴レ暑氣ヲ覚ユ、同六月一日晴レ后チ曇、晚来大雷雨、二日晴レ、三日晴レ后チ曇リ、夜ニ入りテ雨、四日晴レ、五日同シ、六日晴レ暑氣急ニ加ワ、ル、七日晴レ暑、八日晴レ、午后雨、九日晴レ、十日夜来ヨリ雨、十一日雨、十二日陰晴不定、十三日午前雨、午后晴レ

本日ニ至ルノ間症状更ニ快復ノ目^見込ナク、歩行稍自由ナルモ運動后心氣亢進シテ全快ノ見込ナシ、中隊ヨリハ中隊長・小隊長殿ノ御慰問状ヲ始メ戦友ヨリ回数數十通ノ慰問ヲ受ケ感激、一日モ早く復隊セントセシモ如何セン快復ノ見込ナキヲ、遂ニ鉄嶺病院ニ后送セラル、事トナリヌ、同院ニアリテ幾度カ各兵種ノ傷病ノ来院及ヒ后送アリ、僅四五日間ノ交情兄第モ唯ナラサルニ至リシハ、野砲七潮田資行、第九師看護長豊田稻一、宮城県伊具郡桜村星喜平、群馬県山田郡桐生町下久下二三高橋藤吉、福山^{「ママ」}県松前郡福山町字尋舎堂三六松葉佐之助、長野県南安曇郡小倉村丸山沖太郎、大和吉野郡梅本由松、后歩原金七郎、第七師歩二六十高際新吉氏等ニシテ、皆后日ニ至リテモ書簡ノ交換ヲナシタリ、情報ニハ騎六聯隊ハ名和支隊ヲ編成シ第九師団ニ属シ、大小屯附近ニアリ前哨勤務ニ服シツ、アリ、敵ハ吾ガ前進部隊ノ僅少ナルヲ偵知シ、漸次南下シテ小塔子附近迄襲来シ、吾ガ通騎七名全部捕虜トナリ、斥候中増永・中村ノ二少尉包圍攻撃セラレテ負傷シ、下士以下損害又多大ナリト、当時吾ガ前線ハ康平前面ヨリ八宝屯線上ニアリ、敵騎有力ナル部隊ハ楊陽窩棚ニアリテ屢次小逆襲ヲ試ミツ、アリ、最大快報トシテ以喜措ク能サリシハ日本海ニ於ケル五月廿七日ヨリ廿八日廿九ニ於ケル大海戦ニシテ、電報着セシハ五月三十日ニシテ、病軀ヲ抱キシ者ノ身トシテ殊更心地愉快ニ感セラレタリ、

当時ノ電文ハ簡單ナリシモ、敵艦隊ニハ戦艦六艘撃沈、巡洋艦六艘同シ、戦艦二艘・巡洋艦二・駆逐艦一ヲ捕獲シ、敵帥以下捕虜無数、我艦隊損害ナシト、実ニ昨冬以来多少ノ憂苦ノ種子トナレル波艦隊モ脆クモ日本海ノ藻屑トナリ終リヌ

又当地商家資産家多ク、殊ニ大商店ニアリテハ皆手札ヲ発布シテ使用シ居レリ

同十四日 午前七時出発、支那船ニテ遼河ヲ下ル、同シク后送者八十余名、余等ハ重症患者トシテ一船倉二名ニテ横臥シテ休養シ得、患者用船十余艘、一等軍医之レガ指揮官タリ、船頭赤十字ノ大旗ヲ立テ舳艫相含ンテ下ル、吾ガ兵站部使用船ハ頻々トシテ来住シ、天氣又穩ニシテ兩岸ノ緑草雨后益々新緑ヲ添へ、名モ知ラヌ鳥ノ柳梢ニ囀スルナド風光絶佳、(チャンコウズ)軍橋・興隆台附近ノ軍橋ヲ通過シテ老辺軍橋ニ至ル頃日没ニ会シ、船中夕食ヲナシ終ル頃、東山已ニ玉兔ヲ吐キ月光昼ノ如ク、尚ホ遼河ヲ下リテ兩山相對スル中間月光ヲ載^{マケル}テ中々ノ絶景ナリシモ、幾何モナク病余ノ疲労ヲ感シ何日カ酔裡ニ入りテ、夜半馬峰溝ニ着シ船中ニ一泊セリ、同地ハ船舶ノ集中名状スベカラズ

同十五日 午前七時出発、担荷ニヨリ鉄嶺病院ニ入院セリ、敵ノ兵站病院タリシモノナリ、鉄嶺市街ハ囲壁ヲ以テ廻ラシ大破ニ及ベリ、停車場附近ハ非常ニ敗残セル為メ新ニ家屋ヲ築造中ナリ

同十六日 同院ニテ休養症状別ニ異状ナシ、同病院附近ヨリ前面綿々タル敵ノ防禦陣地ヲ望ミ得ハ、敵ハ延々タル高地ノ綾線^楼上ニ迤迤タル防禦工事ヲ設ケ、后方連絡ノ為メ軍道ヲ新築シ山麓ヨリ輕便鉄道ヲ敷設セリ、汽車ハ日々数回往来セリ、同院中ニ露兵ノ捕虜一名アリ、克薩克騎兵ニシテ黒龍江沿岸ノ土民ニシテ家ニハ母ト妹トヲ残シアリ、自分ハ嘗テ他郷ニ出タルコトナク、母又年老ヘタルヲ以テ自分カ捕虜トナリシヲ聞カバ非常ナル心痛ヲナスナラント、暗涙ニ咽ヒツ、露語ヲ解セル吾ガ軍医ニ向テ語レリ、彼レハ吾ガ騎兵ノ為メ捕虜トナリ両股ニ貫通銃創アリ、戦々タルノ風アリ満目ノ集中点トナル、吾ガ同胞ノ敵国ニ捕虜タルモノモ亦タ同様ナラン、同地ニテ日本海々戦ノ新聞ヲ見ル、吾ガ艦隊ガ敵艦ヲ撃破セル状鉄槌ヲ以テ柝木ヲ摧クガ如シ

同十七日 汽車ニテ奉天ニ転送セラル、心台子・胡士台等ノ停車場ヲ経テ第一分院ニ收容セラル、病院ノ設備中々完備セリ、同分院ニテハ単ニ患者ヲ一二泊セシメテ后送スルノ景況ナレトモ、自分ハ志願シテ同地ニアリテ休養センコトヲ嘆願シ、本院第二号室ニ收容セラレ、休養スルコト、ナリヌ、本院モ停車場ニアリ、器械藥品等ハ内地ノ病院ニ勝レリ

同十八日ヨリ二十二日ニ至ル 同病院ニアリ休養セリ、天候ハ大凡晴レ西南風

同廿四日 晴レ 本派本願寺従軍僧侶ノ蓄音機及ヒバイリンヲ奏シテ傷病兵ヲ慰メラル、音曲重ニ外国ノ節ニカ、リ不分明ナリ
同廿五日 雨 此日奉天兵站病院ヲ鉄嶺ニ進メ、奉天ニハ遼東守備軍ノ病院ヲ設置セラル

同廿六日 雨后チ晴レ 此ノ日病院ノ引続結了シタリ、之レト同時ニ新来ノ病院職員・器械ニ至ル迄不完全ニテ同地ヲ患者宿泊所トナシ、急治ノ見込ナキモノハ止メザルタメ明日ヲ以テ又転送ノ休ムナキニ至レリ

同廿七日 晴レ 汽車ニテ遼陽兵站病院ニ收容セラル、途上奉天ヨリ沙河線ニ至ルノ間ニ敷設セラレタル軽便軌道ノ收拾中ニテ吾ガ補助補卒隊ハ四面ヨリ逐次撤去中ナリ、此ノ附近ハ一面ニ露軍冬営ノ地点ニシテ其設備巧妙ナリ、彼我戦線ノ防禦工事ニ至リテハ僅カニ五六百米突若クハ三四百米突ノ近距離ニアリ、敵ハ得意ノ工事ヲ馬鹿丁寧ニ仕尽シタリ、彼我共ニ坑道ニヨリテ往来セリ、此ノ附近ノ家屋ハ全部破壊セラレ工事ノ材料ニ使用セラレタリ、東方遙カニ万宝山附近ノ一帯高地ヲ望ム、第一軍赤帽隊ノ苦戦地タリ、此ノ附近ノ土人ハ徐々ニ還り来リテ土障ヲ築キ家屋ノ修理中ニシテ、彼レ等ノ心中推シ謀ラル、烟台停車場附近ニハ分捕貨車数十輛見受ケラル、遼陽着午后二時、担荷ニヨリ本院ニ收容セラル

同廿八日 晴レ午后雨 同院ニアリテ休養、松葉氏来リ訪ワル、此夜慰問ノ為メ蓄音器アリ

同廿九日 晴レ 午前九時乗車大連兵站病院ニ転送セラル、軽症患者ハ一室廿五人、重症者ハ一室六人ニテ安楽ニ輸送セラレタリ、此夜大石橋患者宿泊所ニ一泊ナシタリ、軽症患者ハ直行セリ

同卅日 午前九時同所発、途中各停車場ニテ休憩、午后七時頃大連兵站病院ニ收容セラレ本院第二号室ニテ休養セリ、途上経来ル各停車場支那馬車ノ輻湊驚ク程ニテ彼レ等ハ一車輛銀票八円ヲ得ルヨシ、彼我戦線ノ附近ヨリ損害アルベキモ后方ニアリテハ能キ賃金ヲ得テ経済ヲ助クル多クナラント考ヘラル

五月一日 遼東守備軍満州軍倉庫獣医科ニ奉職セル工長長尾氏来訪セラル、旧友中村氏ハ東清鉄道車掌トナリテ勤務セル由、共ニ現役当時ノ旧友タリ

同二日 晴レ 同院ニアリテ休養、症状ハ別ニ異ラズ、同夜本願寺布教師ガ慰問ノタメ戦争活動写真ヲ催ス、患者一統大ニ慰勞セラ

ル、題目ノ重ナルモノ、招魂社ノ角力・元緑躍^{〔録〕}・五面相・自転車競走・風呂場ノ不思議・毛生液ノ失敗・美人化蝶ノ羽衣・波艦隊
 ・奉天ノ戦闘・汽車中ノ喧嘩・華嚴ノ滝・其他、数種中尤モ拍手喝采ハ招魂社ノ角力、尤モ同情感激セルハ奉天ノ戦斗也

同三日 晴レ 午前杖ニヨリテ青泥窪公園内ナル本願寺布教師出張所及ヒ娛樂園ニ遊ブ、園内余リ広カラズト雖モ日本式ニテ何トナク愉快、互^{〔観〕}樂場ニハ新聞アリ、樂器アリ、棋局アリ、貸本アリ、重ニ患者ノ為メニ供セラル、午后突然送命令ニ接ス、余ハ意見ヲ具陣^{〔陣〕}シテ止マランコトヲ乞フ、風土病ニシテ到底急治シ難キモノト断定セラレ休サレズ、中途還送セラル、初志ニ非サルヲ以テ強テ止マンコトヲ再願セシニ、日露ノ戦局大凡終局ヲ告グルノ景況アリ、今后送セラル、モ敢テ不忠トナルコトナシ、当地ニアリテ永ク病院ノ手数ヲ掛クルハ却テ不忠ナリナド勸告セラレテ免サレズ、此夜ハ心緒乱麻ノ如ク終宵眠ラズ暁ニ達シヌ

同三日 晴レ 午前十時命令アリ、○時出発、汽車ニテ青泥窪第一ノ停車場ニ至ル、病院船小雛丸アリ準備ナリテ待ツ、白衣ノ女丈夫等ニ援ケラレテ乗船シヌ、実ニ去年五月遼東ノ一角ニ上陸シテヨリ暑氣ニ堪ヘ寒氣ヲ忍ヒ、旅順ノ背面ヨリ奉天ノ野戦ニ至ル迄十数回ノ戦闘ニ参与シ覚束ナクモ己ガ責任ヲ尽シ来リシモノヲ、今ヤ平和克復セントスルニ臨ミ病ノ為メニ還送セラル、ノ悲運ニ接ス、悲憤交々至リ慷慨措ク能ハズ、況シテ纖弱ノ婦女子尚ホ海風怒濤ノ中ニ在リテ任務ヲ尽シツ、アルニ於テヲヤ、実ニ断腸ノ至ニ堪ヘズ、全部塔載シ終リシハ午后三時、船内ニハ各自寢台ヲ設ケアリ、二段ニシテ寢台間ヲ縦横ニ来往シ得、日用品・食器等ニ至ル迄完全シ居レリ、食事ハ航海中ハ重ニ粥食ヲ用ユ、一切ノ官給物品ヲ納付ナシ渾テ船用衣服・器具ヲ用ユ、小雛丸ハ三千余頓ニシテ看護班二班アリ、一班ハ医員一・婦長一・看護婦廿二名ヨリ成リ患者三百余名搭載セリ、午后四時解纜徐々トシテ出帆ス、余ハ懊惱遺ル方ナク心氣亢進ノ徴アリ一層船眩ヲ感セシガ、モルヒネ劑ヲ服シ一寢シテヨリ^{〔ママ〕}余程苦痛ヲ免レタリ、海上幸ニ穩カニシテ動揺モ亦少ナク、輕症患者ハ皆甲板^上ニ出テ、異国トハ言ヒナガラ住ミ慣レシ地ノ分レヲ惜ミツアリ、自分等ノ室附看護班茨城県出身第廿六班ナルヨシニテ態々病床ヲ見舞ヘ呉レタルモノ両三名アリ、尤モ近傍ノ人ニハ志々^{〔主〕}庫村出身古渡ツネ氏ニシテ写真帳・絵葉書帖ナド持チ来リテ無聊ヲ慰メラル、夜ニ入りテ蓄音器アリテ慰問ニ供ス、医員・婦長以下皆親切至ラサルナシ同四日 黄海附近ヲ通過シ、此日陰晴不定屢々大霧ニ会セシタメ五分三分毎ニ汽笛ヲ鳴ラシテ^{〔警〕}警戒セリ、速力緩徐ナル為メ甚ダシク船眩ヲ感スルモノヲ見ズ、終日寢台ニ横タワリテ進轉機ノ浪ヲ破リテ進ム音ヲ聞キツ、夜ニ入レリ

同五日 朝鮮海附近ニ在リ、此ノ日モ同様迷霧常ニ四辺ヲ掩ヘ絶ヘズ汽笛ヲ鳴ラシテ友船ノ注意ヲ求メツ、進行セリ、甚ダシキ船眩ヲ感セズト雖モ乗船以来食事ヲ廃シテ只ニ鶏卵ヲ用ユル而已

同六日 陰晴不定 名ニ負フ玄海洋上皆心痛セシモ幸ニモ意外ニ平穩ニテ不知不知ノ間ニ通過セリ、午前八時頃ハ已ニ馬関海峡ニ入り、天候亦夕快復セントシ時々日光ヲ漏ラシ兩岸ノ風物指点ノ間ニアリ、余等モ医員等ノ勸メニヨリテ甲板上ニ出テ眺ムルニ、兩岸風光嘗テ寂寞無趣味ノ赤裸山ヲ而已見慣レシ眼ニハ慘愴タル秋色ヨリ出テ、苔蕩〔駭〕タル春色ニ入ルノ感アリ、心神爽然一身ノ輕キヲ覺ユ、只吾ガ身ヲ顧ミレバ白衣ヲ着シ赤十字ノ記章ヲ付セラレ生ナガラ人間界ヲ離レタル身ナルカノ有様ニテ、転タ去年ノ春安芸丸ニ搭乗シ他ノ運送船ヲ抜キテ雄然トシテ海峡ヲ通過セシ時ヲ想起セラル、更ニ故国ニ入りシヲ喜ブノ念ナシ、乍然氣候ノ善ナル効果ハ忽チ全身病魔ヲ圧倒シ自然ニ身体ノ強固ナルヲ覺ヘ精心快然タリ、暫ク甲板ニアリ、右ニ門司港ヲ望ミ左ニ馬関ヲ眺メ兩岸要塞地ニハ大口径砲アリ、関門ヲ睥睨スルガ如ク水平波靜カニ船舶ノ遭遇毎ニ船旗ヲ挙ケテ敬意ヲ表セリ、峡内一ノ沈没船僅カニ檣頭ヲ出セルヲ見ル、門司ハ遙カニシテ只帆檣ノ林立セルト工場等ノ煤烟ヲ望ム而已、馬関市街ハ僅カニ五六百米突ニアリテ日清役ニ兩大使ノ会見談判所トセル春帆樓又指顧ノ中ニアリ、海峡ヲ通過シ終レバ再ヒ周防灘ニ入り僅カニ島影ヲ見ル而已ニテ、午后五時頃広島灣ニ入り散在セル島嶼内ヲ廻リテ似ノ島附近ニ投錨シヌ、大連ヨリ似嶋ニ至ル海路行程七百三十三海里

同七日 晴レ 午前七時頃ヨリ上陸ヲ開始シ小舟ニテ似ノ島ニ至リ檢疫ヲ施行セラル、檢疫所ハ南岸ニ建テラル、順序ハ最初事務員ノ注意ヲ受ケ四ケ木札ト一ケノ指環トヲ給セラル、金錢・時計等ノ貴重品ハ別ニ小袋アリテ一人毎ニ一括シテ木札ヲ付ケ貴重品受付所ニ交付シ、刀劍・革具類ハ別ニ消毒セラル、着衣ハズク製ノ袋ニ入レ之レニモ札ヲ付ケ之レヲ消毒車上ノ籬内〔籠カ〕ニ投シ、赤裸カトナリテ入浴場ニ至ル、入浴時間ハ十五分、輕症患者ハ戦地ヨリノ垢ヲ流シテ仕終ヘト一心ニ洗ヘ居ル内ニ合図ノ拍手木ガ鳴レバ追ヘ出サレ、洗濯セル浴衣ヲ給セラル、休憩五分許リニシテ先キノ着衣ハ消毒セラレテ廻リ来レリ、蓋シ渾テ之レ等ヲ運搬スル所ニハ軌道アリ自在ニ交通セラル、又先キノ木札ト指環ニハ同シ数字ノ番号ヲ付シ置キ入浴中モ指環ヲ離サズ、后チニ至リ衣服・貴重品・私品等〔探〕深テ番号ヲ合セテ受領スル都合ナリ、貴重品・革具・刀劍数〔類〕ハ「ホルマリン」消毒ノヨシ、他ノ衣類等ハ蒸氣消毒ニテ消毒后直ニ乾燥セラル、仕掛ケニ出来居ルニ就キ紙類等ニテモ別ニ破損セズ、僅カニ廿分許リニシテ消毒ヲ終レリ、夫レヨリ

更ニ小舟ニ乗リテ宇品ノ棧橋ニ着シテ上陸、準備セラレタル担荷及ヒ腕車・馬車ニテ広嶋病院ニ收容セラル、途上驚キシハ去年ニ比シ宇品及ヒ広嶋間ノ市街ノ殆ト連絡セントスルニテ此ノ間一里余アリ、両側皆水田畑地等ナリシナリ、予備病院ハ数ヶ所ニ分院アリ、小雛丸搭載患者ハ竹屋分院ニ收容セラレタリ、同分院ハ廿二棟ノ長方形ナル板屋ニシテ一棟二百人ヲ收容シ得、諸般ノ設備シテ規律又嚴格ニシテ上官ノ入室毎ニ敬礼ヲナス、其他四十余条ノ規則ヲ厳守スベキ旨事務官ヨリ厳達セラレ、受診ノ結果第二十三号室ニ休養セリ、室内ニハ下士若シクハ上等兵ヲ以テ室長トナシ取締ラシム、日誌帳アリ日々出来事ヲ書ヒテ院長ノ閲覧ニ供ス同七日ヨリ 同院ニ在リテ休養、日々輕快ニ赴キツ、アリ、天候モ亦タ良好ニシテ、毎日午前午後時ヲ定メテ構内ヲ散歩セリ、浴場等モ二ヶ所ニアリテ清潔ニシテ日々入浴、漸ク去年以來滿州ノ垢塵ヲ一掃セリ、酒保アリテ滋養品・日用品ヲ販売ス、在院中来訪セラレシハ去年ノ旧新宿舎主高橋真一・寺元浅子・同姉豊子及ヒ同息等ニシテ、皆丁寧ナル進物ヲ頂戴セリ、親交ヲ結ヒタルハ室附医官長門山口ノ人ニテ清水荆順、看病人取締武田信雄、群馬県人歩兵軍曹内藤倉之助氏等ニシテ、同十三日至ル、広嶋予備病院ハ本院及ヒ第一ヨリ第七分院迄アリ

同十四日 晴レ 午前十一時発ノ汽車ニテ東京予備病院ニ転送セラル、之レヨリ輕症患者トシテ取扱ハル、途上各駅ニテ国民ノ熱心ナル歡迎ヲ受ケ、糸崎ニテ午食、岡山夕食、可惜須磨明石ノ名勝ハ間ノ間ニ葬ラレ、曉務晴^霧レントスル頃大坂市着

同十五日 大坂市朝食、京都午食、当地ハ偵ガ永ラク帝都タリシ趾ヲ留メ、水山明美白髮ノ老刀自ヨリ紅顔ノ令嬢迄ミヤビテ見ユ、夫レヨリ暫ラクハ見渡ス限リ茶園ナリ宇治茶ノ産地ナラン、琵琶ノ湖畔ニ達スル頃細雨濛々トシテ至リ、比良ノ高根ハ雲ニ包マレ藍ヲ堪ヘシ湖上波静ニシテ二三ノ汽船^{マヤ}ヲ望ム、迷雾屢来リテ八景ヲ見尽シ得サルヲ恨ミトセリ、名古屋ニテ夕食、浜松ノ湖水モ天龍ノ流レモ夢ノ間ニ過ギタリ

同十六日 午前四時頃静岡着、線路ニ故障アリトテ暫ラク停車シ同地ノ有志者ハ蓄音器ヲ奏シテ慰勞セラル、朝食后八時頃漸ク発車、此ノ日伏見宮殿下通過アラセラレタリ、鈴川ニ就ク頃ハ昨日来ノ愁雲次第々々ニ富士ノ根方ニ集マリ其上カラ富士ガ顔ヲ出シテ遙カニ三保ノ松原ヲ睨ム、偵ガ東海道ノ名勝地、此レヨリ爪先上リニテ前后ニ機関車ヲ付ス、旧箱根ヲ右ニ見青野原ヲ左ニ見テ、富士紡績会社ヲ左ニシテ崖ヲ廻リ谷ヲ渡リ、山北停車場ニ着テ漸ク広浩タリ機関車一ヲ除ク、大磯ニテ大休止、水碧リニ沙明カナル

海、崖ニ依リ水ニ監ミシ画楼、到ル所別荘ナリ、伊藤公ノ滄浪閣ハ松林中ヨリ僅カニ尖塔ヲ望ム、沼津ニテ午餐、横浜ニ就ク頃ハ夕照已ニ西ニ輝ク時ニシテ、同市ハ女權ノ提唱地丈ケアリテ婦人方ノ熱心ナル歓迎ヲ受ケタリ、神奈川ニ着ク頃ハ暮色蒼然トシテ、品川湾ヲ掩ヘ砲台附近点々タル漁火ヲ認メ、川崎・品川ヲ経テ新橋着午后八時、想起ス、去年三月モ午后八時ニ意氣揚々トシテ征途ニ上リシモノヲ今ハ孤影蕭々トシテ当時ノ元氣何処ニカアル、真昼ノ如キ電灯モ却テ憂キ想シヌ、夫レヨリ腕車ニテ麻布広尾病院ニ収容セラレタリ

同十七日ヨリ 同病院ニアリテ休養スルコト、ナリ、室附医官及ヒ看病人又親切ナリ、来訪人ニハ聯隊補充隊ノ細川曹長ヲ始メ下宿ノ萩野氏等ニシテ、故郷ヨリモ父君上京セラレタリ、名和様留守宅ヨリモ書生ヲ以テ見舞ハレタリ、自后同病院ニアリテ静養日々快方ニ向カヘ、同廿八日ニ至リ転送患者ノ来院都合ニヨリ医官ヨリ帰郷療養ヲ勸メラル

八月一日ヨリ九月三十日迄 六十日間帰郷療養ヲ許サレ、退院后補充隊ニ至リ各将校及ビ旧战友ニ面会ナシ、隊長殿留守宅ニ至リ一泊ナシ、同二日市中ニ出テ所要ヲ弁シ、同三日汽車ニテ渋谷ヨリ石岡ニ至リ恋瀬屋ニ一泊、翌四日馬ニテ帰郷セリ

此間大ナル世態ノ変遷ハ、米国大統領「ルーズヴェル」氏ノ仲介ニヨリ両交戦国ヨリ講和談判大使ヲ派遣セシコトニテ、会見所ハ米国「ワシントン」附近「ホウツマス」市ニ開カル筈、日本軍別働隊ハ原口中将指揮ノ下ニ樺太嶋ニ上陸、僅カニ旬余ニシテ敵ヲ降伏セシメ全嶋吾ガ日章旗ヲ立テタリ

同四日ヨリ 郷里ニアリシモ、時炎暑ニ候ナルヲ以テ温泉ニ遊ヒ病痾ヲ駆逐セント欲シ

同六日 单身行李ヲ負テ大塚一泊ナシ、翌日馬ニテ福原迄送ラレ、同所ヨリ汽車ニテ小山・前橋・高崎ヲ経テ軽井沢ニ至リ停車場油屋ニ一泊ナシ、翌日馬ヲ雇テ草津温泉ニ達シ静養セリ、宿舎ハ松盛館別荘ニテ同別荘ハ草津温泉中最高所ニアル浴楼ニシテ閑静ナリ、同八日ヨリ翌月三日ニ至ル二十有五日間滞在、此間天候不良、気温非常ニ寒冷ニシテ雨ヲ見サル日ナク、四方ノ情報モ亦同様ナリ、同三日出発馬ニテ沢渡温泉ニ至リ五日間滞入浴、此間米国会見所ニ於テハ両大使談判ノ結果平和成立セリ(談判ノ成績ハ別項ニ記載ス)、内地ニテハ談判ノ成績不良ニシテ屈辱的ナリトナシ、東都ニテハ河野広中氏等主唱トナリテ国民大会ヲ日比谷公園ニ開キ条約破棄ヲ宣言セリ、当時警視庁ガ抑圧手段ノ暴ナリトテ次テ警視庁焼打トナリ、内相官邸ノ焼打トナリ、全市暗黒街

トナリ遂ニ戒嚴令ノ發布トナリ、国民及ヒ警官ニモ多大ノ死傷アリ、同八日発渋川ヲ經テ前橋ヨリ汽車ニテ帰途ニ就キ大塚一泊、九日無事帰村セリ、途上停車場等ハ東京ノ余波ヲ受ケテ地方有志ノ上京ヲ阻止スル為メ袖角巡查警戒セリ

同九日ヨリ 自宅ニアリテ静養スルコト十余日、同廿九日ヲ以テ再ヒ復隊ノ途ニ上リ東京市ニ二泊、当時已ニ大勢ノ動カスベカラサルヲ以テ国民モ亦タ沈静シ、只各市街ノ警察及ヒ交番ハ皆焼却セラレ仮リニ急造セルモ見受ケラル、又各要所々々ニハ検問所アリ、歩兵十余名宛天幕ヲ張りテ警戒スレトモ皆閑ニシテ何トナク間ガ抜ケテ見ユ

同三十一日 午前目黒村ナル補充隊ニ復帰セリ、第二兵舎第六分隊長ヲ命セラレ、身体検査、尚ホ薬用休養ヲ許サレ毎日静養セリ、当時補充隊ニアリテハ昨年入營ノ新兵ト本年三月召集ノ補充兵大数ヲ占メ、教育已ニ成リタリ二年兵ハ大凡戦地ニ補充セラレタリ、戦地還送者皆在リ、共ニ戦況ヲ話シ日ノ短カキヲ覚ユ（解隊ヲ待ツ身ナガラモ）、此間ノ出来事トシテハ、戦地ナル小隊長川辺騎兵中尉殿カ福順店（法庫門東北方）附近ニテ斥侯中名譽ノ戦死ヲ遂ケラレタルト、清水中尉殿ガ熱病ノ為メ異域ノ鬼トナラタルハ最モ惜ム可キ事ニテ、両氏共将来有望ノ好士官ナリ、川辺中尉ハ当日附金鷄章ヲ下附セラレタリ、内地ニテハ在東洋支那艦隊タル英国海軍ハ大将ノ一エル指揮ノ下ニ東京灣ニ来港セリ、此前即チ同九月廿七日ヲ以テ日英同盟発表セラレタリ、条約ノ大体ハ（第一） 韓国ヲ日本ノ保護国ト認メタルコト、（第二） 同盟ノ区域ヲ印度方面迄及ホシ、（第三） 同盟国カ此区域内ニ於テ他ノ一国又ハ数国ト開戦シタル時直ニ相互戦闘ニ従事スルコト、（第四） 同盟期間ヲ倍加シテ十ヶ年トナスコト等ナリ、小村全權大使ハ此ノ混雑間ニ横浜ニ帰港セリ、上陸以来非常ナル警戒ヲナシ入京ノ際ハ騎兵聯隊ヨリ一ケ中隊ヲ護衛トシテ派遣セリ、市民更ニ歡迎セズ嘲笑ヲ以テ迎ヘタリ、此行及日英同盟発表ニ対シテモ市民冷淡ニシテ祝意ヲ表セズ

同十月十六日 官報号外ヲ以テ平和克復ノ詔勅発表セラレタリ（前文別項記載）

同十九日 在内地予后備及ヒ補充兵役ノ古参者ハ解散ノ命令アリ、即刻解散帰郷ヲ命セラル

同日騎兵第一聯隊補充隊ニテモ百二十名ノ解散兵アリ（予備兵ハ三十四年以前召集兵、補充兵ハ三十五年以前適齡兵）

二日間東京市中ニ滞在シ

同廿二日 無事凱旋セリ

最惜可事、高氏共情、未可、望、好、官、一、川、中、射、漢、品、金、錫、章、下、附、言、
 より内地、至、東、洋、又、那、地、隊、を、英、國、海、軍、大、將、一、を、指、揮、下、東、洋、清、
 来、港、を、此、前、即、ち、今、九、月、廿、七、日、以、り、日、英、同、盟、表、を、し、り、條、約、大、体、竟、之、
 韓、國、の、日、本、保、護、國、と、認、め、下、第、三、同、盟、の、区、域、を、訂、度、の、面、迄、と、し、第、三、同、盟、國、
 此、区、域、内、於、他、一、國、又、ハ、數、國、と、開、戦、し、時、互、相、互、に、戰、闘、從、事、と、し、第、四、同、盟、
 期、間、を、俟、た、し、十、年、と、す、下、第、一、小、村、全、權、大、使、に、此、處、雜、聞、を、横、濱、好、港、
 上、陸、以、來、非、常、に、警、戒、を、し、第、三、同、盟、の、騎、兵、隊、を、一、隊、を、護、之、し、り、汎、遣、す、中、兵、
 更、に、歡、迎、を、囀、笑、を、以、り、近、く、此、行、は、日、英、同、盟、表、を、對、し、て、英、民、波、埃、を、祝、意、表、を、し、
 今、十、日、官、報、号、外、以、り、平、和、復、歸、詔、敕、表、を、し、り、（全、文、別、紙、記、載）
 今、十、九、日、在、西、地、子、存、備、を、補、充、せ、從、事、者、有、解、散、を、令、了、町、刻、解、散、野、村、原、に、
 今、日、騎、兵、隊、補、充、隊、を、百、三、十、六、解、散、す、（子、備、兵、八、百、五、十、五、名、前、在、第、一、
 二、間、東、京、市、中、溝、並、に、補、兵、八、百、五、十、五、名、前、在、第、一、
 今、廿、三、日、無、事、凱、旋、す、り、

此ノ記事ハ明治三十七年三月六日ニ始マリ同三十八年十月廿二日ニ終ル
此ノ后チ同十月廿三日ヲ以テ東京湾品川沖ニ於テ海軍ノ大観艦式アリ、捕獲軍艦モ亦タ参与セリ、総数約百七十余艘
別項ニハ日露講和談判顛末並ニ記者ノ在清国目撃シタル卑見ヲ記載ス

日露講和談判始末

明治三十八年六月十日 米国大統領ノ平和勸告書受領

同十三日 日露兩國共ニ談判希望ノ通牒（譯）ヲ米国ニ発セリ

同七月九日 日本国講和全権委員小村寿太郎以下出発

同八月十日 米国「ポーツマス」市ニテ第一回ノ会見ヲナシ

同九月五日 同所ニ於テ日露兩國全権委員ノ記名調印シタル講和条約文左ノ如シ

第一条 日本国帝皇陛下（マ）ト全露西亞国皇帝陛下トノ間及ヒ兩國並ニ兩國臣民ノ間ニ将来平和親睦アルベシ

第二条 露西亞帝国政府ハ日本国ガ韓国ニ於テ政事上軍事上經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ、日本帝国政府ガ韓国ニ於テ必要ト認ムル指導保護監理ノ措置ヲ執ルニ方リ之レヲ阻礙シ又ハ干渉セズ

韓国ニ於ケル露西亞国臣民ハ他ノ外国ノ臣民又ハ人民ト全然同様ニ待遇セラルベク、之レヲ換言スレバ最惠国ノ臣民又ハ人民ト同一ノ地位ニ置カルベキモノトス

兩締約国ハ一切誤解ノ原因ヲ避ケン為メ、露韓間ノ国境ニ於テ露西亞国又ハ韓国ノ領土ノ安全ヲ侵迫スルコトアルベキ何等ノ軍事上措置ヲ執ラサルコトヲ同意ス

第三条 日本国及ヒ露西亞国ハ互ニ左ノ事ヲ約ス

一、本条約ニ附属スル追加條款第一ノ規定ニ從ヘ遼東半嶋租借權ガ其効力ヲ及ホス地域以外ノ滿州ヨリ全然且ツ同時ニ撤兵スル

コト

二、前記地域ヲ除クノ外現ニ日本国又ハ露西亞国ノ軍隊ニ於テ占領シ又ハ其監理ノ下ニアル滿州全部ヲ拳ケテ全然清国專屬ノ行
政ニ還附スルコト

露西亞帝国政府ハ清国ノ主権ヲ侵害シ又ハ機會均等主義ト相容レサル何等ノ領土上利益又ハ優先的若クハ專屬的讓与ヲ滿州ニ於
テ有セサルコトヲ声明ス

第四条 日本国及ヒ露西亞国ハ清国ガ滿州ノ商工業ヲ發達セシメンガ為メ列国ニ共通スル一般ノ措置ヲ執ルニ方リ之レヲ阻礙セサ
ルコトヲ互ニ約ス

第五条 露西亞帝国政府ハ清国ノ承諾ヲ以テ旅順口・大連並ニ其ノ附近ノ領土及ヒ領水ノ借租權^{〔マム〕}及ヒ該租借權ニ關聯シ又ハ其ノ一
部ヲ組成スル一切ノ權利特權及ヒ讓与ヲ日本帝国政府ニ移轉讓渡ス、露西亞帝国政府ハ又前記租借權ガ其ノ効力ヲ及ボス地域ニ於
ケル一切ノ公共營造物及ヒ財産ヲ日本帝国政府ニ移轉讓渡ス

兩締約国ハ前記規定ニカ、ル清国政府ノ承諾ヲ得ベキコトヲ互ニ約ス

日本帝国政府ニ於テハ前記地域内ニ於ケル露西亞国臣民ノ財産權ガ完全ニ尊重セラルベキコトヲ約ス

第六条 露西亞帝国政府ハ長春（寬城子）旅順口間ノ鐵道及ヒ其一切ノ權利^{〔マム〕}、支線並ニ同地方ニ於テ之レニ附屬スル一切ノ權利特權
及ヒ財産、及ヒ同地方ニ於テ該鐵道ニ關シ又ハ其利害^{〔益〕}ノ為メニ經營セラル、一切ノ炭坑ヲ補償ヲ受クルコトナク且ツ清国政府ノ承
諾ヲ得テ日本帝国政府ニ移轉讓渡ス可ヲ約ス

兩締約国ハ前記規定ニ係ル清国政府ノ承諾ヲ得ベキコトヲ互ニ約ス

第七条 日本国及ヒ露西亞国^{〔ハ脱〕}滿州ニ於ケル各自鐵道ヲ全ク商工工業^{〔マム〕}ノ目的ニ限り經營シ決シテ軍略上ノ目的ヲ以テ之レヲ經營セザ
ルコトヲ約ス

該制限ハ遼東半嶋租借權ガ其効力ヲ及ホス地域内ニ於ケル鐵道ニ適用セザルモノト知ル可シ

第八条 日本帝国政府及ヒ露西亞帝国政府ハ交通及ヒ運輸上ヲ増進シ且ツ之レヲ便易ナラシムルノ目的ヲ以テ滿州ニ於ケル其接続

鉄道業務ヲ規定センガ為メ成ル可ク速カニ別約ヲ締結スベシ

第九条 露西亜帝国政府ハ薩哈連島南部及ヒ其附近ニ於ケル一切ノ島嶼並ニ該地方ニ於ケル一切ノ公共營造物及ヒ財産ヲ完全ナル主權ト共ニ永遠日本帝国政府ニ讓与ス、其ノ讓与地域ノ北方境界北緯五十度ト定ム、該地域ノ正確ナル經界線ハ本条約ニ附属スル追加約款第二ノ規定從ヘ之レヲ決定スベシ

日本国及ヒ露西亜国ハ薩哈連嶋及ヒ其附近ノ島嶼ニ於ケル各自領地内ニ保墨其他之レニ類スル軍事上工作物ヲ築造セサルコトヲ互ニ同意ス、又兩國ハ各宗谷海峡及ヒ韃靼海峡ノ自由航海ヲ妨礙〔礙〕スルコトアルベキ何等ノ軍事上措置ヲ取ラサルコトヲ約ス

第十条 日本国ニ讓与セラレタル地域ノ住民タル露西亜国民臣ニ付テハ其不動産ヲ売却シテ本国ニ退去スルノ自由ヲ保留ス、但シ該露西亜国民臣ニ於テ讓与地域ニ在留セント欲スルトキハ日本国ノ法律及ヒ管轄權ニ服従スルコトヲ条件トシテ完全ニ其職業ニ從事シ且ツ財産權ヲ行使スルニ於テ支持保護セラルベシ、日本国ハ政事上又行政上ノ權能ヲ失ヘタル住民ニ對シ前記地域ニ於ケル居住權ヲ撤回シ又ハ之ヲ該地域ヨリ放逐ス可キ充分ノ自由ヲ有ス、但シ日本国ハ前記住民ノ財産權ガ完全ニ尊重セラルベキコトヲ約ス

第十一条 露西亜国ハ日本海・オコーツク海及ヒベーリング海ニ瀕スル露西亜国領地ノ沿岸ニ於ケル漁業權ヲ日本国民ニ許与センガ為メ日本国ト協定ヲナスベキコトヲ約ス

前項ノ約束ハ前記方面ニ於テ已ニ露西亜国又ハ外国ノ臣民ニ属スル所ノ權利ニ影響ヲ及サ、ルコトニ双方同意ス

第十二条 日露通商航海条約ハ戰爭ノ為メ廢止セラレタルヲ以テ日本帝国政府及ヒ露西亜帝国政府ハ現下ノ戰爭以前ニ効力ヲ有シタル条約ヲ基礎トシテ新ニ通商航海条約ヲ締結スル迄ノ間兩國通商關係ノ基礎トシテ相互ニ最惠國ノ地位ニ於ケル待遇ヲ与フルノ方法ヲトルコトヲ約ス、而シテ輸入税並ニ輸出税・税関手続・通過税及ヒ頓税並ニ一方ノ代弁者・臣民及ヒ船舶ニ對スル他ノ一方ノ領土ニ於ケル入國ノ許可及ヒ待遇ハ何レモ前記ノ方法ニヨル

第十三条 本条約實施后成ル可ク速カニ一切ノ俘虜ハ互ニ之レヲ還附スベシ、日本帝国政府及ヒ露西亜帝国政府ハ各俘虜ヲ引受クベキ一名ノ特別委員ヲ任命スベシ、一方ノ政府収容ニカ、ル一切ノ俘虜ハ他ノ一方ノ政府ノ特別委員又ハ正当ニ其委任ヲ受ケタル代

表者ニ於テ之レヲ受領スヘシ、而シテ其ノ引渡シ及ヒ受領ハ引渡国ヨリ予メ受領国委員ニ通知スベキ便宜ノ人員及引渡国ニ於ケル便宜ノ出入地ニ於テ之レヲ行ナフベシ

日本国政府及露西亜国政府ハ俘虜引渡完了ノ后チ成ル可ク速カニ俘虜ノ捕獲又ハ投降ノ日ヨリ死亡又ハ引渡ノ時ニ至ル迄之ガ保護給養ノ為メ各負担シタル直接費用ノ計算書ヲ互ニ出スベシ、同算計書交換ノ后露西亜国ハ成ル可ク速カニ日本国ガ前記支出シタル實際ノ金額ト露西亜国ガ同様支出セル實際ノ金額トノ差異額ヲ日本国ニ払戻スベキコトヲ約ス

第十四条 本条約ハ日本国皇帝陛下ト露西亜国皇帝陛下ニ於テ批准セラルベシ、該批准ハ成ル可ク速カニ且ツ如何ナル場合ニ於テモ本条約調印后五十日以内ニ東京駐劄^天仏国公使及ヒ聖彼得堡駐劄^天米国公使ヲ経テ日本国政府及ヒ露西亜国ニ各之レヲ通告スベシ、而シテ其ノ終ノ通告ノ日ヨリ本条約ハ全部ヲ通シテ完全ノ効力ヲ生ズベシ、正式ノ批准交換ハ成ル可ク速カニ華盛頓ニテ之レヲ行ナフ可シ

第十五条 本条約ハ英吉利文及ヒ仏蘭西文ヲ以テ各ニ通ヲ作り之レニ調印スベシ、其各本文ハ全然符合スト雖モ其解釈ニ差異アルトキハ仏蘭西文ニヨル可シ

右証拠トシテ兩帝国全権委員ハ茲ニ本講和条約ニ記名調印スルモノナリ

明治三十八年九月五日、即チ一千九百〇五年八月二十三日（九月五日）ポーツマスニューハムプシア州ニ於テ之レヲ作ル

外 務 大 臣 従三位勲一等男爵 小村 寿 太郎

米 国 駐 劄 特 命 全 権 公 使 従三位勲一等 高 平 小 五 郎

プレジデント・ホヴ・ゼ・コムミツナー・オヴ・

ミニスータス・オヴ・ゼ・エンハイア・オヴ・セルジウキツテ

ロシア「セクレタリー・オヴ・テスト

米 国 駐 劄 特 命 全 権 公 使 ^天 マスター・オヴ・ゼ・
インピリアル・ロウルト・オウゼ・ロシア男爵

ロウマンローゼン

本日附日本国及ヒ露西亜国間講和条約第三条及ヒ第九条ノ規定ニ從ヘ下名ノ全權委員ハ左ノ追加約款ヲ締結セリ

第一

第三条ニ就キ

日本帝国政府及ヒ露西亜帝国政府ハ同時ニ且ツ講和条約ノ実施后直ニ滿州ノ地域ヨリ各其ノ軍隊ノ撤退ヲ開始スベキコトヲ約ス、而シテ講和条約實施ノ日ヨリ十八ヶ月ノ期間内ニ兩國ノ軍隊ハ遼東半嶋租借地以外ノ滿州ヨリ全然撤退スベシ

前面陣地ヲ占領セル兩國軍隊ハ最先ニ撤退スベシ

兩締約国ハ滿州ニ於ケル各自ノ鉄道線路ヲ保護センガ為メ一キロメートル毎ニ二十五名ヲ超過スルコトヲ得ズ、而シテ日本国及ヒ露西亜国軍司令官ハ前記最大数以内ニ於テ實際必要ニ顧ミ之レニ使用セラル可キ守備兵ノ数ヲ双方ノ合意ヲ以テ成ル可ク少数ニ限定スベシ

滿州ニ於ケル日本国及ヒ露西亜国軍司令官ハ前記ノ原則ニ從ヘ撤退兵ノ細目ヲ協定シ成ルベク速カニ且ツ如何ナル場合ニモ十八ヶ月ヲ超ヘサル期間内ニ撤兵ヲ実行センガ為メ双方ノ合意ヲ以テ必要ナル措置ヲ執ルベシ

第二

第九条ニ付

兩締約国ニ於テ各任命スベキ同数ノ人員ヨリ成ル境界劃定委員ハ本条約實施后成ル可ク速カニ薩哈蓮島ニ於ケル日本国及ヒ露西亜国領地間ノ正確ナル境界ヲ永久ノ方法ヲ以テ實地ニ就キ劃定スベシ、該委員ハ地形ノ許ス限り北緯五十度ヲ以テ境界線トナスコトヲ要ス、若シ何レカノ地点ニ於テ同緯度ヨリ偏倚スルノ必要ヲ認ムルトキハ他ノ地点ニ於ケル対当ノ偏倚ニ倚リテ之レヲ填補ス可シ、該委員ハ讓与中ニ包含セラル、附近ノ島嶼ノ表及ヒ明細書ヲ調製スルノ任ニ当リ、且ツ讓与地域ノ境界ヲ示ス地図ヲ調製シ之レニ署名スベシ、該委員ノ事業ハ兩締約国ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス

前記追加約款ハ其附属スル講和条約ノ批准ト共ニ批准セラレタルモノト見做サルベシ

年月日

兩國全權委員署名調印

右条約ハ九月十四日両国皇帝陛下ノ御批准ヲ了セラル

日韓協約文

此ノ協約ハ日露交戦ノ結果韓国ヲ吾ガ保護ノ下ニ置ク為メ特ニ伊藤大使ヲ韓廷ニ派シ、同国特命全權公使林權助氏ヲ助ケ成立セルモノニテ、韓国駐屯軍長谷川大将モ亦タ与テ力アリ

協約文

日本国政府及ヒ韓国政府ハ両帝国ヲ結合スル利害共通ノ主義ヲ鞏固ナラシメムコトヲ欲シ、韓国富強ノ実ヲ認ムル時ニ至ル迄此ノ目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一条 日本国政府ハ在東京外務省ニヨリ今后韓国ノ外国ニ対スル關係及ヒ事務ヲ監理指揮スベク日本国ノ外交代表者及ヒ領事ハ外国ニ於ケル韓国臣民及利益ヲ保護スベシ

第二条 日本国政府ハ韓国ト他国トノ間ニ存スル條約ノ実行ヲ全スル任ニ當リ、韓国政府ハ今后日本国政府ノ仲介ニヨラズシテ國際的性質ヲ有スル何等ノ條約若クハ約束ヲナサザル事ヲ約ス

第三条 日本国政府ハ其ノ代表者トシテ韓国皇帝陛下ノ闕下ニ一名ノ統監（レジデント・ゼネラル）ヲ置ク、統監ハ専ラ外交ニ關スル事項ヲ監理スル為メ京城ニ駐在シ親シク韓国皇帝陛下ニ内謁スル權利ヲ有ス、日本国政府ハ又韓国ノ各開市開港場及ヒ其他日本

国政府ノ必要ト認ムル地ニ理事官（レジデント）ヲ置クノ權利ヲ有ス、理事官ハ統監指揮下ニ従来在韓国日本領事ニ屬シタル一切ノ職權ヲ執行シ並ニ本協約ノ條款ヲ完全ニ実行スル為メ必要トスベキ一切ノ事務ヲ監理スベシ

第四条 日本国ト韓国トノ間ニ現存スル約束ハ本協約ノ條款ニ抵触セザル限り總テ其効力ヲ繼續スルモノトス

第五条 日本国政府ハ韓国皇室ノ安寧ト尊嚴ヲ維持スルコトヲ保証ス

右証拠トシテ下名ハ各本国政府ヨリ相当ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スル者ナリ

明治三十八年十一月十七日

光武九年十一月十七日

本協約締結ノ后援トシテ満州軍ノ一部ヲ朝鮮国ニ分派セリ

韓国ニ在リテハ二三ノ名望家時勢ヲ憤慨シテ薬ヲ仰テ自殺セシモノアリシ而已、吾ガ警戒ノ嚴ナル為メ何等ノ暴動ヲ見ズ

特命全權公使 林 権 助

外部 大臣 朴 斉 純

日清条約全文

第一条 清国政府ハ露国ガ日露講和条約第五条及ヒ第六条ニヨリ日本国政府ニ対シテ為シタル一切ノ讓渡ヲ承諾ス

第二条 日本国政府ハ清露両国間ニ締結セラレタル租借地並ニ鉄道敷設ニ関スル現条約ニ対シ勉メテ遵行スベキコトヲ承諾ス、将来

何等案件ノ生シタル場合ニハ随時清国政府ト協議ノ上之レヲ定ムベシ

第三条 本条約ハ調印ノ日ヨリ効力ヲ生ズベク且ツ大日本国皇帝陛下及ヒ大清国皇帝陛下ニ於テ之ヲ批准^[准]セラルベシ、該批准書ハ本

条約調印ノ日ヨリ二箇月以内ニ成ルベク速カニ北京ニ於テ之レヲ交換スベシ

右証拠トシテ兩國全權委員ハ日本文及ヒ漢文ヲ以テ作ラレタル各二通ノ本条約ニ署名調印スルモノトス

明治三十八年十二月二十二日即チ、光緒三十一年十一月廿六日 北京ニ於テ之レヲ作ル

特派全權大使 小村寿太郎
外務 大臣

特命全權公使 内田 康哉

欽差全權大臣 慶 親 王

欽差全權大臣 瞿 鴻 機^[機]

欽差全權大臣 袁 世 凱

附屬條約

日清兩國政府ハ滿洲ニ於テ双方共ニ關係ヲ有スル左ノ事項ヲ決定シ以テ遵守ニ便ナラシムル為メ左ノ條項ヲ協定セリ

第一條 清国政府ハ日露兩國軍隊撤退ノ后成ルベク速カニ外国人ノ居住及ヒ貿易ノタメ自ラ進ミテ滿洲ニ於ケル左ノ都市ヲ開クベキコトヲ約ス

盛京省 鳳凰城、遼陽、新民屯、鉄嶺、通江子、法庫門

吉林省 長春(寛城子)、吉林、哈爾賓、寧古塔、琿春、三姓

黒龍江省 齊々哈爾、海拉爾、愛琿、滿洲里

第二條 清国政府ハ滿洲ニ於ケル日露兩國軍隊並ニ鉄道守備隊ノ成ルベク速カニ撤退セラレンコトヲ切望スル旨言明シタルヲ以テ、日本国政府ハ清国政府ノ希望ニ応センコトヲ欲シ、若シ露国ニ於テ其鉄道守備兵ノ撤退ヲ承諾スルカ或ハ清露兩國間ニ別ニ穩当ナル方法ヲ協定シタル時ハ日本政府モ同様ニ照弁スベキ事ヲ承諾ス、若シ滿洲地方平靖ニ歸シ外国人ノ生命財産ヲ清国自ラ完全ニ保護シ得ルニ至リタル時ハ日本国モ亦タ露国ト共ニ鉄道守備兵ヲ撤退スベシ

第三條 日本国政府ハ滿洲ニ於テ撤兵ヲ了シタル地方ハ直ニ之レヲ清国政府通知スベク、清国政府ハ日露講和條約々款ニ規定セル撤兵期間内ト雖モ已ニ上記ノ如ク撤兵完了ノ通知ヲ得タル各地方ニハ自ラ其ノ安寧秩序ヲ維持スル為メ必要ノ軍隊ヲ派遣スルコトヲ得ルモノトス、日本国軍隊ノ未タ撤退セサル地方ニ於テ若シ土匪ノ村落ヲ擾害スルモノアル時ハ清国地方官モ亦タ兵隊ヲ派遣シ之レヲ剿捕スルコトヲ得、但シ日本軍隊ノ駐屯地界ヨリ二十清里以内ニ進入スルコトヲ得サルモノトス

第四條 日本国政府ハ軍事上ノ必要ニヨリ滿洲ニ於テ占領又ハ收容セル清国公私財産ハ撤兵ノ際悉ク清国官民ニ還附スルコトヲ承諾ス、又不用ニ歸スルモノハ撤兵前ト雖モ之レヲ還附スルモノトス

第五條 清国政府ハ滿洲ニ於ケル日本軍戦死者ノ墳墓及ヒ忠魂碑所在地ハ完全ニ保護スル為メ總テ必要ノ所置ヲ採ルベキコトヲ約ス

第六條 清国政府ハ安東県奉天間ニ敷設セル軍用鉄道ヲ日本国政府ニ於テ各国商工業ノ貨物運搬用ニ改メ引続キ經營スルコトヲ承

諾ス、該鉄道ハ改良工事完成ノ日ヨリ起算シ(但シ軍隊送還ノ為メ遅延スベキ期間十二箇月ヲ除キ二ケ年ヲ以テ改良工事完成ノ期間トス)拾五ケ年ヲ以テ期限トナシ即チ光緒四拾九年ニ至リテ休ム、右期間ニ至ラバ双方ニ於テ他國ノ評価人一名ヲ選ヒ該鉄道ノ各物件ヲ評価セシメ清國ニ売渡スベシ、其売渡前ニアリテ清國政府ノ軍隊並ニ兵器糧食ヲ輸送スル場合ニハ東清鐵道條約ニ準拠シテ取扱ベク、又該鐵道改良ノ方法ニ至リテハ日本國ノ經營担当者ニ於テ清國ヨリ特派スル委員ト切實ニ商議スルモノトス、該鐵道ニ関スル事務ハ東清鐵道條約ニ準シ清國政府ヨリ委員ヲ派シ查察經理セシムベク、又該鐵道ニ関スル清國公私貨物ヲ運搬スル運賃ニ関シテハ別ニ詳細ナル規定ヲ設クベキモノトス

第七條 日清兩國政府ハ交通運輸ヲ増進シ且ツ之レヲ便易ナラシムル目的ヲ以テ南滿洲鐵道ト清國各鐵道トノ接続業務ヲ規定センガ為メ成ルベク速カニ別約締結スベシ

第八條 清國政府ハ南滿洲鐵道ニ要スル諸般ノ材料シ各種ノ税金及ヒ釐金ヲ免スベキコトヲ承諾ス

第九條 盛京省內ニ於テ已ニ通商場ヲ開設シタル營口及ヒ通商場ト為スベク約定シアルモ、未タ開カレサル安東縣並ニ奉天府各地方ニ於テ日本居留地ヲ劃定スル方法ハ日清兩國官吏ニ於テ別ニ協議決定スベシ

第十條 清國政府ハ日清合同材木会社ヲ設立シ鴨綠江右岸地方ニ於テ森林裁伐ニ從事スルコト、其地域ノ広狭ノ年限ノ長短及ヒ会社設立ノ方法並ニ共同經營ニ関スル一切ノ章程ハ別ニ詳細ナル約束ヲ取極ムベキコトヲ承諾ス、日清兩國株主ノ利權ハ均等分配ヲ期スベシ

第十一條 滿韓國境貿易ニ関シテハ相互ニ最惠國ノ待遇ヲ与フベキモノトス

第十二條 日清兩國政府ハ本日調印シタル條約及ヒ附屬協約ノ各條ニ記載セル一切ノ事項ニ関シ相互ニ最優ノ待遇ヲ与フルコトヲ承諾ス

本條約ハ調印ノ日ヨリ効力ヲ生スベク、且ツ本日調印ノ條約批准セラレタル時ハ本協約モ亦タ同時ニ批准セラレタルモノト看做スベシ

右証拠トシテ下名ハ各其ノ本國政府ヨリ相当ノ委任ヲ受ケ日本文及ヒ漢文ヲ以テ作ラレタル各ニ通ノ本協約ニ記名調印スルモノ

ナリ

明治三十八年十二月二十二日、即チ光緒三十一年十一月二十六日

北京ニ於テ之レヲ作ル

各全権記名調印

明治四拾年七月海牙ニ開カレタル万国平和會議ニ、吾カ保護国タル朝鮮国王ガ密使ヲ派シ独立国タルヲ以テ發言權ヲ認メラレンコトヲ提言セル怪事起リ、吾ガ当局ヨリハ權利ヲ侵害セラタル者トナシ尚ホ保護權ヲ確實センタメ統監ヲシテ談判ヲ開始セシム、時ノ朝鮮国総理大臣李完用皇帝ニ苦諫シ退隱セシメ新皇帝ヲ冊立シ更ニ新協約ヲ締結セリ、此ノ事件ニ開シ同国内ニ暴徒起リ吾ガ同胞十数名ノ横死アリ、同地守備軍並ニ本国ヨリ歩兵一旅団ヲ増派セリ

日韓協約

日本国政府及ヒ朝鮮国政府ハ速カニ韓国ノ富強ヲ図リ韓国民ノ幸福ヲ増進セントルノ目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セリ

第一条 韓国政府ハ施政改善ニ関シ統監ノ指導ヲ受クルコト

第二条 朝鮮国政府ノ法令ノ制定及重要ナル行政上ノ所分ハ予メ統監ノ承認ヲ經ルコト

第三条 韓国ノ司法事務ハ普通行政事務ト之レヲ區別スルコト

第四条 韓国高等官吏ノ任免ハ統監ノ同意ヲ以テ之レヲ行フコト

以下旅順概略ノ次ニ記ス

清国所見

地勢 遼東半島ノ地ハ一帯ニ山岳臥起シ其間ヲ縫テ多少平坦ノ地アリ、概シテ東方ニ山地多ク西部ハ開闊セリ、港湾モ亦タ東面水深

ク西面ハ遠浅ナリ、土地ハ大概礫确ニシテ山岳樹木ヲ生セズ、夫ノ耕地タル分モ岩石交リノ赤塵ニシテ宮城子附近ノ地僅カニ良耕地タリ、港湾ヲ形成スルハ西部ニ金州湾・双島湾・鳩湾、東部ニハ大連ノ良港アリ、南面旅順口アリ、前三者ハ皆水深浅クシテ船舶ノ宿泊ニ適セズ、大連ニハ青泥崖ノ大築港アリ

満州ノ地ハ悉ク涉獵セズト雖モ東清鉄道ノ縦貫セル地帯ヨリ東方山岳ノ起伏常ナク西部ハ一望千里開闊地ナリ、土質ハ一般ニ非常ニ細末ニシテ粘液ヲ有スル灰色ノ土ニシテ又細砂ヲ含有スルモノモアリ、非常ノ良土質ナラズト雖モ耕地ニ堪ヘベシ

河川ハ半嶋ニアリテハ殆ト絶無、満州ニアリテハ遼河・渾河・太子河・蓋平河・熊岳河等アリ、船舶ノ交通自在ナルハ遼河・渾河・太子河ニシ、河水常ニ泥レリ、結氷期ハ十一月下旬解氷期ハ四月上旬ナリ、其他半嶋及ヒ本土ニモ小川数多アリト雖モ、平時ハ枯渴シテ道路ノ代理ヲナスモ、降雨期ニ至レバ大雨連旬ノ為メニ道路変シテ泥浪滔々タル河川トナル、殊ニ降雨ニ連レテ出水ノ速ナルハ山岳丘陵ノ赤裸ナル為メ水勢ノ低ニ就ク勢尤モ烈シク河原中ニ安然幕営シテ杭頭忽チ洪水ニ浸サル、コトアリ、高地斜面等ニハ到処断絶地ヲ生シ懸崖数十丈ナルモアリ、遼河・太子河・渾河ノ合シテ海ニ注ク河口ニ營口アリ中外ノ交易場ナリ

氣候 ハ暑寒ノ二ニ大別セラレ、暖冷ノ良候至テ少ナシ、四時風勢ノ絶ユルトキナク夏季僅カニ微ナリ、降雨ハ夏季七八月頃ニ限ラレ十月ヨリ四月ニ至ル間ハ殆ト降雨ヲ見ズ、春冬ノ二節尤モ風勢烈シク土地モ亦タ乾燥セル為メ砂塵常ニ飛揚ス、冬期ハ気温〇度下二十度ニ達スル珍ラシカラズ、乍然比較的降雪ヲ見ズ、春季ニ至リテ稍々大雪アリ、冬期ノ雪ハ細粉ニシテ春雪ハ結晶体ヲ形成セリ、蓋シ冬期ハ土地ノ乾燥甚ダシキ為メ水蒸氣少ナク春季ハ漸次地上ノ氷解スルニ連レテ水蒸氣多キ故ニヨルナラン、冬期ハ地上二三寸ハ乾燥シテ灰ノ如キ土ナリト雖モ其レ以下ハ四五尺ノ深キ尚凍結セリ、降雨期ニ至レバ連旬絶ヘズ粘液ヲ有セル土質ハ忽チ道路ノ泥濘ヲ来タシ人馬歩行ニ困難車輛モ亦タ半輪ヲ没却シテ挽引スベカラズ、降雨期后ノ暑氣ハ又角別ニテ乾粉土尺余ニ達シ日光ノ直射中々烈シク往々行軍途上日射病ニカ、ルコトアリ、冬期ハ河川沼淖渾テ凍結シテ自在ニ行動シ得ベク氷ノ厚サ数尺ニ達ス、夜間河辺ニ舎營スルトキハ非常ナル音響ヲ聞ク、之レ氷ノ龜裂セルニテ数間ニ達ス、尚ホ徒渉自在ナリ、之レ地熱ノ發生ニ連レテ破裂セルニハ非ルカ、冬期結氷后ハ河水静明ニシテ井水ノ不良ナルニ勝ル、土人ハ河上ニ氷ヲ破リテ毎日河井ヲ造ル、北風ハ常ニ絶ヘズ吐息ハ忽チニシテ氷結シ鬚鼻口尚ホ氷結シ馬尾等ノ凝氷ハ常ニ絶ヘズ

植物 農作物ニハ遼東半嶋ニアリテハ唐黍ヲ重ナルモノトシ満州ニアリテハ高粱ヲ主トス、次ニハ大小豆・粟・小麦・陸稻、半嶋ニアリテハ馬鈴薯・甘薯、蔬菜類ニハ葱・菜ヲ重ナルモノトシ黄瓜・西瓜・茄子等モアリ、葱肉ハ彼等ガ伝染病予防ノ良法トシテ常ニ服食セリ

樹木ニアリテハ楊柳全般ヲ通シテ重ナルモノニシテ其他榆樹・松・柵等モ稀レニ見受ケラル、又菓実木トシテハ^{〔舎カ〕}杲子・梨子・夏目等ナリ、梅樹モ多少アリ

動物 牛馬ヲ主トシ野牛・騾馬・面羊・豚等ニシテ、牛馬ハ通常ノ家ニハ少ナクモ四五頭アリ多キハ三四十頭ニ及ブ、諸般ノ作動皆之レ等ノ動物ノ力ニヨリテナル、野牛・面羊・豚等ハ皮及ヒ肉ヲ用ユル為メ飼養セラレ、野牛・面羊等ハ昼間飼養者之レヲ引率シテ山野^{〔道〕}祥遙シ青草ヲ食マシメ各自ニ食ヲ取ラシム、夕刻ニ至レバ又引率シテ小舎ニ入ラシム、彼レ等ハ能ク引率者ノ言色ヲ解シ能ク一所ニアリテ奔逸セズ、豚モ亦タ日本ノ如ク小屋ニ而已入レ置カズ時々放シテ食ヲ求メシム、之レ又家ヲ忘レズ到处ニ不潔ノ食ヲ得テ再ヒ己レノ住家ニ入ル故ニ一家能ク十余頭ヲ飼フ、飼料ハ高粱ノ糟糠ヲ煮沸シテ与フ、鶏・犬又各家ニ養ワレ犬ハ如何ナル家ニモアリ、富家ニハ六七頭ヲ養フ、犬ハ行政不完全ナル清土ニアリテハ一ノ警備者タリ、鶏モ亦タ多数養ワレ重ニ鶏卵ヲ取りテ經濟ニ資セリ、両者共屋外ニ小舎ヲ造リ与ヘラル、牛馬・騾馬ハ耕耘・運送ニ用ユラレ常食トシテハ粟稈・唐黍稈・陸稻藁ヲ少断セシニ少量ノ高粱・豆粕ヲ用ユ、貧家ニハ屋外ニ繋留セラル冬期霜雪ヲ浴ヒテ寒風ニ立ち更ニ哀ヘス、一般清人ハ動物ヲ以テ勞動ヲ助ケルニ熟練シ音声ヲ以テ之レヲ行使スルニ不使ヲ感セズ手足ヲ用ユルニ等シ、面羊・野牛等ハ毛皮ヲ以テ防寒用ニ供ス

野鳥ニハ鳥アリ日本ノ鳥ヨリ少ナリ、其他小鳥等モ種々アリテ識別スル能ハズ、春季ニハ過雁ノ落下スルコトアリ、海辺ニハ岩鳩・海鳥・白鳥等アリ、岩鳩ハ純白ナル羽色ニシテ海岸ノ岩石間ニ棲息群ヲナシテ飛ブ、日本ノ鳩ニ比シテ小ナリ、鳥ト称スルモノハ尾長鳥ノ類ニシテ人ニ驚カズ、豚ノ背ナドニ止マリテ戯レヨルヲ見ル、最厭フベキハ蠅ニシテ夏季ニ至レバ非常ニ発生シ食物等ニ被布ナキトキハ忽チニシテ黒団トナル程ニ集合ス、冬期ニ近レバ飛行自由ヲ失シ^{〔マム〕}ノ附近天井等ニ附着シ下ニテ火ヲ焼キテ暖氣ヲナセバ紛々トシテ落ち来リ釜中ニ入ル、余程注意セサレバ蒼蠅ノダシ汁ヲ出来スルコトアリ、性来不潔ナル土人ハ更ニ意ニ会セズ、次ハ南京虫(床虫)ニシテ旧キ家屋ニハ尤モ甚ダシク棲息シ昼間ハ壁・用材等ノ干割目ニ潜伏シ夜間ニ至レバ出て来リテ皮膚ヲ


刺激シ疼痛瘡痒ヲ感ス、重ニ頸部・足部等ヲ刺シ人ニヨリテハ非常ニ湖張シ〔駭カ〕為メニ汚寒ヲ感シ運動ヲ廃スルニ至ル、赤色ニテ亀形ヲナセル小虫ニシテ昼間ノ行動甚タ緩慢ナリト雖モ夜間ノ行動非常ニ迅速ナリ、蚊ハ猖獗期間甚タ少ナシト雖モ中々猛烈ナリ、七月下旬ヨリ八月上旬ニ及ブ、蚤ハ余リ甚ダシカラザレトモ虱ハ実ニ名物ナリ、土人ニ就テ檢スレバ凡ソ虱ノ附着セザルナク、或ル時器物ニ虱ヲ拾ヒ取り集メタルヲ見タリシガ実ニ驚ク許リナリ、兵士間ニ於テモ亦タ此ノ襲撃ヲ受ケサルモノナク屢々戦役閑余ニハ必ズ被服釜煮ノ総攻撃ヲ実行スレトモ兩三日ナラズシテ忽チ逆襲ヲ受ケ襟元及ヒ蔭部附近ニ瘡痒ヲ感スルニ至ル、上將校スラ尚半風子〔マヤ〕子ノ御見舞ヲ受ケサルナク、彼ノ王猛ガ虱ヲ捫リテ当世ノ勤ヲ談ゼストモ虱ヲ捫リテ戦局ヲ談スル的好將軍ヲ現出スルヤ必セリ

土人 奉天・遼陽・營口等ノ人民ハ稍文明ノ流液ヲ吸収シテ風俗等モ甚ダシク劣等ナラズト雖モ、普通民間ノ風俗人情等ニ至リテハ実ニ劣等ニシテ夫ノ生活ノ度モ亦タ非常ニ低シ、一般人情ニ就テ考察スルニ更ニ国家的觀念ナク、故ニ公益事業ヲ發達スル等ノ事更ニナク、道路ハ雨季不良ニ陥ルノ一即〔節〕ニ及バ道路モ亦タ水田ノ如クナルニ連レ兩側畑地ニ新ナル道ヲ造リ漸次如此有様ニテ、夫ノ道幅五六十間ニ及ブモ敢テ道路ヲ修理シテ耕地ヲ助ケントスル志ナキハ勿論、己ガ日常往來スル道路ノ泥濘車輪ヲ没シ非常ニ困苦ヲ嘗メテモ平然、河川等モ同様、遼河ノ如キモ水流ノ好ム儘ニナシ置クニヨリ曲折常ナク或ル所ハ非常ニ水深ヲ有スルモ或ル所ハ船底ノ膠着スル所アル有様ニテ、水運ノ便不便アル而已ナラズ兩岸ノ地域モ亦タ水ノ流失ニ任ス、人情ハ又保守主義ナレトモ己レヲ節シテ人ヲ利スル様ナル美德ニ乏シク非常ナル利己主義ニテ其僻口ニハ德義ヲ重スル様ナル言ノミ、概シテ人口ハ男多クシテ女少ナシ、故ニ終身妻帯セサルモノ滿州地方等ニテ八十中ノ三以上ナラント察セラル、現ニ土地ニ生活スル者而已ニテモ尚ホ多数ヲ認ム、而シテ凡ソ世上ニ他国ニ出テ勞動ニ伏スルモノハ清国人最大数ナリト言フニ徴シテモ察スルニ足ル、故ニ女權盛ニシテ重ニ妻君ニ願使セラレ男而已耕作等ニ従事シ婦ハ常ニ家ニアリテ己レノ好ム業ヲナシ、其ノ他出ノ際ノ如キモ夫ハ荷物ヲ負ワセラレテ跡ニ從ヘ婦ハ傲然トシテ先頭ニ立チ歩ムヲ常トセリ、詳細之レヲ區別スレバ左ノ如クナラン

性質 重ニ怠惰ナリト雖モ拜金宗ニシテ金錢ノ為メニハ生命ヲ堵スルモノ多ク、即チ日探トナリテ敵地ニ入ルモノ露探トナリテ吾ガ占領地方ニ來ルモノ皆更ニ国家的トカ又ハ名譽ノ為メ義ノ為メ等ニナスモノ少ナシ、故ニ吾ガ軍謀報部ニテモ常ニ情報ノ如何ニヨ

リテ賞金ノ額ヲ高低スル規定トセリ、又如何ニ拜金宗ナルカハ、彼レ等ガ露探トナリテ吾ガ陣地附近ニ来リ捕ワレテ斬ニ所セラ
 ル、モ、尚ホ金錢ノ為メニ捨テタル此身更ニ惜カラズ吾ガ身死セバ家族ハ露国ノ庇護ノ下裕々生活シ得ルモノト思考シ、更ニ悪ビ
 レタル動作ヲナサズシテ刑ヲ受クモノ少ナカラズ、憐レ此レ程ノ決心ヲ国家的ニ使用セバ如何ニ頼母シカラン、而モ其ノ楽トスル
 所異ニシテ僅カニ百金二百金ノ為メ性命ヲ堵シ将来ノ発達ヲ謀ルノ念慮ニ乏シク、結局彼レ等ノ怠慢ナル根性ニハ一挙ニ暴利ヲ得
 テ后来ヲ安楽愉快ニ暮ラサント云フ一ノ拜金宗ナリ、故ニ中々横着心深ク強ヲ避ケ弱ヲ挫クノ精心ニテ、吾ガ軍舎營セル時ナド
 モ余リ寛仁ニ過クレバ増長シ物品ノ如キモ不当ノ価格ニテ売却セントシ時々一挙ヲ頭上ニ見舞ヘテ理非ヲ説ケバ彼レ忽チ軟化ス
 ルヲ常トセリ、夫ノ智識等モ発達ノ期概シテ遅ク夫ノ影響ニヤ身体ノ發育モ亦タ遅ク、二十歳ニナル頃迄ハ日本ノ十四五歳トシカ
 見受ケラレズ身長モ亦タ同様短小ナリ、而シテ三十歳以上ノ者ヲ比較スルニ優ニ六尺ヲ算スルモノ珍シカラズ概シテ日本人ヨリ大
 ナリ、口ニ而已道徳ヲ唱ヘテモ夫ノ行ノ非ナルハ、吾ガ軍所用ニヨリテ物資ノ徵発等ニ至レバ現ニ自家ニアリナガラモ尚ホ無シト
 言ヘ隣家ニハ在ル旨ヲ告グ、夫ノ僻一挙ヲ見舞レバ直チニ出シテ応ズルニテモ知ラル、彼レ等ノ一徳トスル所ハ粗食シテ尚ホ過度
 ノ労働ヲ辞セサルニテ、之レ他ニ出テ、労働ニ服シ居ルモ成効シ得ル原因ナリ、女ハ同様非常ナル保守主義ニテ男女七歳ニシテ席
 ヲ同セズノ格言ヲ服膺シ、他国人ナドニ接シ面語スル等ヲ嫌ヘ皆日本兵ヲ見テハ逃避セリ、同一家屋ニ起居スル月余ニ及ブモ尚
 ホ妙齡ノ処女等ハ軽々シク外出セズ、更ニ耕作等ニ従事セズト雖モ縫泊^{〔縫〕}ニハ妙ヲ得風景人物花草皆各種ノ色糸ヲ以テ随意ニナル

風俗 風俗ハ各都市ニアリテハ見ルベキモノアリト雖モ民家等ニ至リテハ見ルニ堪ヘズ、民家ニアリテハ衣服ノ地質ハ木綿ニテ皆淺
 黄色ノ無地ナリ、而シテ洗濯等ハ一年ニ一回位ニシテ垢ハ常ニ襟元肩先ニ光輝ヲ放チ、筒袖ハ永クシテ冬期防寒ニ適ス、上衣下衣
 アリ、上衣ノ長キハ踵ニ達スルアリ、短カキハ僅カニ臀部ヲ掩フ而已、下衣ハ袴的ニ出来居リ下部ハ紐ヲ以テ括ルナリ、冬期ハ前
 方而已アリテ膝ヨリ上后方ナキ綿入袴ヲ佩ク、内地ノ女小兒ニ穿タシムル股引ニ似タルモノナリ、前方上部ハ紐ニテ釣ルナリ、一
 般ニ靴ヲ穿チ畑地ニ出テ耘作スルモ尚ホ同様ナリ、相互ノ礼法ハ両手ヲ袖中ニ合シ前額辺ニ上下スル最敬礼ニシテ、大抵右手ヲ膝
 ニ置キテ左膝ヲ立テ、右膝ヲ折ルナリ、女モ同様筒袖ノ稍広キヲ用ユ、襟元袖口等ニハ縫箔ヲナシタルモノヲ着シ下衣ハ同様ナリ、
 男ハ皆頭部中央ニ皿大ノ長髪ヲ残シ末端紐ヲ加ハヘテアミ、紐ノ下部ハ総テ付ス長キヲ美且ツ貴シトナス、女ハ少時ハ総髪ヲ編ミ

テ垂シ嫁入シタル后ハ髪ヲ結フ、其形状種々アリテ説明ニ苦ムト雖モ夫ノ大凡ノ婦ハ丸髻形ノ巾狭キ腰ノ高キ様ナル針金ニテ造ラレタル形ヲ入レテ結ヒプリキ製ノ笄ヲ挿シ居レリ、髪ヲ編ム紐ハ男ニアリテハ黒ク女ニアリテハ赤シ、都市ニ在リテハ年老ヘタル婦人ノ尚ホ美麗ナル花簪シヲ挿シ居ヲ見ル、又男子ニアリテハ四十八歳始メテ鼻下ノ髭ヲ蓄ヘ六十歳ニシテ腮ニ髭ヲ蓄フ、夫ノ以前ノ者一切髭髻ヲ蓄ヘズ、女ハ中老ニ及ヒ始メテ眉ヲ去ル、結髪ニモ束髮形ナルモアリ、最モ異様ナルハ「シヤボテン」形ノ楕円長方形ナルヲ三個頭上ニ並立セシメタルニテ ノ様ナル形ニテ風除ケニ適當ナルモノナリ、入浴等ハ都市ニアリテハ湯屋アリト雖モ部落等ハ一切ナク皆入浴セズ、乍然一般遼東ヨリハ滿州ノ地稍佳ナリ

生活 生活ノ度ハ一般ニ低クシテ、常食ハ遼東ニアリテハ唐黍・粟・稗等ニシテ重ニ唐黍ヲ用ユ、唐黍ハ粉トシ湯ニテ鍊リ釜ニテ蒸シタルモノヲ更ニ緩キ粥トナシテ食スルニテ殆ト水粥ノ如シ、故ニ労働セサル少女モ尚ホ大椀ニテ五六杯ヲ傾ケ尽ス、副食ハ菜・葱・赤大根等ニシテ皆生ニテ味噌ヲ付ケテ食ス、味噌ハ屋外ノ瓶ニ蓄ヘラレ被ハ高粱稗ニテ編ミタルモノナレバ土塵ハ自由ニ侵入シ得夏季ニ至レバ瓶内「ウジ」ヲ生ス、日光ノ熱度烈シキニ塩分少ナキ為メナラン、婦人ハ箸ニテ虫ヲ捨ヘ拾テ平氣ニテ食シ居レリ、又小豆ヲ蒸シテ発芽セシメ夫ノ五六寸ニ至リシヲ生ニテ食セリ、彼レ等ノ美食トシテハ小豆ヨリ製セル「トコロテン」ニ似タルモノ油ニテ煮「ニンニク」ヲ加ハハ僅カニ塩氣ヲ付シタルニテ一見嘔吐ヲ催スバカリナリ、滿州地方ハ重ナル食事ハ高粱ニテ、高粱ヲ石臼ニテ磨擦シテ糠皮ヲ去リ煮沸ナシテ水ヲ去リ瓶中ニ入レテ蒸シタルモノニテ、之レハ吾人ニモ食シ得ラル甘味ヲ帯ヒテ内地ニテ食スル時ヨリハ渥味ナシ、副食ハ大抵同様ナリ、一般ニ豚肉・馬肉・牛肉等渾テ油氣ノ多キモノニテ塩分ノ少ナキヲ好ム、被服類トテモ別ニ外出ノ服装、耕作ノ衣、休養ノ際衣等別ニナク皆同一ナリ、耳目ヲ娛マシムル者トテハ更ニナク一生只食ト衣ノ為メニ労働セリ、而シテ衣食モ亦タ充分ナラズ、真ニ日出而作日入而息、耕田食鑿并飲、敝褐依然又值春、的ノ生活ヲナシ居レリ、故ニ客来ルモ更ニ食ヲ美ニシテ供セズ、新年ト雖モ旧衣ヲ着テ僅カニ市上ニ去リテ半斤ノ肉ヲ買ヘ来リテ一家十口ノ食膳ニ供スル而已、大家ニアリテハ又角別ニテ新春ニハ神明ヲ祭ルガ為メニ豚ヲ殺シ牛ヲ割テ神前ニ供ナヘ致酒新春ヲ祝ス、神ハ名付ケテ財督府ト云フ、最モ不可ナルハ衛生ニ注意セザルコトニテ、滿州ノ都市尚ホ且ツ隨所ニ大小便ヲナシ別ニ便所ヲ作ラズ、地物ノ蔭家屋ノ背后等ハ彼レ等ノ好便所タリ、尤モ異トスベキハ遼東ノ野ハ一般滿州ニ比シ野卑ナルニ似ズ便所丈ケハ不完全ナガラモ家屋ノ背

后等二地上ヲ穿チテ造リ置ケリ、之レハ遼東半嶋ヨリ嘗テ日清役ノ吾ガ軍ノ駐屯セシ地点而已ナル様子ナレバ吾ガ軍ノ構造セシヲ見テ造リシナラン、入浴等ハ一切ナサズ只ニ顔手足等ヲ洗淨スル而已、大便后ノ静潔方法ハ高粱ノ稗ヲ五六寸ニ切りタルモノヲ予メ造リ置キ使用スル時ハ之レヲ割キテ掬ヘ取りタル而已、土人ハ一般ニ烟草ヲ好ミ又阿片ヲ吸フ、婦人ト雖モ大抵ハ喫烟セリ、烟管ハ三尺近キ長キヲ用ヘ婦人等ハ外出常ニ之レヲ離タズ、又水烟台ト称スルモノアリ



図ノ如クニシテ下部ニ水ヲ蓄

ヘ烟草ノ烟ハ水中ヲ潜リテ口中ニ来ルノ仕掛ケナリ、之レ支那烟草ハ非常ニ咽喉ニ当ル為メナラン、都市ニアリテハ多少目ヲ喜バシムルモノモアリ、即チ演劇ニテ異様ノ服装ヲナシ鐘太鼓ヲ非常ニ打チ敲キ舞ヘ踊ルナリ、湯屋アリ、一浴五錢ハ通常入浴ニテ非常ニ浅キ湯槽ナリ、上等ハ拾錢之レハ一人毎ニ一浴室ヲ給セラレ浴水モ亦夕新ナルモノナリ、湯槽ハ日本御丸形ノ大ナルモノ、冬期ト雖モ室内ノ温度ヲ高メ置クニヨリ寒氣ヲ覺ヘズ、湯屋ニハ又理髮所・爪切所等アリ、理髮代拾錢（但シ清人）爪取り一人前拾五錢、其高価ナル驚ク許リナリ、之レハ砥草ニテ磨リヘラスナリ、商店ニ於ケル諸物価ハ比較的高価ナリ、豚肉等ハ一斤価三十五六錢ニテ豚一頭ハ値ヘ廿円余ニ及ブ、絹布木綿類渾テ高値ナリ、故ニ彼レ等農民ハ一生労働スルモノ新衣ヲ着テ美食ニ飽クノ時ナクシテ終ル、蓋シ交通機関ノ設備全カラズ、為メニ殊ニ輸入品ハ高貴ニシテ唯一ノ輸出品タル穀類ナドハ格安ナリ、室内ノ日用器具等モ別ニ賓客用トシテ備フルコトナク単ニ日常使用スルモノ、而已、食器トシテハ陶器ヲ用ユ椀・皿等ハ勿論飯櫃モ亦大ナル瀬戸鉢ヲ用ユ、釜ハ皆平釜ナリ、別ニ手鍋ヲ用ユルハ上等生活者ナリ、食膳ハ「ツアザ」ト称シチヤボ台ナリ、寢具トシテハ下等社会ニハ殆ト無シ、上等社会ニテハ厚沙羅ヲ敷キテ薄キ小サキ布団一枚ヲ用ユル而已、夏季蚊軍ニ対シテ蚊帳ヲ用ユズ、南京虫モ敢テ痒痒ヲ感セサル如シ、備附ノ物品トシテハ長櫃・据戸棚等アリ、表面ハ中々奇麗ナル木材ニテ造ラレアレトモ中ヲ檢スルバ先ツ悪臭鼻ヲ衝テ来リ、ボ口屑ノ雑居所タリ、其他室内一般嘗テ塵払ヘセシ事ナキ有様ニテ塵埃ノ堆積セル驚ク許リナリ、夜間ハ豆油ヲ用ユテ明ヲ取ル石油モアリ、都市大家ニテハ火災ノ憂ナキ為メ蠟燭ヲ用ユ

家屋 家屋ハ重ニ長方形ニテ四方ハ石垣ニテ組ミ屋根ハ瓦及ヒ粟稗・葦子葺キナルモアリ、石ヲ組ミタル間隙ハ石灰等ニテ塗ラレ、此ノ石垣ハ柱ト壁トヲ兼セルニテ他ニ柱等ハ奥行キノ広キ家ニテ中間ニ立テアル而已、石垣ヨリ石垣ニ梁ヲ渡シ兩側ハ上部ヲ三角形ニナシ水走りノ斜面ヲ造リ南面ニ多ク窓ヲ造リ北面ニモ多少窓アリ、通常ノ家ハ家ノ中間ニ入口ヲ造リ兩方ニ居間ヲ造ルナリ、

居間ハ両側ニ臥床アルト小ナルハ片側而已ナルアリ、床部ハ六尺土間ハ三尺ナルアリ六尺ナルアリ九尺位ナルアリ、大小不等ニシテ臥床ノ両側ニアルハ大凡六尺以上ナリ、床乾土ヲ以テ造ラレ処ニ石ヲ積ミテ柱トナス、乾土ハ一尺五寸ニ五寸位ノ長方形ニ鍊瓦ノ如ク鍊リテ秋季ニ乾カシ置クナリ、元来粘液ノ多キ土質ナルニヨリ中々堅クナリテ焼カズトモ中々折レサルニ至ル、如此シテ之レヲ並ヘテ床ヲ造ルナリ、尤モ支那家屋ハ防寒ニ適スル様ニ造ラレアリ、各入口ニハ竈ヲ設ケ其竈ノ火氣ハ余焰竈ノ口ニ出サズシテ床下ヲ通過シテ家ノ外側ニ立テラレタル烟突ニヨリテ迸ル様ノ仕掛ニテ、例ノ乾土ハ至然ニ純然タル鍊瓦ノ如キ効用ヲ生スルナリ、又釜戸ヲ使用スル度ニ火氣ハ床下ニ満ルニヨリ冬期ナドモ中々能心地ニ就眠シ得、温度モ床ガ厚キ土ニテ造ラレアルニヨリ中々冷ヘザルニヨリ晩ニ温度ヲ保タシムレバ曉迄冷ヘズ、床下ニ木片ヲ用ユサルハ火災ヲ防ク為メナリ、故ニ両側ニ床アル家ニテハ入口四隅ニ竈ヲ据ヘ置クナリ、大家ニ至リテハ別ニ火氣ヲ造ル所ヲ造リ石炭ノ粉ヲ鍊リタルヲ使用シテ温床ヲ作ル、如此ハ夏季ニハ火ヲ点セサルニヨリ好キモ普通ノ構造ハ日用ノ飲食物ヲ調製スルニ用ユル火氣ヲ利用シタルナレバ夏季モ亦タ廃スルヲ得ズ、唯サヘ空氣ノ流通不完全ナル家屋ニ床下ヨリ暖氣ヲ加ワヘラレテハ実ニ蒸スガ如キ熱トナル、去レトモ土人ハ別竈ヲ造ラズ只床ノ上ニ大豆・小豆・粟ヲ散布シテ幾分ノ熱氣ヲ殺グ、床ノ上ニハ高粱ノ稗ヲヒシギテ造リタル筵ヲ敷ク、入口及ヒ窓等ハ腰障子若シクハ障子ニテ入口ハ両面ニ窓ハ上下ニ開ク様ナル仕掛ナリ、梁等ハ皆楊樹等ニテ造ラル、障子ノ紙等モ檐ノ出方少ナキニヨリ雨ノ侵入ヲ恐レ大凡油ヲ塗レリ、居間ハ各八尺位宛ニ区劃セラレ普通両側ニ臥床スル、家ハ総間數八ヶ片側ナルハ四ヶ乃至三ヶナルアリ、又路傍ノ飲食店等ハ中間ヲ仕切ラズシテ十四五間ノ長方形ナルアリ、概シテ家ノ周圍ニハ土障ヲ造リ門ヲ設ケアリ、土壁ノ高さ五六尺、大家ニアリテハ丈余ノ鍊瓦ニテ築キ純然タル城郭ノ如ク所々銃丸ヲ築キ望楼ヲ造レルアリ、行政不完全ニテ馬賊ノ横行甚ダシキ地方ナレバ各自々衛ノ為メ周圍ヲ堅固ニスルニテ各戸犬ヲ飼養スルモ亦タ同様ナリ、厩舎等ハ雜小屋ト連ナリ造ラレタルモアリ全ク屋外ナルモアリ、馬草槽ハ花崗石ニテ長サ六尺乃至八尺巾二尺位ニテ數頭ヲ連ネテ同槽ニテ食セシム、穀類ハ高粱ヲ骨トシ土ヲ塗リテ丸ク造リ屋根ヲ葺キタルアリ、四角ニ造ラレタルアリ、皆夫ノ一方二三尺ニ二尺位ノ窓ヲ切りテ茲ヨリ出入セシム、商家ノ大ナルニ至リテハ高粱稗ニテ編ミタル巾二尺位ニテ長キモノヲ円ク卷キテ下部ニハ粟稗等ヲ敷キ穀類ヲ入レルニ随テ逐次高ク卷キ上ケ徑八九尺高サ一丈余ニ達シテ后チ屋根ヲ葺クニテ如此倉庫ヲ數十有セル商家モアリ、重ニ大豆・高粱・粟等ナリ、一

般家屋ハ防寒ト風勢ト不堪ユル様ニ造ラレ、多ク石ヲ用ユルハ木材ノ少ナキ為メ、防寒ニ注意スルハ沍寒ノ地ナルニモ関セズ綿ノ類少ナク布団等ノ防寒具ナキ為メ、風ハ四季絶ヘズ殊ニ春季等ニアリテハ中々猛烈ナルニヨル

生業 生業ハ重ニ農ニシテ都市ハ商賈ナルハ内地ニ同シ、工業ハ少ナシ、農業ハ至極幼稚ニシテ夫ノ方法不完全ナルハ土地広キ割合ニ人口少ナク人民怠惰ナルヨルト雖モ夫ノ馬若クハ牛ヲ使用シテ耕作スル方法ニ熟達セリ、僻令^區バ最初耕スニハ目下ノ馬耕具ニ似タルモノニテナシ又畦ヲ造ルニモ同様騾馬若クハ馬ニ引カシム、騾馬若クハ馬ハ更ニ人ノ指導ニヨラズシテ町余ニ及ブ、長畦モ真直ニ歩ミテ造リ夫ノ跡ヨリ直ニ播種ヲナス、高粱・大豆・麦類ハ手ニテ、日本ハ足下ヨリ前ニ播クト反対ニ前方ヨリ足下ニ播キ来ル、又粟類ノ如キ小粒ナルハ瓢箪ニ竹ノ節ヲ抜キタルヲ付ケ竹ノ尖端ニ高粱ノ穂ノ如キ細カキ枝ヲ有スルモノヲ挟ミ竹ヲ輕ク敲キツ、歩ムナリ、又畦ハ必ス最初耕シテ高キ所ニ僅カニ溝ヲ造リ又土ヲ掩フ、器械ハ畦ヲ造ル器械ト連ナリ畦ヲ造ル傍ラ土ヲ掩フナリ、土ヲ掩ヘタル后チハ六尺位ノ細長キ石ノ丸太ヲ馬ニ引カシメテ堅メルナリ、之レハ風勢強ク天氣続キテ吹き飛サレヌ準備ナリ、一般滿州地方ヨリハ遼東地方肥料ヲ製スルニ勤ム、肥料ハ馬糞等ニテ人間ノ大小便等ハ更ニ使用セズ、産物ハ遼東半嶋地域狭小ナル為メ輸出スル程ニ足ラズ食要^用トセル唐黍等ナリ、滿州地方ニアリテハ輸出品トシテハ大豆・高粱等、粟・稗・小豆・小麦等ハ重ニ食料ニ用ユラレ陸稻モ多少ハ有レモ彼レ等ガ佳辰等ノ美食トシテ使用セラ、ルニ外ナラズ、渾テ農期ハ四月上旬ヨリ十月上旬頃ニ全ク収獲ヲ終ル、故ニ夫ノ以后ノ期間ハ重ニ運輸業ヲナシ之レガ為メニ各戸ニ馬匹六七頭ヨリ二十余頭ニ及ヘルアリ、皆車輛ニテ一車輛三馬以上六馬ヲ附スルアリ、汽車等ノ便ハ僅カニ東清鐵道アル而已ナレバナリ、商家ハ一般有富ナリ、蓋シ交通不便ノ為メ法外ノ暴利ヲ貪リテ農民等ニ売渡ス故ナラン、売買ノ方法ハ重ニ斤量ニヨル遼河沿岸ノ商業地タル鉄嶺・通江口等ニハ非常ニ大ナル商店アリ、奉天・遼陽等ハ諸般ノ商店内地ニ勝ルカト見受ケラル、南方牛莊・營口又商業地タリ、金州ハ日清ノ役ニヨリ名ヲ知ラルト雖モ比較上盛大ナラズ、蓋シ青泥窪ニ築港セラレ鐵道ニヨリテ運搬セラレ金州ハ途上ノ一駅亭トナリシ故ナラン、察スルニ夫ノ以前ハ水路ニヨリ金州灣ニ船舶ヲ集メ為メニ繁盛ヲ来セシナラン、又稍々大ナル部落ニハ豆腐・饅頭等ヲ商フアリ、豆腐ハ堅クコゲ臭シ、饅頭モ砂糖少ナク彼レ等ハ豚肉・忍肉等ヲ包ミタルヲ賞美ス、日本軍到リテ小豆アンヲ入レタルヲ製シテ汚キ麻袋ナドニ入レテ片語ノ日本語ニテ「サトウ」^{ニホン}「マントウ」^{シナ}ト呼ヒ売リニ来ル、彼レ等ハ商業ノ為メ日本語ノ研窮ニ熱心ナリ、如此小

露店ニハ「フルイ」ノ輪ノ如キニ赤キ布ヲ付ケテ檐先ニ釣り置ケリ、一般商業ニハ熱心ニテ熟練セリ、実ニ米国等ニテモ日本ノ美術品等ハ皆支那商人ノ手ニヨリテ「マム」介セラレツアリトカ、兎ニ角確カニ商業国タリ、工業トシテハ更ニ見ル可キモノナカリシ、最モ戦役間ハ如此機関ハ廃セラレ居リシニモ依ルナラン、牛莊附近ニテ大豆ヲ絞リテ豆油ヲ製シ豆粕ヲ造ルヲ見タリ、之レ而已ハ産物ノ上ヨリスルモ将来益々發達スルナラン、其構造ハ甚タ略ナレトモ又簡便ナリ、例ニ馬ニ引カシムル仕掛ニテ大ナル径九尺許リニテ中間ニ柱「柱」ヲ立タル石臼アリ、中間ノ柱ヨリ横木ヲ渡シ夫ノ横木ニハ非常ニ大ナル石ノ丸太ヲ附シ石丸太ノ中間ヲ貫キテ出テタル柱ヨリノ横木ニ繩ヲ付ケテ馬ニ牽カシメ、横木ハ柱ヲ廻リテ石丸太ハ石臼ノ上ヲ転スル様ニナシ、又石丸太ノ前ニ穀入箱ヲ附シ箱ヨリハ適度ニ石臼ノ上ニ豆ヲ落シ之レヲ一粒並ニナス板ヲ備ナヘ、其趾ヨリ石丸太ガ豆ヲ圧裂シ又之レヲ石臼外側ニ掻キ落ス器械ヲ附シアリ、渾テ馬力ニヨリテセラル、圧裂シタル豆ハ更ニ円形ノ圧搾器内ニ入レラレ本邦ノ油器ノ如クシテ絞ルナリ、油ハ灯火ニモ食用ニモ用ヘラレ輸出品ノ一タリ、此ノ附近ニハ繭ヲ産スル由ナリシモ飼育方法現品等ハ見受ケサリシ、機業モ亦タ僅カニ一部落ニテ日本ノ旧式即チ地機ノ如キモノニテ白木綿ヲ織レルヲ見タリ、其他彼レ等使用セル靴ハ皆唐黍ノ皮ヲ以ツテ底ヲ製シ上部ノ縫箔ハ土人婦女子ノ作業ニカ、ル、遼東半島双嶋灣附近ニハ製塩事業アリ、戦時其ノ業ヲ廢セリ為メニ其方法ヲ知ラズト雖モ高サ一丈径六尺位ノ塩塚ヲ見受ケタリ、此ノ附近ハ塩田ヲ構造セリ、塩ハ結晶体ニテ不良ナリ、青泥窪附近ニテハ土人ノ兵站部使丁トシテ木牽ヲナスアリ

典儀 土民ハ一般ニ非常ニ祖先ヲ尊ブノ習慣アリ、故ニ夫ノ葬儀等ハ頗ル丁重ニシテ父母死スレバ百日喪服ヲ着シ三年間喪帽喪靴ヲ使用ス、故ニ喪アルニ当リテハ棺柩ノ構造非常ニ丁寧ニシテ大ナル棺ニシテ木材モ亦タ堅固ニシテ中間ハ石灰様ノ品ニテ塗り費用下等尚ホ三十円以上ヲ要ス、故ニ壯時他家ニ稼スル時ハ予メ棺材ヲ準備ストカ伝ヘラル、如此堅固丁寧ニ造ラル、ハ屍体ヲ入レテ后百間「百間」其家ノ入口ニ按置シ朝夕其前ニ哭シ生前ノ洪恩ヲ謝スルニ為メ夏季等モ尚ホ腐蝕シテ悪臭外方ニ漏レサル様注意スルナリ、又葬送当時ノ情状ハ死者アレバ新ニ白木綿ノ喪服及ヒ喪帽喪靴ヲ着ス、皆白色ナリ、近隣ノ父老又集リ来リテ靈柩ノ周圍ニ在リテ三日三夜大声ヲ発シテ哭ク、其状更ニ涙痕ヲ留メズシテ大声痛哭シ音頭取りアリテ号令スレバ忽チ休ミ例ノ如ク談笑セリ、乍然舎營地附近ニアレバ徹宵号哭セラル、ニヨリ睡眠ヲ妨グルコトアリ、又少シク富裕ナル家ニテハ鐘・太鼓・簫・七リキ等ヲ鳴ラシ哀

ヲ挙グ、三日ヲ過グレバ近隣ノ人々集リ来リテ高粱飯ヲ炊ギ豆ウドン等ヲ煮テ食ヘ、靈柩ハ依然安置シ、死者生前ニ着用セシ衣類ヲ竹ノ庭箒ニ掛ケテ、家族ハ皆白衣白帽ヲ着シ例ノ樂器ヲ奏シ父老ハ勿論家族一同一層大声ヲ発シテ痛哭シテ家ヲ出テ村ヲ一周シ、村ノ仏舎ノ前ニ至リ死者ノ着衣ヲ靈柩トナシ、暫ラク仏前ニ慟哭シ彼ノ衣ヲカケタル竹箒ヲ背面向ヲナシテ引出シ仏舎前ニ於テ火ヲ放チテ燒キ棄ルヲ家族一同ハ整然トシテ見詰メ、燃ヘ終ルヲ見ルヤ一同相抱テ慟哭流涕ス、近隣ノ人々ハ共々之レヲ助ケテ家ニ還ル、家族共ハ家ニ達スルヤ否ヤ入口ニ安置セル靈前ニ打仆レ前後正体ナク哭ク、樂隊ハ此間絶ヘズ隣レナル樂譜ヲ奏ス、好キ頃合ニ至レバ近隣ノ人々再ヒ家人ヲ助ケ起シテ慰ム、家人等真ニ流涕セリト雖モ忽チ哭キ休ミテ平然タルニハ見ルモノ呆然タリ、蓋シ此ノ日慟哭ノ大小ニヨリテ夫ノ家族カ死者ニ對スル真情ヲ別タル、トカニテ當時ハ全力ヲ尽シテ哭スナリ、如此ニシテ式ヲ終リ自后百日間ヲ経テ已定ノ墓地ニ葬ル、墓地ハ別ニ地上ヲ深く掘ラズシテ附近ヨリ土ヲ寄セテ塚ヲ造ル、冬期ハ地上凍結セルヲ以テ棺柩ノ儘墓地ニ据ヘ置クナリ、但シ家内ニハ位牌等ヲ留メズ宇蘭盆ノ日ニハ白紙ヲ結ヒタル木標ヲ立ツ、墓辺ハ間々松柏ノ蒼々タルヲ見ル、又室内ニハ神トモ付カズ仏トモ付カヌ小舎ヲ設ケタルアリ、祭時ハ必ず紙ヲ燒キテ奠ス、爆竹ヲナス

婚儀ハ遼東半嶋ノ小村ニテ見シ而已ニテ一般ヲ察スル能ハズト雖モ兎ニ角ク一生ノ晴レ儀式ナリ、世ニ金ヲ出シテ婦ヲ買ヘ求ムル様ナル取佐汰〔抄〕セラルレトモ、察スルニ女子少ナキ地方ナレバ女子服装等ノ為メ新郎ヨリ送金スルナラン、尤モ年齢等ニヨリテ金額ノ差異アリトカ、当日ハ粗造ナル荷車ニ四角ニ柱ヲ立テ御輿ヲ造リ赤布ヲ以テ四辺ヲ掩ヘ頂上ニハ鳳鳥〔鳳凰カ〕ナド紙ニテ造リ立テタル馬ニ牽カシメテ新婦ノ家ニ来ル、彼レ等ハ余リ他国人等ノ看望ヲ好マサル様子ナレバ内容ヲ知ル能ハズ、新郎ノ媒介人ニ引率セラレテ近隣ヲ見舞フ、當時入口ニ筵ヲ敷キテ〔マ〕シテ還ルナリ、夫ノ帰還セル夜間ナリシ為メ見ズ、彼レ等ハ嚴重ナル一夫一婦主義ナリ

正月ニハ家屋ノ入口・窓ノ前后・厩舎・倉庫・神前渾テ赤紙ニ日出度ク欲ノ深キ事ヲ書シテ貼付ス、之レハ毎年張り替ヘルナリ、其言字ニハ万宝重来・黄金万両・天子万年・富貴不招来〔マ〕・牧畜繁殖等ノ類ナリ、戸ニハ戸神トテ昔シノ武神ガ武装セル様ナル絵ヲ貼付ス、之レ門松メ飾リノ同意味ナリ、渾テ祭日ニハ紙ヲ燒シ香ヲ焚キ紙砲トテ此地玩物店頭ニアル雷声火花様ナル者ヲ連発セシム、之レハ歳末・二十三夜・除夜等ニシテ二十三夜ニハ神明上天スルトカ称ス、又白蠟燭ハ仏具、赤蠟燭ヲ神具トセリ、日常使用

ノ蠟燭モ亦タ赤色ナリ、陽曆一月元日ニハ門松ヲ建テ、^メ張リ紙ヲ切り下ゲ緑門ヲ造リテ新年ヲ祝セシ為メ彼レ等ハ異様ニ感シタリ、又新年々末等ニハ各都市ニテハ多少ノ祝意ヲ表スル贈物ヲナスト見ヘ、海城ニ親戚ヲ有スル黄泥窪ノ商家ニ一ケノ菓子箱ト手紙トヲ持チ来リシ飛脚アリ、彼レハ途中数泊ヲ重ネテ来リシ由、菓子箱ハ金箔ヲ付ケタル赤キ紙ニテ張リタル杉箱ニシテ、中ナル菓子ハ早速余等ノ茶菓子トナリヌ、カステラ・ウチモノ、カリント等ニシテ油臭キニハ閉口セリ、文明ノ今日鉄道線路附近都市ヲ除クノ外皆此ノ使ニヨリテ要事ヲ弁セラル

学堂 学校ハ各都市ニテサヘ目ニ立ツ程ノモノナシ、山間ニテハ吾ガ国昔シノ寺小屋式ニシテ一堂僅カニ五六人ヲ容ル、ニ過キス、学フ所ハ考經・清朝譜・古烈士伝等ニシテ四書五経ヲ講読スルハ少シナリ、児童ハ皆暗誦^{マヤ}適ニシテ更ニ要義ヲ知ラズ、一般学問ハ遺伝的夫ノ家ノ長上ニヨリ教育セラル、今日所要文辞ハ解セリ、如此有様ナレバ現下ノ情況、国体立脚地、世界ノ景況等ハ更ニ知ルヨシナク只風説ニヨリテ如聞スルノミ

仏舎 等モ所々ニ見受ケラルト雖モ此レガ住職ナドヲ見受ケズ、一般敗蕪セリ此人民貪縷ノ余リ遂ニ維持スル能ハザルナラン、奉天附近北部ノ地ニアリテ仏国及ヒ英国ヨリ来リシト云フ教会堂建設セラル

魚類 遼東半島西海岸ニ在ル時目撃セン所ナレトモ種類大凡内地沿岸ニ等シク、鯛・平目・鯖・鰻・鱸・コチ・アイナメ・アナゴ・イシモチ等ニシテ、尤モ多量ニ産シ又土人ニ賞玩セラル、ハ大刀魚^本ニシテ渾テ漁期ハ六月ヨリ八月下旬迄、此ノ海浜ハ南東ノ風波穏カニ西北ノ風波高シ、故ニ南東ノ微風アルハ此ノ短期間ナリ、味ハ一般不味ナリ、鯛ハ七月上旬中旬ニテ僅カ間ナリ、太刀魚ハ最初ヨリ最終迄獲ラルル口角尖端ヲ有スル長身ノ魚ニシテ土人ハ之レヲ干シテ冬期中ノ副食物トナス、一尾一斤位ニテ八錢ヨリ五六錢、一舟二百五十乃至三百ヲ得ルコトアリ、貝類ハ産スルヲ見ズ

官憲 奉天・遼陽等ニアリテハ吾ガ行政官ト同シク路頭ニ立テ非常ヲ警戒セルモノアリト雖モ郡部地方ニアリテ所々ニ義勇兵ラシガ警戒スル而已、武器トシテハカン打銃少数ト棍棒ニテ赤黒ニ染メ別ケアリ、此レガ屯所ニハ黄龍旗ノ三角形ナルヲ槍状ナル桿ニテ立テラレアリ、彼レ等ハ重ニ乗馬セリ、馬ハ支那馬ニテ短小ナリト雖馳走中々速ナリ、此レ等ノ官憲ハ常ニ馬賊ト称スル乗馬盜賊ニ輕蔑セラレ、馬賊ハ白昼尚ホ商家ニ入りテ金品ヲ強奪シ夜間ハ所々ニ小銃声ヲ放チテ威迫スルヲ常トセリ、之レ等ニ対スル刑

法ハ中々嚴重ナリ、一度官憲ノ手ニ捕ハルレバ皆斬ニ所セラル

卑見 概シテ遼東半嶋・滿州共ニ土地ノ割合ニ人口少ナク山岳殖林ニ堪ヘサルニ非ス、耕地尚改良ヲ加フルノ余地充分ニシテ将来有望ナラズト雖モ今后数ケ年充分当局保護ノ下ニ資料^{「マム」}ヲ投セズンバ到底見ルベキモノナカラン、先ツ学校ヲ起シ教育ヲ統一シ国体ヲ知ラシメ交通機關ヲ造リ富源ヲ与ヘ而シテ后始メテ之レヲ文明ニ誘導セザルベカラズ、医院ヲ起シ衛生ヲ勤メ行政ヲ確實ニシテ人民ニ依頼スル所アラシムルモ目下ノ急務ナラン、各都市ヲ除クノ外ハ草根木皮ノ藪医者サヘ稀レニ見ルノミ、人々病ヲ得レバ運命ヲ天ニ任スル而已、藪医者ヲ尋ネテ薬用スル巨大ノ金子ヲ要セザル可カラズ、殊ニ彼等ノ蛮野ナル規律ノ之レヲ正スナキトハ言ナガラ、四五歳以下ノ小兒ナドハ已ニ生存ノ見込ナキ時ハ山野ニ放棄セルモ見受ケラル実ニ言フニ忍ヒズ、又一般人民ノ人々自衛ニ而已勤メ国家的公益的精神ナキハ、一ハ彼レ等ノ性情ナリトハ言ナガラ、一ハ之レガ統割^{「體」}ニ当ルモノ其職ヲ得サルガ為メ人々依頼スル所ナキニヨルナラン、過去十数年此地ノ歴史經過ヲ考察スレバ、彼ノ遊女ガ晨ニ呉客ヲ送リ夕ニ越客ヲ迎フルニ異ナラズ、客夫ノ者ニ真情ナクシテ奈ゾ彼等ノ真情ヲ發揮セシムヲ得ンヤ

日露戦役雑記

講和当時ニ敵ノ見タル吾ガ軍ノ兵力

黒木大将ノ第一軍 日本軍主力ノ右翼ニシテ三野戦師団・四后備旅団及ヒ補充旅団ヨリ成ル、尚ホ之レニ新編成ノ二師団ヲ以テシ、

其総計百四乃至百八大隊、其兵員八十一万五千乃至十二万人

奥大将ノ第二軍 主力ノ左翼ニシテ四野戦師団・二後備旅団及ヒ補充旅団ヨリ成ル、之レニ新編成ノ二師団ヲ以テシ、其総計百乃至百四大隊、兵員十一万乃至十一万五千人

乃木大将ノ第三軍 全作戦局面ノ左翼ニシテ三野戦師団・三后備旅団・一補充旅団ヨリ成リ、之レニ新編成ノ一師団ヲ以テシ、総計七十六乃至八十大隊ヨリ成ル、兵員約八万五千乃至九万人

野津第四軍 后衛ニシテ二野戦師団及ヒ二后備旅団ヨリ成ル、其總計四十大隊、兵員約四万五千人

川村大將ノ第五軍 全作戦局面ノ右翼ニシテ一野戦師団・三后備旅団・三補充旅団ヨリ成ル、新編成ノ一師団ヲ加ハヘ、總計六十六乃至七十二大隊、兵員約七万三千乃至八万人

長谷川大將ノ第六軍 東方ニ在リテ行動スモノ、其兵数ニ至リハ未詳ナリ

右ノ如クナレバ大山總司令官ノ下ニアル兵力少ナクモ六十方ヲ下ラサル可シ

露国ノ損害高

仏国マタン新聞露都在留ノ通信員ハ日露戦争ニ於ケル十四ヶ月間ノ露国損害高ヲ其筋ノ公書ニ就テ調査シタルモノヲ報告セリ、即チ左ノ如シ

人員ノ損害 遼陽・沙河・奉天・旅順口・日本海、其他海陸大小数十戦ノ損害及ヒ病兵合セテ約五十万人

物質的損害 即チ鉄道・築城・築港・諸経営、約九億千四百万留

捕獲セラレタル砲数 千四百八十門、価一千万留

艦隊ノ損害(波艦隊ヲ除ク) 一億六千万留

捕獲セラレタル商船 一千万留

其他軍資金

總計二十億留以上

開戦前ノ大略

明治三十一年三月二十七日発表セラレタル遼東半島租借ニ関スル露国ト清国ノ条款

(一) 露国ハ二十五年ヲ限り旅順口及大連灣ヲ清国ヨリ租借ス、其区域ハ遼東角ヨリ北へ清里約百五十里東西約八十里トス

- (二) 大連ヲ開放シテ貿易港トナシ旅順口ハ露清兩國ノ船舶ニ限り出入ヲ限ス
- (三) 東清鐵道ヲ延長シテ旅順口・大連灣ニ達スルコト

露国ノ敷設シタル西比利亞及ヒ東清鐵道

西比利亞三〇四八露里、后貝加爾一〇九六露里、烏蘇里七二二露里、東清鐵道二四〇二露里、合計七、七八二露里之レニ投シタル工費額、西比利亞線五四七、一二二、六五〇留、東清線三〇八、〇〇〇、〇〇〇留
起工明治二拾四年ニシテ、同三十五年ニ至リ全部開通セリ

明治三十五年日英同盟ノ結果ハ露国撤兵条約トナリ、第一期撤兵ヲ実行セシノミ、第二・第三期ノ撤兵履行セラレズ、却テ韓国ノ蚕食トナラントシ、吾ガ帝国政府ガ第一回ノ滿韓問題ノ交渉ハ明治三十六年七月二十八日ニ始マル

協商基礎文

第一条 清韓兩帝国ノ独立及ヒ領土保全ヲ尊重スルコト、並ニ兩國ニ於ケル各国ノ商工業ノ為メ機會均等主義ヲ保持スベキ事ヲ相互ニ約スルコト

第二条 露国ハ韓国ニ於ケル日本ノ優勢ナル利益ヲ承認シ、日本ハ滿州ニ於ケル鐵道經營ニ付キ露国ノ特殊ナル利益ヲ承認シ、併テ本協約第一条規定ノ下ニ右劃定セラレタル兩國各自ノ利益ヲ保護スルカ為メ、必要ナル措置ヲ日本ハ韓国ニ、露国ハ滿州ニ於テ執ルノ權利ヲ相互ニ承認スルコト

第三条 日露兩國ハ本協約第一条ノ条項ト背馳セザル限り韓国ニ於ケル日本及滿州ニ於ケル露国ノ商工業的活動ノ發達ヲ阻止セザルコトヲ相互ニ約スルコト

又今后韓国鐵道ヲ滿州南部ニ延長シ以テ東清鐵道及ヒ山海關牛莊線ニ接続セシメントスルモ之ヲ阻礙セサルヘキコトヲ露国ニテ約スルコト

第四条 本協約第二条ニ掲ケタル利益ヲ保護スル為メノ目的又ハ國際紛争ヲ起スベキ叛乱若シクハ騷擾ヲ鎮定スルノ目的ヲ以テ、日

本ヨリ韓国ニ或ハ露国ヨリ満州ニ軍隊派遣ノ必要ヲ見ルニ於テハ、其派遣ノ軍隊ハ如何ナル場合ニ於テモ實際必要ナル員数ヲ超ユベカラサルコト、且右軍隊ハ其ノ任務ヲ果シ次第直ニ召還スベキコトヲ相互ニ約スルコト

第五条 韓国ニ於ケル改革及ヒ善政ノ為メ助言及援助(但シ必要ナル軍事上ノ援助ヲ包含スルコト)ヲ与フルハ日本ノ専権ニ属スルコトヲ露国ニ於テ承認スルコト

第六条 本協約ハ従前韓国ニ対シ日露両国間ニ結バレタル總テノ協定ニ替ルベキコト

右ノ提議ニ対スル露国ノ対案

第一条 韓帝国ノ領土保全並ニ独立ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二条 露国ハ韓国ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ、並ニ第一条ノ規定ニ背反スルコトナクシテ韓国ノ民政ヲ改良スベキ助言援助ヲ同国ニ与ルハ日本ノ権利タルコトヲ承認スルコト

第三条 韓国ニ於ケル日本ノ商工業的企業ヲ阻礙セザルコト、及ヒ第一条ノ規定ニ背反スルコトナク右企業ヲ保護スルガ為メ採ラレタル渾テノ措置ニ反対セザルベキヲ露国ニ於テ約スルコト

第四条 露国知照ノ上右同一ノ目的ヲ以テ韓国ニ軍隊ヲ送遣セラルハ日本ノ権利タルコトヲ露国ニ於テ承認スルコト、但シ軍隊ノ員数ハ實際必要ナルモノヲ超過セサルベキコト、且ツ軍隊ハ其ノ任務ヲ果シ次第直ニ召還スベキコトヲ日本ニテ約スルコト

第五条 韓国領土ノ一部タリトモ軍事上ニ使用セサルコト、及ヒ韓国海峡ノ自由航行ヲ迫害シ得ベキ兵要工事ヲ韓国沿岸ニ設ケサルベキコトヲ相互ニ約スルコト

第六条 韓国領土ニシテ北緯三十九度以北ニ在ル部分ハ中立地帯ト見做シ兩締盟国孰レモ之レニ軍隊ヲ引入サルベキコトヲ相互ニ約スルコト

第七条 満州及夫ノ沿岸ハ全然日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト

第八条 本協約ハ従前韓国ニ関シ日露両国間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト

見来レバ何スレゾ夫ノ主義ノ全然相反セルヤ、而シテ彼レハ一面如此無謀ノ通謀^謀ヲ発シ一面兵力ヲ増加シテ同年十月奉天ヲ占領シ根

抛地トセリ、又韓国沿岸龍岩浦ニ租借地ヲ造リ韓ヲモ蚕食セントセリ、帝国政府ハ尚ホモ終始慎重ノ態度ヲ取り数回ノ交渉ヲ重ネシモ、由来真実ニ協商ノ意ナキ露国遷延時日ヲ費ス而已カ、益兵員ノ動員ヲ行テ満州ニ送り韓境ニ向ケ事実上滿韓ヲ併呑セントセリ、吾帝国政府当局者モ断然決スル所アリ、同二十七年二月六日ヲ以テ帝国政府ハ夫ノ侵迫ヲ受ケタル地位ヲ鞏固ニシ且ツ之レヲ防守スル為メ、並ニ已得權利及ヒ正当利益ヲ擁護スル為メ、最良ト認ムル手段ヲ取ルノ休ムヲ得サルニ至リシ旨ヲ露国外相ニ交付シ、茲ニ日露ノ国交ハ断絶セラレタリ

露国捕虜総数

将校 一千〇九十一名 下士以下 六万七千六百二十二名 文官 二十三名

合計 六万八千七百四十名

日本捕虜総数

日軍開戦以来ノ損害

戦死者 四万三千二百十九人 負傷者 十五万三千六百七十三人

生死不明者 五千〇八十一人 外傷者 六千四百五十六人

平病患者 二十万三千二百七十人 伝染病者 一万七千八百六十六人

合計 四十三万九千五百六十六人

備考 右ノ内病者ハ統計上ニテ一人ニテ二度病氣ニカ、レバ二人トナル、数度同様ナリ、外傷者トハ馬ノタメニ嚙蹴セラレ又ハ靴傷

ヲ云フ

戦地還送予備病院入院総数二十八万五千五百七十八人 内全愈復隊セシモノ約六万人ナリ

抑モ戦役ハ火器ノ進歩ニ連レテ益々惨烈ヲ極ムベシト雖モ、亦タ文明ノ武器トシテ尤モ使用セラル、小銃彈丸ハ皆ニツケル被甲ニシテ六ミリノ小形ナレバ、負傷后ノ施術ニ簡便ヲ与ヘ随テ死者ヲ出スコト少ナシ、被甲アル為メ体内ニ鉛毒ヲ止メズ、故ニ傷口ヲ洗ハズシテ更ニ腐蝕セズ、威力神ノ如キ機関砲モ亦タ同様ナリ

旅順要塞概略

旅順要塞ハ陸上ヨリハ五月二十六日金州南山ノ攻陥ト共ニ封鎖セラレ、海上モ亦タ同日附ヲ以テ封鎖ノ宣言ヲ発表シテヨリ、同七月三十日ニ至リ本防禦線ノ攻撃ニ移リ数回ノ攻撃ヲ以テシ、或ハ強襲ニ或ハ正攻法ニヨリ吾ガ帝国ニ取リテ最モ祝スベキ明治三十八年一月一日ヲ以テ敵將司令官ヨリ開城降伏ノ通牒ニ接ス、優渥無窮ナル吾ガ 皇帝陛下ニハ敵軍ガ能ク己ノ祖国ノ為メ防戦セシ功績ヲ嘉ミシ、優詔ヲ下シテ武士ノ面目ヲ保タシムベキ旨達セラレ、将校以上ノ佩劍及ヒ宣誓帰国ヲ許サレタリ、独国皇帝ハ攻守両將軍ニ同国最高ノ勲章ヲ送ラレタリ

以上七ヶ月間吾ガ軍ノ払ヘタル犠牲モ亦タ多大ナリ、参与部隊及ヒ指揮官左ノ如シ

指揮官長大将乃木希典、第一師団長松村務本、第十一師団長土屋光春、第九師団長大嶋久直、第七師団長大迫尚文、其他后備旅団攻城砲兵隊・海軍砲隊・重砲隊

開城当時ニ於ケル捕虜数及ヒ物資

五 陸軍ノ部 将官八、佐官五十七、尉官五百三十一、文官九十九、従軍僧侶十三、下士卒二万三千四百三十四、非戦闘員三千六百四十五

海軍ノ部 将官四、佐官百、尉官二百、軍医百〇九、従軍僧侶七、下士卒四千五百、非戦闘員五百

合計三万二千五百〇七人(義勇兵ハ非戦闘員中ニ含ム)、其他在院ノ傷病者約一万五六千人

(馬匹) 輓馬約千八百七十頭、乘馬約百頭

物資

永久堡壘、砲台五十九、(1)火砲、大砲五十四・中口径砲百四十九・小口径砲三百四十三、合計五百四十六門、砲彈八万二千六百七十発、水雷六十ヶ、火薬三万吉羅、小銃三万五千二百五十二挺、拳銃五百七十九挺、爆薬千五百八十八、軍刀千八百九十一挺、小銃実包二百二十六万六千八百発、弾薬車二百九十、輜重車六百〇六、雜種車六十五、乘馬具八十七、輓馬具二千〇九十六、電灯十四、電信機十五、電話機百三十四、回光通信機三、土工具千七百七十一、戦艦四、巡洋艦二、砲艦駆逐艦十四、汽船十艘、小蒸気船八、雜船十二、右ノ外多少ノ修理ヲ加ハヘ使用シ得ル小蒸気船三十五艘アリ

明治三十八年一月二日水師營ニ於テ締結セル開城規約

第一条 旅順口要塞及ヒ該港ニアル露国ノ陸海軍々人及ヒ義勇兵並ニ官吏ハ渾テ捕虜トス

第二条 旅順口ニ於ケル全堡壘・砲台・艦船艇・兵器彈薬・馬匹、其他一切ノ軍用諸材料、官舎・官有諸物品ハ現状ノ儘日本軍ニ引渡スベシ

第三条 前二ケ条ヲ承諾スルニ於テハ其担保トシテ、来ル一月三日正午迄ニ椅子山・案子山・小案子山、及ヒ其ノ東面一帯ノ高地上ニアル砲壘・砲台ノ守備ヲ撤シ日本軍ニ交附スベシ

第四条 露国陸海軍ニ於テ本規約調印当時ニ現在セル第二条ノ諸物件ヲ破壊シ、又ハ其他ノ方法ニ於テ現状ヲ変更スルト認ムルトキハ、談判ヲ廃止シ日本軍ハ自由ノ行動ヲ取ルベシ

第五条 在旅順口陸海軍官憲ハ要塞配備図、地雷水雷其他危険物ノ布設図、及ヒ在旅順口陸海軍編成表、陸海軍將校官職等級氏名簿、文官々職氏名簿、軍隊艦船艇名簿及其乗組人名簿、普通人民人種職業員数表ヲ調製シ日本軍ニ交附スベシ

第六条 兵器(各人携帯兵器ヲ含ム)・弾薬・軍用諸材料・官舎・官有諸物件・馬匹・艦船艇、及ヒ其ノ内部ノ諸物件(私有物ヲ除ク)ハ委ク現在ノ位置ニ整置スベシ、其授受ノ方法ニ関シテハ日露両軍ノ委員ニ於テ規定スルモノトス

第七条 日本軍ハ露軍ノ勇敢ナル防禦ヲ名譽トスルニヨリ、露国陸海軍ノ將校及ヒ所属官吏ハ帶劍及ヒ直接ノ生活ニ必要ナル諸私有品ノ携帯ヲ許ス、又前記將校及ヒ官吏義勇兵ニシテ本戦役ノ終局迄武器ヲ取ラズ如何ナル方法ニヨリテモ日本軍ノ利益ニ反対スル

行為ヲナサ、ルコトヲ筆記宣誓スルモノハ本国ニ還送スルコトヲ承諾ス、陸海軍將校ニハ各人ニ一名宛ノ從卒ヲ隨行セシムルコトヲ許ス、此レ又同様宣誓スベシ

第八条 武装ヲ解除シタル陸海軍下士卒及ヒ義勇兵ハ其制服ヲ着用シ携帯天幕及ヒ所要ノ私有物件ヲ携へ所属將校ノ指揮ヲ以テ日本軍ノ指示スル集合地ニ至ル可シ、但シ其詳細ニ関シテハ日本軍ノ委員ニ於テ之レヲ指示ス

第九条 旅順口ニアル陸海軍ノ衛生部員・經理部員ハ、病傷者及ヒ俘虜ノ救護給養ノ為メ日本軍必要ト認ムル時季迄日本衛生部員・經理部員指揮ノ下ニ残留シテ引続キ勤務ニ服スベシ

第十条 普通人民ノ処置、市ノ行政會計事務及ヒ之レニ関スル書類ノ引続キ、^{「ママ」}其他本規約執行ニ関スル細則ハ本規約附録ニ於テ規定ス

第十一条 本規約ハ日露兩軍ニ於テ各一通ヲ調製シ、調印ノ日ヨリ直ニ効力ヲ生ス

開城乞降書

貴下交戦地域全般ノ形勢ヲ考察スルニ今后ニ於ケル旅順口ノ抗抵ハ不要ナリ、依テ無益ニ人命ヲ損傷セサル為メ予ハ開城ニ付キ談判センコトヲ望ム、若シ閣下之レニ同意セラル、ニ於テハ開城ノ条約順序ヲ討議スル為メ委員ヲ指命シ並ニ予ノ委員ト会合スベキ場所ヲ撰定セラレンコトヲ願フ、予ハ此ノ機会ヲ利用シ予ノ敬意ヲ表ス

旅順攻囲軍司令官 男爵乃木希典閣下

要塞司令官 ステセル

如此シテ天下ノ耳目ヲ集メタル旅順ノ堅塁ハ吾ガ軍ノ手ニ歸セリ、然リ而シテ其当時兵員兵器ハ前記ノ多数ヲ存セシモノヲ、此レヲ彼ノ八月十七日ニ於ケル吾ガ天皇陛下ノ優渥ナル要塞内非戦闘員避難ノ御聖旨及ヒ懇篤ナル吾ガ司令官ノ勸降書ニ対スル傲慢ナル回答ニ相反スルノ甚ダシキヤ、当時ノ回答文「避戦員ノ避難ハ本日午后迄準備ヲ整フルヲ得ズ、且乞降ノ事ハ旅順守兵ノ忍ヒサル処、露国軍人ハ糧尽キ弾尽ル迄決戦センコトヲ欲ス」、其ノ意氣ノ盛ナルヤ、而シテ今何処ニカアル、長大ナル軀幹ヲ有シ短小ナル監視兵ニ附隨シテ嘗テ己ガ経営セシ青泥窪ノ築港ヨリ醜虜ノ身トナリテ出ツ、果シテ何等ノ感カアル

勅語

旅順ハ極東ニ於ケル水陸ノ重鎮^{〔五〕}タリ第三軍及ヒ聯合艦隊ハ協同戮力久シク寒暑ヲ冒シ苦難ヲ凌キ勇戦奮闘克ク其鉄塁ヲ奪取シ堅艦ヲ殲滅シ敵ヲシテ城ヲ開キ降ヲ乞フ^{〔遂ニ脱〕}ルニ至ラシム^{〔ママ〕}

朕深ク汝將卒ノ克ク其ノ重任ヲ全シ偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ミス

皇后陛下令旨

我第三軍並ニ聯合艦隊ハ水陸協戮旅順ヲ重囲スルコト數閱月激戦數百回堅ヲ破リ銳ヲ摧キ辛酸壯烈防備無比ノ天險ヲ冒シ頑強不屈ノ勁敵ヲ剿シ遂ニ彼レヲシテ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシメタル趣 皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我將校下士卒ノ忠誠義勇克ク偉大ノ功勳ヲ奏シタルヲ深ク御感賞アラセラル

皇太子殿下ノ令旨

封鎖數月ニ互リ万難ヲ排シテ能ク其任務ヲ遂行シ攻囲軍ト協力シテ遂ニ旅順方面敵艦隊ヲ全滅シタル聯合艦隊ノ偉大ナル奏効ヲ歎尚ス

第五條 韓国政府ハ統監ノ推薦スル日本人ヲ朝鮮国官吏ニ任命スルコト

第六條 韓国政府ハ統監ノ同意ナクシテ外国人ヲ雇聘セサルコト

第七條 明治三十七年八月廿二日調印日韓協約第一項ハ之レヲ廢止スルコト

右証拠トシテ下名ハ各本国政府ヨリ相当ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スル者ナリ

明治四十年七月廿四日

光武十一年七月廿四日

統 監 侯爵 伊藤博文

内閣總理大臣勲二等 李 完用

備考 明治三十七年八月ノ日韓協約第一項ハ左ノ如シ

シ
韓国政府ハ日本国政府ノ推薦スル日本人一名ヲ財務顧問トシテ韓国政府ニ傭聘シ財務ニ関スル意項ハ総テ其意見ヲ詢ヘ施行スベシ

戦時ノ小幡村

一、小幡村出身兵士総数

一、小幡村ニ於ケル戦時国民ノ義勇奉公軍人家族保護会ナルモノヲ設立ス、会員ハ小幡村々民一統トシ、救助セラルベキ者ハ無資産困難ノ者若クハ会員ノ認メテ救助スベキトナスモノ

数回ノ公債及ヒ献金モ競テ奉公ノ実ヲ顕セリ

一、大字加主野出身兵士 近歩大塚久一郎・同久次・中嶋辰次郎、近工中嶋辰之助・田村茂三郎、近歩比企権次郎、野砲比企藤司、近輜中嶋鶴吉、近補田村安三郎、近歩谷田部重次郎(出征セズ)、騎ノ一誌者、以上拾壹名 負傷者 大塚久一郎・同弟久次・比企権次郎

一、小幡村出身戦死者 大字細谷潮田浪平(様子嶺附近)・大字小幡鈴木大吉(常陸丸)・同神谷庄三郎(常陸丸)・同生田目米吉(鉄嶺附近病死)

一、小幡村青年ハ音楽隊ヲ組織シ兵士ノ出入ヲ盛ニセリ、凱旋当時ニ当リテハ加生野村端日月台ニ凱旋門ヲ建ツ、松ノ丸木ニテ高サ(ママ)幅一丈五尺、サノ字形、中央四尺六尺ノ額ヲカケタリ、尚ホ大国旗ヲ其ノ上ニ交叉ス、費額約十円

日露戦争記念トシテ保管スベキモノ

露国将官佩用正装服ノ肩章一、同将校通常服肩章一、同兵卒用肩章一、同兵卒用雑囊一、同露軍着用襦袢一、露貨一円・五十銭・二十銭・十五銭・十銭銀貨、其他清国貨幣数種、従軍ノ際使用セル物品拳銃一、日本刀一、其他戦地ヨリノ来信等ハ保管記念トスベキ

モノナリ

- 一、明治三拾九年四月一日、同三十七八年戦役ノ功ニヨリ勲八等ニ叙シ白色桐葉章及ヒ一時金二百円並ニ従軍記章下賜セラル
- 一、明治三十七八年戦役ノ際、赤十字社ヨリ救護紀念章ヲ頒布セラル

凱旋后ノ景況

- 一、大字小幡桜井平右衛門氏辟頭第一、同村出身凱旋軍人ヲ招待シ盛ナル園遊会ヲ挙行ス、時陰曆四月一日筑波山神社祭日ナルヲ以テ非常ノ盛会ナリ
- 一、吾ガ小幡村ニ於テモ同閏四月一日ヲ以テ小幡学校内ニテ凱旋ノ式ヲ挙ク、同日新治郡長臨場セラル
- 一、諸軍解隊予后備兵帰郷ノ其節ノ訓示ニヨリ各町村在郷軍友会ヲ組織セラル
- 一、小幡村出身ノ従軍戦病者ノ為メニハ大字同法園寺ニ柱石ヲ建テ英靈ヲ祭レリ